峰寺

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
峰寺

【Ｎコード】
Ｎ１５８９Ｍ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
峰寺は怒っていた。それは過去から連なる何かが原因なのか、深く彼女の性質に根付いている怒りのようである。
彼女の生き様は時を越えて、奈落の底に突き落ちる絶望を終着点として突き進んでいく。仲間たちも置いて、どこまでも彼女はだめになっていく。

緑色の炎が夜空を駆ける

星空というのは美しくて神秘的なものであるが、それを一層俗世から隔離するためであろうか、星空に弧を描くようにして、緑色の炎が駆けていた。弓矢が放たれるかのように次々に、星空に放物線を描いては地に墜落していく緑色の炎は、地上の草原を巧みに燃やした。どう巧みかと言えば、草原を円形の形に燃やしていたのであって、なぜ円形に燃やすかと言えば、その円の内側にある建築物を取り囲むためである。その建築物というのはお城で、星空の中で隆々と立ち尽くしていたものだが、緑色の炎に囲まれつくして、なんだかぼんやりとしていて頼りない。その頼りないお城の麓で、馬に跨りつつ甲冑を身に纏った、騎兵らしき人々が編隊を組んでいる。だが、彼らは緑色の炎に囲まれてしまっているせいか、城の麓から動き出すことが出来ない。首をキョロキョロと動かし、騎兵同士で何やら話し合うばかりである。馬たちはツブらな瞳で、燃え滾る草原に、脅えてしまっているのだろうか、時折後ろによたよたと下がってしまう。騎兵はそんな馬を宥めようとするが、上手くいかず、編隊の隊列は乱れるばかりである。その乱れている内に、炎はさらに草原を燃やし、城を追い詰めていく。このままでは一部隊丸々焼け焦げてしまう、いいや、城ごと全て燃え尽きてしまうだろう。そのことを誰もが想像して、腋や額や尻から垂れ流す冷や汗、一粒二粒どころではなかった。甲冑を身に纏っていて汗ダラダラとは何とも男臭いこと甚だしいのだが、そんなことを言っている場合ではない。何とかして緑色の炎を駆逐する必要があった。

騎兵隊にはスレイプニルという名前が付いているが、平原を素早く駆けて標的を狩り取るという目標の下その名前は付けられたわけである。だというのに緑色の炎に囲われてしまって手も足も出ないという事実は悔しい限りで、隊長であるヴァルヴァルッサは苦しそうだった。彼は発狂しているのだろうか、手を頬に何度も小さく打

ちつけて、ペチンペチンという可愛らしい音を鳴らしていたが、その音を聞き取る配下の者は誰一人としていない。それも当然の話で、今宵、夜空を駆け巡っている緑色の炎たちは異様に爆音で、火花が散る時のような音であったから、草原は騒がしいのである。ヴァルヴァルッサのペチンペチンという可愛らしい音など、誰が聞き取るものか。誰も聞いちゃいないのである。

しかし、問題はそこではない。問題は、いかに緑色の炎を攻略するかの一点だ。

「ヴァルヴァルッサ隊長、ご命令は何でもいいですから！　何か言ってくださらないと混乱して…」

部下の誰かが声を張り上げるが、声は緑色の炎が爆裂する音で遮られる。ヴァルヴァルッサは頬を叩くのを一旦、止めてから、部下の目を見た。

「…何を言えばいいんだ！」

あまりにきっぱりとした断言に、部下はたじろいた。ヴァルヴァルッサは血眼で、どうみても正気ではない様子だった。汗が滝のように溢れ出ていて、馬の背からぶら下がっている足は、よく見れば小刻みに痙攣していた。変なものが顔面から吹き出ていたりもした。それを見た部下は彼のことを哀れに思うと同時に情けない奴とも思い、『こうなったら俺がやるしかない』と覚悟を決めたそうだ。部下は精悍で勇敢そうな、良い顔を、緑色の炎に向けてから、腰より剣をするりと抜いて、情けないヴァルヴァルッサの代わりに声を上げた。

「全員聞け！　正体不明の炎なんかに屈してしまったら、スレイプニルの名が泣くことになるぞ！　俺たちは今までなんのために訓練を行ってきたのだか、考えればすぐに思い出せるだろう。我らの背後にあるこの巨大な城が燃えてしまっては、全てが無駄だったと国民に言われても反論は出来なくなる！だったら、こんなところで怯んでちゃあダメじゃないか！　なあ、みんな、そうだろ！」

みんな、ヴァルヴァルッサでは無い男が、まるで隊長であるかの

ように大声を張り上げたので、混乱した。中には「誰だっけあいつ」と言っている男さえもいた。そう、この勇敢そうな部下は、この非常事態で急に叫び上げたわけだが、普段は隊の中でもろくに目立っていない輩であった。そういう男が急にヴァルヴァルッサを差し置いて隊長面をしたので、『こいつ死にそうになっているものだから気が狂ったんじゃないか』と疑う人間、一人や二人ではなかった。なんと、馬さえも首を傾げていた。だが彼らがそんな風に思ったのも一瞬のことだ。依然、炎は激しい。三百六十度を囲んでいる緑色の炎は、草原を這いつくばりながら、スレイプニルとお城にぐいぐい絶えず接近をしている。誰かの気狂いに付き合うよかは、己の命の保障が必要なのが現在なのである。だが、彼らは一般人では無くスレイプニルだ。スレイプニルには城を守るという役割があるのだから、緑色の炎を駆逐することが、全てを達成するために重要だ。

「突っ込むしかないだろう！　このまま野垂れ死にしたら誰にも顔向けが出来ない。ヴァルヴァルッサ隊長！　あなたが何も命令なさらないというならば、私が炎に突撃することで、道を切り開いて見せますよ」

正義感の強い馬鹿なのかもしれない、この男は。誰もがそう思ったし、錯乱気味のヴァルヴァルッサ隊長でさえ、真っ白な口ひげを震わせながら「なにを…」と、己の部下の単直さを嘆いた。緑色の炎は草原に円形を形作り、その火柱は人間の身長の二倍近くの巨大さである。そこに突っ込むという考えを思いつくこと次第が正気の沙汰ではなかった。だが、勇敢で単直な部下はもはや前だけを見ていた。周りの視線にも、馬の首かしげにも、ヴァルヴァルッサの言葉にも気が付いていない様子だった。

「俺の槍が困難を切り開くぞ…続けぇ！」

その一言を合図にして単直な部下は、飛び交う火の粉を交わしながら馬を駆けさせることで、ドタバタとやかましく出発した。

炎の円の一部分だけを目指して、まっしぐらに駆ける。そういうわけで、スレイプニルの全員が彼を見送った。馬一頭が別れの挨拶

をするかのように「ブルゥ」と唸ったが、すぐに爆裂音で掻き消された。

城は草原に囲まれているが、草原は森に囲まれている。城周辺に住んでいる人間からは黒森と呼ばれている森なのだが、なかなかに広い草原を取り囲んでいるのだから、森の規模がでかいことが伺える。

さて、槍を構えたまま、草原を突っ走っている単直な部下は、名前はパジィーと言う。可愛らしい名前だが、彼の見た目はどちらかと言えばゴツい。パズィーというよりはバズィーといった名前のほうが似合う容姿をしているのだ。だが、ゴツいのだが性格は地味でいつも大人しい。だから部隊の中でも普段は影が薄かったのだ。だから、先程の気合の入った目立ちぶりは、部隊の連中にとってはパズィーの印象に風穴を開けるに十分な目立ちぶりだったと言える。

パズィーは『あの気味の悪い、緑色の火柱さえ突破すれば何か先が見えるに違いない。少なくとも、あんなところで立ち止まって死を待つよりは、火柱に突っ込んだ方が、ずっと生存できる可能性が高いはずだぜ』と思いながら、夜の暗闇のせいで目にやけに映える緑色の炎をジッと見据えていた。

「綺麗に見える火柱だがな」

そう呟きながら、彼は槍を顔と同じ高さにまで持ち上げた。だが、その時に、パズィーの装着している甲冑の隙間を通り抜けて、熱風が入り込んだ。そのせいでパズィーは腋から酷い汗を流したのだが、汗を流した原因は熱気だけでは無かった。そう、空しいことだが、恥ずかしくなることだが、パズィーはこの時になってようやく初めて、緑色の火柱がかなり危険な炎であることを実感したのである。火柱はパズィーの視界からはまだ米粒なのに、熱風はかなりの熱だった。緑色の炎が尋常で無いことを地肌で知ったパズィーは、しかし立ち止まらなかった。『ここで立ち止まってなるものかぁ！』などというカッコいい言葉は述べなかったが、しかしパズィーは熱の

畏怖に怯え切らない。実際、パズィーの全身はもはや震えていたのだが、しかし槍は振り下ろしていなかったし、目は火柱から一度たりとも離していない。彼の皮膚がただれる。鼻先から火がくすぶり、槍の先端が溶ける。顔を真っ赤に腫らし肉が見え、それでも力尽きない。だが、終わりが来た。

「あ、あああああ、ああああああああ」

馬が脅えたのか急停止。身を投げ出されるパズィー。火柱に向かって顔から突っ込んで、水が蒸発するような音を残して、彼は跡形もなく消え去った。

馬はつぶらな瞳のまま、どこかに逃げていった。

スレイプニル

スレイプニルの面々のほとんどが、パズィーが消え去る瞬間を見ていなかった。上空から降り注ぐ緑色の炎が、さらに激しさを増していたからだ。上空から矢のように降り注ぎ、突き刺さった者は燃え上がって灰になる。すでに十二人が犠牲になっている。スレイプニルは四十人の大部隊だが、現在は二十七人。全滅は時間の問題と言える。火柱に囲われているし、降り注ぐ炎には城でさえ燃やされているのだから、逃げ場は一つも無い。

「なんで降って来るのは、燃え広がらないんだ！」

誰かが泣きそうな声で叫ぶ。降って来る炎は何故か燃え広がるということをせず、着地した部分を燃やすのみ。よって城はまだ完全には燃え尽きていないのだが、レンガ造りの外壁は削り取られている。人間も建物も、じわじわと、まるで痛ぶられるかのように攻められているのだ。

そんな喧騒の中、いじけるようにペチペチやっていたヴァルヴァルッサだが、突然それを止めた。止めたまま、何かを呻き始めた。ぶつぶつと、それはスレイプニルの面々の誰にも聞こえない小さな呻きだったが、「……峰寺さま……」という言葉がヴァルヴァルッサの口から飛び出、小さい呟きながらも、何人かの部下がその声を聞き取った。その何人かはヴァルヴァルッサに目と耳を傾ける。すると、ヴァルヴァルッサは顔を上げた。そして先程までペチペチやっていた人物とは思えない大声で、

「…峰寺さまは、己だけ助かろうという魂胆なのだ」

と叫んだ。言った後のヴァルヴァルッサは卑屈な微笑みである。そして、その言葉を聞いた部下たちは、彼らも卑屈な顔を作った。

「病気と偽りながら、実は我らを見捨てるおつもりなのでしょうか」

ヴァルヴァルッサに尋ねたのは大柄の男、ヒデューンである。いや、尋ねるというよりはお互いに何かを確認し合うかのような口ぶ

りであった。
「そうなのかもしれん……ヒデューン、跳べ！」
ヴァルヴァルッサが急に叫んだのでヒデューンは馬から飛び降りた。慌てて飛び降りたので、ヒデューンは草むらに勢いよく全身を打ちつけてしまったが、しかし慌てたのは正解であった。彼が地面に落ちたその頃には、すでにヒデューンの乗っていた馬は灰に変わっていたからである。
それを見ていた全員がすぐに夜空に警戒を戻し、ドタバタと蹄を鳴らし、ヴァルヴァルッサの周辺は騒音を増した。
「ヒデューン！　馬の無い貴様がちょうど良い！　城を駆けて、峰寺さまの安全を確保するのだ。確保さえすれば、あとは命の問題だぞ！」
ヴァルヴァルッサが夜空に警戒を向けながら、血管を浮き上がらせて叫ぶ。ヒデューンはニヤリと笑い、「部下と協力すれば、容易いことです！」と叫び返し、ヒデューンの部下であるマドルとヘアを連れ、きびすを返し、城内へと向かった。主のいなくなったマドアの馬とヘアの馬はすぐに燃えた。灰になっていく馬を眺めながらヴァルヴァルッサは、峰寺が病気では無いことだけを、祈る。そんな彼のすぐ横で、誰かが燃やされて灰になった。興奮から血が昇ったヴァルヴァルッサは、
「峰寺さまの力さえあれば、炎など問題で無いのに！」
と悔いた。

蝋燭の灯火

蝋燭の灯火。その仄かな明かりだけが、病気で伏しているということになっている峰寺に、影を作っている。

彼女の黒目の部分で、灯火は朱色に揺らめいている。

ふっ、とそれが消えた。暗闇になる。しかし、すぐに明るくなる。城内のホールらしき広い空間が、ぼんやりと浮かび上がる。峰寺の黒目に、再び灯りが入り込んだが、その黒目はひどく煩わしそうだった。彼女は黒目を蝋燭から背けると、星空を見た。ホールに幾つも備え付けられている巨大な窓は、天も地も両方を眺め見ることが出来る。

天では、星と蛍が煌き、地では、蟻のように小さな黒点が忙しく動き回っている。蟻と蛍が衝突すると、火花らしい光が起った後、どちらも消える。

「…もうすぐ半分、か」

そのように呟いた峰寺は、

「ふ、ふふふ、ふふふふ」

可笑しそうに、細く真っ赤な唇を歪めた。自分の言葉に笑っているかのような卑屈さであったが、自分でその醜悪さが分かっていても止められない様子であった。峰寺はゆっくりと手を持ち上げ唇を覆うと、外側に滲み出てしまった卑屈さを打ち払う為であろうか、何度も咳払いをする。

ショートカットで前髪がやけにキッパリと揃い込んでいる。目は切れ長な風で、光を吸い込みすぎず弾きすぎることも無い黒目であった。そのような顔を持っている峰寺は、蒲色のポンチョに身を包んでいる。窓から目を離すと、静かな調子で灯火に向かって声を掛けた。

「…ねぇ、隠れていないで、一緒に見物しない？」

蝋燭の灯火から形作られる影が、峰寺の誘いに反応したのだろう

か、蠢いた。そして時と共に影は二メートル程の柱らしく変わり、峰寺が瞬きをする間には人間になっていた。二メートル程の大きさの柱だったわけだが、変わった姿は少年であったから小さかった。少年は髪の毛だらけであった。頭から爪先まで真っ黒な毛で覆われているかのような姿で、顔だけは浮き上がっている。浮き上がっている顔には愛嬌があったが、全身が髪の毛に覆われていることを考えれば、少年の愛嬌さはむしろ恐ろしくもある。そんな彼の窄まっているような唇が「遠慮しておくよ」と生意気な風で告げてから、髪の毛で顔まで覆い、水に入り込むかのようにして闇に沈んだ。

「…トロンと消える。聞いて欲しいことがあるのに」

峰寺は愚痴っぽく呻くと、再び外に目をやった。その彼女の背中に、「聞くだけならいくらでも聞いてあげるよ。あんまり、答えたりはしないけど」という子供の声が届いた。

蝋燭の灯火が、ふわりと揺れる。

ホールはしばし静まった。その後に、峰寺は外を見ながら唇を開く。

「気が付いたの」

彼女はまずそう言った。蝋燭が作る影が、「なにに？」と尋ねると、「子供にはわからない複雑なこと」と彼女は答える。

影は少し揺れたが、「喧嘩腰に聞こえるね」とだけ答えて、静まり返る。影から見た峰寺は頭を俯かせていて、窓の外を観察していることがうかがえた。それを見た影は、峰寺に声を掛けずにはいられない。

「男たちが死んでいくさまを見るのが、楽しくて仕方が無いんだ？」

その声を聞いた峰寺はゆっくりと首を上げる。それと同時に、蛍のような輝きがホールを一瞬照らした。窓のすぐ近くを炎が通過したのである。その後、ホールはすぐに蝋燭の灯火だけの薄明かりとなる。

「楽しいね」

きっぱりと峰寺は答えた。今この瞬間も男たちが灰になっている

ことに対して、なんらの負の意識を感じていないかのような、簡潔極まる答えだった。影はしばし揺れた後、「まぁ、ヴァルヴァルッサが嫌いなのは、僕だって気持ちはわかるよ」と静かに、子供の声で言ったのだが、すぐに「わかるもんか」と、きつめの語調で返されて、影は今までの中で一番の揺れを作った。そして影は何も返さず黙る。

峰寺は窓に寄り添うようにしていた体を持ち上げて、影に近づいた。彼女が近づくたびに影は微妙に揺れていたものだが、ふっ、と唇の形を少しだけすぼめて蝋燭の灯火を消せば、闇が広がった。

「わかったような口を叩くには、子供じゃあね」

そう言い切ってから、峰寺は再び蛍蟻の観察に戻った。ホールの中で時折浮かび上がる彼女の様相には狡猾さが滲み出ている部分が多々あり、それが彼女の印象を魔女だとか悪魔だとかいうものにする決定打になっている。そんなことには気が付いていないのだろう、峰寺はまたも微笑んでいる。たまに、笑うのを抑え切れないのだろうか、唇に手をあてがい、静かに洩らし声を出す。夜の中で、蛍と蟻が灰を生み出しているのだろう。

蝋燭に火が再び灯り、影がゾ、ゾと地面から膨れ上がった。峰寺はすぐに不機嫌そうな表情に変わって観察を取り止めた。「子供はしつこいね」と皮肉めいた口調に、影は儚げに揺れていたものだが、しかし子供が影からにゅるりと昇り上がった。顔だけが髪の毛に包まれていない愛嬌あるその子供は、しかし口をぎゅっと引き締めていた。そして、「男が近づいてきています。三人、甲冑を身に纏っているところを見ると、スレイプニルの誰かだと思います」と事務的な、平坦な口調で伝えるのだった。というわけで、峰寺は絨緞にうずくまり、耳を澄ました。すると彼女の耳に入り込んでくる定期的な足音。リズムが速い感じだったので『走ってるな』とはすぐに察することが出来たが、城内のどこら辺を走っているのか等の詳細はわからなかったので、峰寺は頭を捻った。

「私の部屋に向かっているんだったら、話は早いんだけど」

何かを思案しながら独りごちていた彼女だが、ふと、何かに気が付いたかのような表情をした。
次の瞬間には、峰寺の大声がホールに響き渡る。
「男は全員、抹殺！」

パズィーと虚空

派手でけばけばしい色彩ばかりが飛び交っている空間で浮遊。先程の峰寺やスレイプニルが居た城や草原とはまったく質の違うというか、そもそもこの空間には地面すらなかったのだが、しかしパズィーは、あの緑色の火柱に突撃して灰になったはずのパズィーは、確かにこの空間に存在しているのである。

「ここはどこだ」

パズィーの全身は重力から解放されていた。極彩色の上下左右が曖昧な空間で、パズィーは「ここはどこだ」と繰り返し呻いていたものなのだが、しかし事態は進展することをせず、ただひたすらにパズィーは浮遊していた。上下左右をふわふわふわふわ当ても無く、時折極彩色のあまりの目映ゆさに不愉快な思いをしながらも、どうにも事態は進展しなかった。極彩色のふわふわ空間が連なっているだけである。ただ時々、体が棒のように細くなる感覚だとか、逆に世界全体に平べったく肉体が広がっていく感じだとかいう、奇妙な感覚を味わったりはした。棒のように身体が細まった瞬間に、一気に体がヘソの辺りから押し広がるような、臓器が飛び出るような、ヘソの緒が飛び出ていくような、つまり気持ち悪い感じ。そういう不思議な思いを何度も繰り返すのだが、極彩色の世界で漂うだけの無重力ワールドは終わることは無かった。パズィーの身に付けていた甲冑は何時の間にか剥がれており、筋骨隆々の肉体が露わになっているのだが、何故だろうか、パズィーの筋骨隆々の肉体を彼自身は目視することが出来なかった。自分の肉体が在ることはわかるのだが、目では身体を見ることは出来ない。かなり不思議ではあったが、瞬きを絶やすことなく行ったとて、肉体が目視できないことには変わりなかった。そうこうする内に時は過ぎ、パズィーは時に対する感覚があやふやになってしまい、そのうち何だかいろいろあやふやにもなってしまい、生きてるんだか死んでるんだかもわからな

くなった。
「ここはどこだぁ」
それだけは欠かさなかった。それを欠かしてしまっては何かが決定的に危うくなるのではないかとパズィーは想像したから欠かさなかった。極彩色のケバいのがうざったらしかったが「ここはどこだぁ」は止めなかったし癖になりつつもあった。「ここはどこだぁ」と言う度に何らかの快楽的な何かが湧き出てくるかのような気持ちもあった。「ここはどこだぁ」を一度言えば、ケバケバしい彩色によって溜まり込んだストレスも、一瞬にして快楽が勝る。「ここはどこだぁ」は何時しかパズィーの象徴らしき言葉にさえ変わったとも言える。パズィーと言えば『ここはどこだぁ』。『ここはどこだぁ』と言えばパズィーといった風に、彼の個性は『ここはどこだぁ』の一言に集束されていく。
しかし『ここはどこだぁ』と繰り返すと、あまりに繰り返すと、必然的に問題が生じてくる。舌がもつれる。だから、パズィーは『ここはどこだぁ』という言葉をどんどん省略していって、『ここどこ』、『こどこ』、と言った風に略して行き、最終的に『ここ』になった。
パズィーは連呼した。
「ここ、ここ、ここ、ここ、ここ、ここ、ここ、ここ」
「、ここ、ここ、ここ、ここ、ここ、ここ、ここ」
「ここ、ここ、ここ、ここ、ここ、ここ、ここ」
そんな馬鹿なことをやっている内に時間の感覚を忘れてしまった。ココに夢中になり過ぎたのかもしれない。パズィーはそのことに気が付いて顔面蒼白となり、頭を抱えた。両手で頭を押さえつけて、「んあああ」と叫んだ。
「困ったことになってるんじゃないか、ちくしょう」
上半身を捻り下半身をジタバタとさせながら、んああと絶望する彼。だが、ある時絶望することを止めた。というのも、鼻腔に香りが入り込んできたからである。印象的な匂いであったから、鼻を何

度もひくつかせた。その内にパズィーはこの匂いを嗅ぐことにだけ集中するようになった。
鼻の穴は膨れ上がり、鼻毛がはみ出たりもする。だが細かいことは気にしない、というか気が付いていない。
パズィーは夢中だった。それほどに匂いは香しかった。
その時である。「柑橘系…」と久々に「ココ」意外のことを口走ったパズィーの目の前の、極彩色空間が、歪み、ガラスの破片が弾け飛ぶがごとくぶっ飛んだ。そうなると次に虚空が現われたのだが、虚空というのは灰色で薄気味悪くて、なんというか、極彩色のケバケバしさとの対比、豪華と地味、をもろに現しているような灰色、そこから、にょにょっと柑橘系の匂いが滲み出ているようなのだった。
「うぐ」パズィーはハッとした。
ハッとして、脳裏に映像。浮かび上がったのは故郷だった。
パズィーは思い起こす。うるおい豊かな大地の緑の中で家畜たちが時折唸ったりするのが、のどかだった。そんな故郷の光景。蜜柑の木がそこら中で飄々としていて。鳥が鳴いたり、雲がゆっくりと流れて行ったり、遠くから餓鬼たちの喚き声。そして犬が走り猫が寝ていて、ほんと、豊かな故郷。城に雇われるために旅立つ時には村中で見送ってくれた。泣いている人が何人もいた。みんながハンカチを持ってブンブン俺に向かって振り回してた。俺もハンカチを振り回して別れを告げたものである。ハンカチは胸の中に入ったままだ。故郷で生きてきたことを示してくれる大切なハンカチ。いや、懐かしいなぁ。パズィーはそのように思い起こして、ハンカチを久々に見ようと懐を探ろうとした、のだが。
「な…」
手の平。自分の手の平を見た瞬間に、パズィーの双眸は固まった。
何故だろうか、彼の両手は、黒ずんだ皺ばかりの汚らわしい手へと、変貌していた。
慌てたままに手と手を重ね合わせると乾燥していることがわかっ

た。あまりに水ッ気が薄いせいで手と手を擦り合わせるだけでゾクゾクした。それ程に手の平は乾燥していた。パズィーは頭から血液が退いていくことに気が付き、白髪が一本はらひらと舞い落ちたのにも気が付いた。彼は頭に手をやった。乾燥した手の平でも分るほどに髪の毛の総量は少なかった。すかすかしていて、すかすかしている。

「…う…お……お……」パズィーは泣いた。喉から搾り出される声は老人らしい、しわがれた代物だった。

唯一、潤っているのは涙だ。彼の目から落ち、頬へ、顎へ、そして虚空へと落下してやがて見えなくなったが、次から次へと涙は連なった。

パズィーはこの訳のわからない極彩色の空間で、年老いてしまったのだ。老人になってしまうまで、肉体をしわがらせてしまったのだ。

彼は丸まった。

足を折りたたみ、その足を腕で囲い、頭をその囲いの空間にうずめた。目一杯折り畳まれて丸まったパズィーの肉体が涙を零しながら虚空を旅する。いまや極彩色は消え去り、ひたすらに灰色の世界。パズィーは無重力をぐるぐると漂い、いつ消えるとも知れない命をひたすらに縮めることにだけ誠意を尽くした。

いつしか、彼は丸い丸い一粒の珠になる。水色だ。

「やがて消え去るなら、今消えたって、私は丸まったまま蒸発すれば誰かの潤いにもなれる」

パズィーは彼のどこか内部でその様に考え、また丸まり続けた。

そして虚空をどこまでも旅した。

オフィス

虚空を旅する内に、オフィス。オフィスという所でパズィーは、仕事をしていた。ちゃちゃっとこなしてふぅと深呼吸。手もしわがれていないし、頭も冴えているから、今日は早めに帰れそうだ。そんなことを考えながらパズィーは、オフィスのデスクで書類を作成することにした。パソコンのディスプレイに身を乗り出して、お茶を一口すする。そんな折に向かい側のデスクから独り言が聞こえてくる。同僚のオカザキの声だ。

「ホント楽しかったよなぁ。明日もまた行こうぜ、今、俺、金があるんだ。……うん、そうそう。……ところでさぁ」

オカザキはセックスが好きだから今日も一発かましてくるつもりらしい。忙しい男だ。まあ男がそれを好きになるのはだいたい皆そうだから、別に気に咎めることは無いと言えば無いよな、パズィーはそんなことを頭で呟いてから、「ハァッ！」と呻いた。思ったより大きな呻きになってしまったので皆に聞かれたかと思ったが、結構広いオフィスではあるので、皆、表立ったリアクションなどはまるで示していない様子だった。同僚のメニカワなどは今頃ご飯を平らげていて弁当の肉ばかりに夢中に見える。丸々としているメニカワは幸せそうな顔だ。

パズィーは視線を目の前のディスプレイに向けた。キーボードやマウスを動かして書類を作成しようと試みる。

頭が冴えているから調子が良いな、と思いながらタイピング。そんな時に、部長から声を掛けられた。

「パズィー君、こっちきて」

パズィーはばれないようにため息をついてから、ゆっくりと椅子から立ち上がる。部長のデスクにまで歩いて向かい、「はい、なんでしょうか」と用件を尋ねると、「…いやね、」と間を置かれた。だが、部長はお茶をすすってから、「特に用と言うわけではないの

だがね、実は」と言った。パズィーは眉を潜めてから、「では仕事に戻ります」と述べたが、部長は「いや、いや、まってくれ。パズィー君」と引き止めるのだった。
「仕事がしたいのですが、僕は」パズィーは強めに言った。部長は笑った。
「いや、ここで話すのは何だから。そうだ、屋上に来てくれない？
そこで話をするからさ」
パズィーは首を傾げてから「そんな重大な話が？」と尋ねる。
部長は、
「そうだよ」
とだけ言って、またお茶をすすった。
パズィーは部長にもやもやしたものを押し付けられた気分を感じながら、自分のデスクに戻った。書類作成を再開しようと思ったが、部長が何を話すつもりなのか想像出来ずにもやもやは深まった。そんな時に、隣から突然声を掛けられた。
「…やっぱり。そのデスクに座る奴ってさ、呪われるんだぜ」突飛な内容。パズィーは慌てて視界を右隣に移した。そこにはモウリがいる。
「何、それ」パズィーはまたも眉を潜めることになった。
そんなことはお構い無しなのだろう、モウリは「デスクの見えない所に、秘密は隠されてるぜ」と余計に不気味なことを言う。
「見えない所？」
「ここだ」
そう言ってからモウリはパズィーのデスクの、裏側、普段目につけないような所を指で突付いた。パズィーはデスクに頭をうずめて、モウリが指で突付いている周辺に目をこらした。
「……あ」
文字が彫られているのがわかった。荒々しく、デスクの裏側に彫られている文字。
『アガク、オレ、アガク』

と読めた。パズィーは薄気味悪い何かを背中に感じながら、慌てて顔を上げる。「あがく？」とパズィーが呟くと「そうとしか読めないよな」とモウリは嫌らしく微笑んでいた。
「このデスクに座ってた奴ってさ、みんな謎の失踪をするんだよ。それらの全ての失踪には部長と何か関係があるってのが、密かな噂だ。だからさパズィー、気をつけた方がいいぜ。お前が失踪したら、俺の左隣の人間が消えうせるのはそれで四人目になっちまう。…四って、なんか縁起が悪くて嫌だろ」
「……」
パズィーは、無性に目の前の男をぶん殴りたくなったが、しかし頭が混乱して殴るどころではない。
気を紛らすべきだろうかと、ディスプレイに顔を向けたが、画面を見ていると余計に気持ちが悪くなってくる。
それからしばらく、パズィーはひたすら、意味も無くキーボードを弄び続けることで、オフィスの冷房が効いている中で時を過ごした。『アガク、オレ、アガク』という文字が脳裏でちかちかと点滅する。その意味不明さに心を囚われてしまって、何も手に付かない。そんな様子のまま、何時間が経ったころだろうか、飯が好きなメニカワはまた飯を食っている。向かい側のオカザキはにやにや笑ってる。右隣のモウリは真剣な顔つきで仕事をこなしてるフリをしている。お茶を運んだりしてくれる美人のミノさんは、オフィスの端っこで欠伸をしている。
パズイーはそんな風に周りを見て気を紛らしていた。そんな時に、肩を叩かれた。
心臓が飛び出る思いをしながら、振り向いた。
そこには、部長。
「パズィー君。では、いこうか」
泣きそうになったが、しかし感情が噴き出さないように何とか堪えた。
必死な思いのまま立ち上がり、「はい」とだけようやく述べると、

屋上に向かう部長の後に付き従い、オフィスを出て行くことになった。

扉を引いて、冷房の心地よさから離れ、蒸し暑い空へ。

屋上　1

七三の髪型を櫛で整えながら、部長は、「世界はいつでも一つの形だ。それって、おかしいよね」とパズィーに言った。なぜか部長は肩を震わせていて、筋肉がピクピクしているような感じで、パズィーは不快だったが、周りの景色を見て心を落ち着けようとした。だが、周辺はコンクリの壁で覆われているから気分はよけいに落ち込んだ。この会社のビルは、隣接している他のビルよりも一回り小さいから、自然と囲われるような形になってしまうのだ。

「よく、わかりません」

適当な相づちを打ちながら、脳が落ち着ける景色は無いか、と目をキョロキョロと動かした。すると、屋上の隅っこに置かれている植木鉢に目が行った。植木鉢が三つ、横並びになっているそこだけが、今の不安を癒してくれる優しさだな。パズィーはそう感じて、密かに、植木鉢に視線をやっていた。

「……ということは世界が一つであることがおかしいのか。はたまた、世界がたくさん存在するのが誤りなのか。そんなことさえも危うくなってくるものだよな。考えが混乱してくるとは思わないかパズィーくん」

ほとんど話を聞いていなかったが、これだけは言える。

おかしいのは部長です。

だが正直なことは、とても言えない。はっきり言って部長が何を言いたいのか、パズィーには部長の言葉がさっぱりわからない。

パズィーは植木鉢から視線を離さないことで、部長の言葉を脳味噌に入れるのを拒否する。そうすることで冷静さを失わずにいようとしたのだが、しかし、植木鉢がおかしかった。

「……？」

パズィーは首を前に押し出してしまう。変な体勢になったまま、植木鉢に『目』が付いていたことは幻覚かどうかを確かめようとし

た。部長に話を聞いていないのを気付かれないようにしつつ、何度も首を前に押し出して、植木鉢をじっくり見る。部長はだいたいこちらを見ないで話をしているが、時たま、ギュン、という効果音が聞こえてきそうな程の勢いで顔を向けてくるので、用心しなければ植木鉢にしか興味が無いことがばれてしまう。

パズィーはしかし、まさか植木鉢に『目』が付いているってのは、ありえないだろう、って思っていたが首はどんどん前に押し出て行く。

雲が通過しているのだろうか、屋上に影が。

暗くなって、植木鉢が見えづらくなる。

パズィーは何歩か歩いて、植木鉢がもっとよく見える所に移動しようと思って歩き出そうとした。幸い、部長は訳のわからない話に熱中していて、こちらに顔を向けてくる余裕は無いように感じられる。という訳でパズィーは、数歩前に進もうとしたその瞬間に「わたしは部長だ」と言いながら部長が振り向いてきた。なんで『私は部長だ』という言葉が発されたのかは、部長の話を聞いていなかったパズィーにはわからない。

「う、ああ、はい」

パズィーは慌てた相づちを打ってしまった。部長が一瞬眉を潜めた。

動悸が激しくなる。

だが、雲が通り過ぎて屋上に再び太陽が差し込むと、部長は天を仰いで「うむ、太陽は今日も太陽だな」と言ってから、またどっかに顔をやってしまい、そして熱っぽく意味不明なことを語ることを、再開するのだった。

「……太陽と私部長の関係性というものは、この広い空の中では常々深々しいものだった。私が想像している以上に太陽は私にゾッコン。まあ、私は結婚しているからね、不倫してあげるってわけにもいかないからさ、今日もこの広い空の下、太陽に熱っぽい視線を当てられながらも、私は妻を愛している。というわけで、今日も太陽

は私にとっての愛人のままだ。変わらないというのは良いことなのか悪いことなのかは、私にとっては良いことだ。ということは、世界が混乱することはあまり無いはずなのだがなぁ。しかし最近は、何故だか眩暈がする」

パズィーは前に数歩、一息ついてから躍り出た。

そのおかげで植木鉢の正体が、さっきよりもわかりやすくなってくる。やはり、植木鉢には『目』があるようだ。

屋上　2

『目』が二つ。人間と同じ数の目玉だ。
植木鉢の中頃あたり、にくっ付いていて、生物なのだろうか、時折パズィーは植木鉢に見られる。目でギョロっと射止められる。パズィーが見ているから見返してくるのかもしれない。そこのところは、植木鉢の考えていることだろうから、まあ、パズィーにはわからないが。
「眩暈が繰り返されるあまりに、私は病気なんじゃないかなって時折、不安でね。どっかに診察してもらおうかな、なんて思うんだがやっぱ初めてのところって不安じゃない。行きつけの病院とか無いし。だから、私はいつもそういう風に不安な時に、ついつい愛人のところに赴いてしまうのが癖で、めちゃくちゃ悪い癖で、しかも私は愛人のところに赴いた時にも実は妻のことを頭の片隅で思い浮かべていたりするわけ。つまり、やっぱり私は妻を愛しているんだなぁ、なんて、パズィー君、今の私の言葉格好よくなかったか？って、そんなことはどうでもいいな。でもさ、愛人はもういないんだ。最近は、愛人は、この世界で違う世界へと羽ばたいてしまったんだよね」
パズィーはさらに植木鉢を詳しく見るために、数歩前に躍り出る。部長は熱中していて気が付いていない。
赤い横線。…じっくりと眺めると、ああ明太子か、と思ったがそんなことは無い。植木鉢には『目』だけでなく『口』でさえもくっ付いていたのだ。そうなってくると疑わしいのは『鼻』があるかどうかだが、しかし鼻は付いていない様子だった。きっと呼吸は口でしているのだろう。
「パズィーくんはごっつい顔をしているね」
パズィーはハッとして部長に目をやった。部長は完全にこちらが話を聞いていないのに気が付いてしまった。彼は、植木鉢を見てい

る。
「そのごっつい顔が世界から姿を変える時に、君はどうなりたいと言ってあがくのだろう。部長の私はコミュニケーションが下手くそで他人を理解することが苦手だから、私は君のことなど理解できない。だけどね、パズィーくん」
部長は植木鉢のほうへと歩いていく。すたすたと、やけにきっぱりとした動作で植木鉢に近づいていく。
そして、『目』と『口』がある植木鉢を、彼はゆっくりと持ち上げた。優しく労わっているかのような慎重さだ。
「パズィーくん。だけど私にも理解できることはある。だから、君にも理解してもらいこともある。それが、この植木鉢のことだから、私は君をこの屋上へと呼び出した。君に、ここに植木鉢が三つ置かれていて、何故彼らには『目』と『口』があるのか、そのことを理解してもらいたかったのだ」
部長は大声でそう訴えながら、指を、植木鉢の『口』に入れた。『口』はチュッチュと部長の指をすすっている。何だか見ていて気分が悪くなる光景だったので、パズィーは目を背けた。背けてから言う。
「部長と植木鉢がどういう関係なのか、申し訳ないんですが、理解したいとは思えません。ていうか、正直、言っていることがよくわからないし、何で植木鉢がそういうことになっているのかも意味わかんないです」
大声で叫び上げた。部長とパズィーは屋上の端っこと端っこだから、叫びあわないと声が届かないのだ。
部長は植木鉢を持ったまま、パズィーの方へと近づいてきた。
雲が屋上に影を落とす。
植木鉢の『目』と『口』が近づいてくる。それと同時に、パズィーの鼻に柑橘系の匂いが入り込んできた。
植木鉢の匂いだとは思える。
部長は植木鉢の、底を、両手で持って、天に捧げるような持ち上

げ方をして、こう言った。
「これは、私の愛人だった」

屋上から唇へ

パズィーは思わず「ハァッ？」と侮蔑を隠すことを忘れてしまった。だが部長は気にも止めない。

「私にとっての太陽のような存在だった、愛人。愛人は人間だったんだよ、勿論。それなのに、今は、こうやって植木鉢になっちゃって、私の指をチュッチュと啜ってくれることしかしてくれない」

部長は違う指を『口』に入れた。植木鉢は卑猥な音をたてながら部長の指を啜る。

パズィーは、いつも部長はこの屋上でこんな変態染みた行為をしているのだろうか、と想像した。きっとしているのだろう。何かに慰めてもらいときはこの屋上にひっそりと訪れ、誰か屋上に現われたらどうしようと常にビクビクしながらも、指を『口』に啜ってもらうことで喜びを感じていたに違いない。

「今日も来てしまったよ」

「チュッチュ」

「うんうん、良い調子だよ」

「チュッチュ」

「よし、今度は別の指だ」

「チュッチュ」

「うーん、マンダム」

パズィーはそこまで想像して、こんな想像をした自分自身の脳味噌を恥じた。身体の方も今の想像を生理的に拒絶しているらしく、顔が何時の間にか片頬のみ、不自然にひきつってしまっていた。そしてそれを部長に見られてしまっている。何時の間にか部長は指を『口』から出していて、何だか吹っ切れたような表情をしていて気味が悪い。そんな部長は現実では、こういう言葉を口にした。

「うーん、ガンダム」

何を言い出すのか、ってな感じで部長を見たが、部長はいたって

真剣な顔つきだった。そんな部長をまじまじとパズィーは見てしまったが、それがいけなかったらしい。
「君は、嫌な奴だな！」
部長はパズィーに対して怒号を発した。「なんで怒るんですか」と訊ねると、「そんなこともわからんのかね」と返されたので、「空気を読めってことですか？」と聞いてみると、「そういう簡単な問題じゃない。もっと重要なことなんだよ！」と怒られた。
やっぱり部長は頭がいかれてしまっているようだ。
勿論、部下の立場であるパズィーとしては、今まで散々生意気口を放ってきたが、しかし『頭おかしい』とはさすがに言い辛い。
しばらく部長は塞ぎ込んでしまった。植木鉢を彼はコンクリに置く。植木鉢は「わおっ」と艶かしい口調で言葉を発する。
パズィーは、どうして良いのかわからなくなったので、塞ぎ込んでいじけてしまった部長は気にしないでおいて、残り二つの植木鉢が置かれている、屋上の隅っこの方へと足を進めた。部長は彼を引き止めない。
屋上にまた陽が差し込んできた。パズィーが天を仰ぐと、黒ずんでいる鳥が羽を羽ばたかせ。
首を元に戻して、植木鉢の方を、隅っこの方に、再び目を戻す。どんどん植木鉢とパズィーの距離が近づいていく。部長がパズィーの背中に、
「残り二つの『目』と『口』を分けてやろうとは、私は思っていないぞ、パズィーくん！」
と叫ぶ。そんな部長の声をやかましいと思いながら、彼は植木鉢を一つ、手に取った。それにもやはり、『目』と『口』が中程にくっ付いている。しかし、部長の愛人であったらしい植木鉢とは、それは『目』も『口』も形が違っている。
「まあ、人間と同じか。ていうか、元々人間だったんだもんな」
パズィーはそう言ってから、苦笑した。『俺はこんな怪奇な植木鉢の存在を認めてしまってるけど、それでいいのかね？』と不思議

に感じたのである。
「部長、これは誰だったんですか！」
叫ぶ。暑さの中で叫ぶせいか、今更、眩暈がした。パズィーの叫んだ数秒後に、部長の叫び声が返って来る。
「君のデスクに、以前座っていた男だよ！」
「そうなんですか！」
パズィーはまた眩暈を感じた。よたつきながら、再び植木鉢に視線を戻す。
気が付くとパズィーは植木鉢の『口』に、指を突っ込んでいた。クチュクチュしていて気持ちが悪かったが、何本も繰り返し指を『口』の中に入れていたのだ。もちろん、気分はどんどん悪くなっていったが、しかしパズィーはやめなかった。というのも、『口』に指を入れるたびに後頭部が針に突き刺されるような刺激を発するのが、気持ちよかったからだ。つまり彼は、気持ち悪さを感じながら同時に気持ちよさも感じるという、奇妙な思いを体験ｓいているというわけなのだが、パズィーはそれが不思議なことだとは思わず、「ハァッ！」と呻きながら天を仰いだ。その仰いだ天に、黒ずんだ鳥。その黒ずんだ鳥の背景に、峰寺様の唇が、あった。
「峰寺さま！」
とパズィーは、彼自身は気が付いていないが頬を緩ませて叫んでいた。パズィーは峰寺様を慕う人間たちの中でもその筆頭をいく猛者であるから、遥か時空を何処までも旅した後だとしても、峰寺の唇の形など一瞬にして暴いてしまう性質の持ち主なのであった。
青空の中に峰寺様の顔。その瞳が、明らかにパズィーの方を向いている。パズィーは身体が震えていたが、それを押さえ込もうともせず、彼は時間が経てば経つほど身体を奮わせ、その結果両手に向ける力が少なくなっていることにも気が付かない。植木鉢をコンクリに落として、『目』と『口』が付いているそれを割ってしまったその瞬間に、パズィーはようやく自分が峰寺様に熱中していたことに気が付いたのだった。落とした跡に目を向けると、植木鉢は姿形

を変えている。それはヴァルヴァルッサの顔だ。ヴァルヴァルッサがこう呟く。
「そろそろ時間だ、パズィー。峰寺の内側で多少の時間だけでも生きられたことを光栄に思いつつ、元の世界に戻ると良い」
彼はそう言っていた。そう喋る『口』は、先ほどパズィーが指を突っ込んでいた『口』だ。パズィーは来ているスーツに指を擦り付けて汚らしい感覚を剥ぎ落としてから、空に浮かんでいる峰寺様に向かって、その指を突き出した。
「ここは峰寺さまの内側だったから、ヴァルヴァルッサの『口』がきっかけになったというのですか！　そんなことは私には悲しすぎます、峰寺様！　こんな汚らわしい毛むくじゃらの男の『口』の感覚などを、峰寺様が知っているなどというのは汚らわしいことじゃないですか！」
言い終えてからパズィーは、「ちくしょう！」と呻いてコンクリに拳を叩きつけた。その後に、転がっているヴァルヴァルッサの顔をどっかに投げつけた。ヴァルヴァルッサは「うわあ」と叫びながらパズィーの前から姿を消した。

それから夜になった頃、もはや屋上にはパズィーだけだ。
部長の姿も見えなくなり、四周をビルの無機質の壁に覆われている屋上の四角形の表面で、パズィーは何時までもうな垂れていた。
そんな彼を、峰寺様の唇が、息を吸い込むことで、吸い上げていった。ふわり、と身体が浮かび上がるパズィー。蓑虫みたいに身を硬くしていて、固まったままピクリとも動こうとしない。その蓑虫の体勢のまま、彼は夜空を浮かび上がり、俯瞰的な位置づけで世界を眺め見た。
そして最後に、峰寺様の唇が、パクリとパズィーを、たいらげたのであった。
「うーん、まずい」と、唇が動く。

螺旋塔

螺旋階段が下から上へ、段々と連なっている。真下からでは最上は見えない程に螺旋は続いており、城に住む人間は、この階段を仰ぐたびに、城の威圧を感じざるを得ない。

月明かりが天空から零れている。螺旋階段の、ドーナツで言う穴ぼこの部分に、夜だというのにさんさんと薄明かりが差し込まれているのは、ちょうど月が差し掛かっているからである。城のシンボルでもある螺旋塔。その螺旋階段の天井はガラスが張り込まれているだけだから、運が良ければ、月に昇って行くような感覚で、螺旋階段を登りあがっていくことが出来るというわけだ。

そして今、三人が月へと昇り上がっている。甲冑を鳴らしながら、槍を持ち、先ほどの平原とは打って変わって静まり返っている螺旋塔を、ひたすらに駆け登っている。

「本当にここでいいんだろうな！　違ってたら、また螺旋階段を駆け下りて探すことになるんだ。見間違いの可能性は０％じゃないと困るぞ」

ヒデューンが息を切らしながら絶叫する。

マドアが眼鏡を片手で押し上げながら、「私は見間違えなどはしません」と簡潔に述べて、そばかす顔のヘアは「０％なんてあり得ないですよヒデューン部隊長。というか、だったら、ヒデューン部隊長もじっくりと城の状態を見れば、確認が出来たじゃないですか」と生意気な口を叩いた。

少し間。その後。

「……ほんっと。いらつかせるのが趣味な部下どもだな」

ヒデューンは舌打ちをして、しかし足を止めず、どんどん月へと昇り上がる。

部下二人も『へへへ』と下品にニヤつきながら、段を蹴り飛ばし、踏み越えていく。

ダ、ダ、ダ、と、リズミカルにくるくると螺旋塔を回転する彼らに合わせて、ガチャ、ガチャ、と甲冑もリズミカルに鳴る。二つのリズミカルな音は、下から上まで吹き抜けている螺旋塔に反射して踊りまわり、その音さえも、月へと昇天して何時かは失われていく。

「峰寺様がこの先のホールにいるんだとしたら、我々が近づいていることは騒がしい甲冑でわかるはずだ。ホールにいらっしゃるということは、病気で寝込んでいるというわけではなかったのだ。それなのに峰寺様が上から降りてくる気配も無いのが不思議だ。そもそも、病気で臥していないのならば御力を貸して下さるのが峰寺様の役割のはず……やはり、峰寺様には魂胆があるとみた。……あの突然現われた緑色の炎自体が峰寺さまのお仕掛けになった代物である可能性もありうるようだ」

ヒデューンの言葉に、マドアが頷いてから、眼鏡を押し上げて答える。

「峰寺様のお怒りが今の状況を作ってるっていうなら、ヴァルヴァルッサが悪いんですよ。……あいつが」

マドアが喋っている途中に、ヘアが走りながら器用にマドアの頭を叩いた。マドアの眼鏡がずり落ちる。

「言っても仕方ないことを口にするのは悪い癖だから止めるんだよ、いい加減に」

「言わないとイライラするんだよ。うるさいな、ヘア！」

マドアも器用に頭を叩き返す。火花が散り始めた二人の部下は、走りながら器用にちょっかいを出し合う。

そんな二人に、少し前を走るヒデューンが怒号。

「餓鬼みたいな争い方はみっともないから止めろ！　ただでさえ女という理由で甘く見られる時があるお前らが、下手に幼さを見せてどうするのか！」

ヒデューンは言い切ってサッパリした気持ちを感じる。しかし背後が静まり返ったので、後ろを振り向く。

立ち止まっている二人の目が、部隊長を射抜いていた。

マドアとヘアは同じ言葉を発する。
「「餓鬼ではありません！」」
ヒデューンは走らせていた足を止め、ため息をついた。
甲冑の音と、段を踏む音。塔に響き渡っていたその音が止み、螺旋塔はシンと静まり返る。今も外では鳴り響いているであろう、火の玉の炸裂音とスレイプニルの逃げ惑う蹄の音も、螺旋塔の内部では、耳を澄ましてようやく聞こえる程度の、かすかさだ。そんな静寂さの中で、ヒデューンはしかし、はっきりと二人に述べる。
「…餓鬼だな」
短い言葉なのにナイフのように鋭かった。ヒンヤリと冷えている言い方だったのである。
『餓鬼だな』という響きが螺旋塔を飛び回る。飛び回る一々の『餓鬼だよ』がマドアとヘアの両耳にこびりつくのだった。
しかし負けじと二人は、もう一度同じ言葉を叫ぶ。
「「餓鬼ではありません！」」
声は少し涙交じりであったが。
ヒデューンはそんな二人をせせら笑う。慰めるつもりは無い様子だった。
「なら懐に仕舞っているのであろう御守りのハンカチで、いまにも零れ落ちてしまいそうな涙の一粒を拭き取るのだな。だが、故郷の思い出なんてものを懐に仕舞い込んでいるうちは、スレイプニルの勇敢な戦士として認められるはずもないがな」
その挑発に、マドアがすぐ反応した。
「パズィーだって、あいつは男の癖に、ハンカチをまだ懐に仕舞い込んでましたよ！」
その反応はヒデューンを余計に笑わせるだけだった。
「そんな男のことなど私は知らんな。部隊長の私に名前を知られていない男など、そもそもがたいした男ではない。ハンカチを懐に仕舞い込んでいるというなら猶のことだ。マドア、ヘア、お前たちは女性の中で抜きん出て勇敢な者として、様々な方面から期待をかけ

られている姉妹なのだ。知名度がある。そんなお前らがそんんじょそこらの男を例に出して己の身を貶めるのは、国の発展を遅くすることと知れ。……つまり、責任を感じろと言っているのだが…」
ヒデューンはそこまで言ってから、頭をポリポリと掻き、とぼけたような顔をした。
そして、
「まあ、わからなくてもいい」
と白々しく言うのだった。
二人がどういう反応をするのか確認もせず、ヒデューンはそのまま、月へと昇り上がるのを再開した。
マドアとヘアも、顔を見合わせてから、ヒデューンの後に続いた。
ぐるぐるぐるぐると、三人は、螺旋塔を登る。
どこまでも階段が続く。十五分後、息を切らし始めた三人は、休憩のために歩みを遅める。普段から鍛え上げている屈強の三人でさえ、螺旋階段の連なりは身に堪えるというのは、さすが螺旋塔といったところであろうか。甲冑のガチャガチャという音もダ、ダ、ダという駆ける音も、穏やかなリズムに変わる。そんな中、マドアが、ずり落ち気味だった眼鏡を押し上げる。
「峰寺様が爬竜人と手を組んだということは、考えられますかね？」
そばかす顔のヘアがすぐに「それはありえないよ」と言った。
だがマドアは続ける。
「峰寺様がスレイプニルを壊滅させるなんて、おかしいですよね？
でも、爬竜人と手を組めたのなら話は別…」
「だから、ありえないって」
ヘアがまた釘を刺した。相手を小馬鹿にしているような口調だったので、マドアは熱を上げた。
「なんでありえないの。ありえないって言えるのがありえないこの馬鹿ヘア。ヴァルヴァルッサを憎んでる峰寺様だったら、それくらいのことはやってのけるでしょ」
「そのヴァルヴァルッサに対する憎しみのことがあるから、ありえ

ないんじゃん。ヴァルヴァルッサと爬竜人はタイプが一緒なんだから」
ヘアは余裕ぶってさらに嫌らしさも込めて答える。その答えと余裕ぶりを見せ付けられたマドアは、「ぅん」と短く呻き、しばし眼鏡に手をあて、「…それは、どうなのかな」と弱気に答えるハメになっていた。その会話を、聞いていない風だったヒデューンだったが、聞いていたのだろう、「珍しくマドアが言い負けたな」と笑った。それによってヘアはさらに余裕ぶり、マドアの眼鏡はずり落ちそうになった。
その様子を確認することもないまま、ヒデューンは前を向いて歩く姿勢のままに、二人に己の見解を話す。
「おそらく、峰寺様が手を組むなら陰人の側だろう。峰寺様は性格的に、あちら側の人間と組んだ方が上手くやっていけるだろうし、それを望むだろうな。実際、彼女にとっては陰人と手を組むのは容易だ。なにせ、側近が陰人だし、彼女自身、陰人の血を継いでるわけだから」
そんな見解を語った上で、ヒデューンはやはり一度も振り返らなかったわけだが、後ろの二人はその話を聞いて絶句、ゴクリと同時に息を呑んだ。
そして二人同時に、
「「陰人の血！？」」
と叫んだ。螺旋塔にやかましく言葉が疾駆する。ヒデューンは耳を抑えながら、歩も止め、ようやく二人に顔を向けると、二人の部下がそんなに絶句しているにも関わらず彼自身は平然としていて、
「知らなかっただろ？」などとあくまでも普通に語る。
マドアが「知らなかっただろ？　じゃないですよ！」と怒り、
ヘアが「何、普通の表情してんすか」と、やっぱり怒る。
マドアが「私達には隠してたわけですね」とまた怒ると、
ヘアが「陰人の血を引いてるって、ハーフってことでしょ」と尋ねる。

ヒデューンが「そうだ」と答えると、二人は多少、曇った顔つきに変わる。そして二人でまた、顔を見合わせる。
いまだ螺旋階段は続いている。まるで果ての無いようなその連なりを、マドアが見上げる。その先に居るであろう人物に出会った時のことを思うと、気が淀む。
「変な顔しちゃうかも」
マドアは小さく呟いた。隣のヘアにはその呟きが聞こえた様子だったが、ヘアは何も答えなかった。彼女もまた、連なりを見上げている。
「休憩は、終わりだ。一気に駆けるぞ」
甲冑を鳴らしながら、ヒデューンが螺旋階段を駆け登り始めた。
二人の女性騎士も、それに続く。
月が三人を、見下していた。蟻のように。

甲冑の豚

部屋の中で、女性が、苦しんでいる。
マドアでもヘアでもないその女性は、ポンチョを身に纏っていて、肩まで伸びている髪の毛は少しくせ毛である。
つまり、彼女は峰寺。
「う、う、う」
何度もえづく峰寺の背中を、全身髪の毛の子供が「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と慰め、さすっている。
スレイプニルの三人が螺旋塔を登り始めて峰寺が「男は全員抹殺！」と叫び上げた後、彼女は急にえづき出した。
「なんか悪いものでも食べたんじゃないの？」
呆れた調子で尋ねる彼に対して、峰寺は「うるさいっ！」と怒鳴り散らす。子供の影がへにょへにょに慄いたが、しかし叫び上げたせいだろう、峰寺は再び「う、う、うぇええ」とひどい調子でえづく事になった。それを見た子供は慄くのを止め、「ははは。ひどい有様」と影をぐん、と縦に伸ばした。
「餓鬼が、こういう時だけ調子に……う、うええ……げほっ、……あんた、側近なんだから薬とか持ってるもんじゃないの…げほっ…うぐぐ…」
影がもぞもぞと動いたが、子供は「うーん、無いね」と呆気なく言い切った。
「使えない餓鬼！」
大声で峰寺が述べたその瞬間である。叫び終えたそのすぐ後に、叩き付けられるかのようにして勢いよく、その身が、地面にぶっ倒れた。倒れたというよりは誰かに押し倒されたかのようだったが、背中を擦っていた子供も、目を丸くしている。
「う……う、げえ……」
急激に彼女の体調が、けたたましいものに変わった。

蛇がのた打ち回るかのような荒々しさで、峰寺はホールの地面をごろごろ転がる。暗がりでも分かるほどの苦悶の表情、汗。
子供は混乱する。目を反らしたい思いに駆られたが、しかし側近としての使命感から、理性が目を反らすことを拒んでもいた。そういうわけで、のた打ち回る峰寺をどうするべきかと、子供は長らく彼女を見ていた。というより、見ることしか出来なかった。
そんな風な状態に陥って何分後のことだろうか。さらに状況を悪化させようとでも言うのか、子供の耳に、甲冑の音が届いた。
……ガチャ……ガチャ……。
子供は慌てて、ホールと螺旋階段を繋いでいる鉄製の巨大な扉、それに目をやって、ここに突き入られたらどうしようもない、自分は影に溶け込めるから逃げられるが峰寺は逃げられない、ああ、どうしよ、と何か解決策を探ってみたが何も思い浮かばなかった。
焦りばかりが募る子供の影は、どんどん不安定な形状に変わり、ホールの暗がりの中で、大きくなったり小さくなったりを繰り返す。時が一秒一秒と過ぎる。
……ガチャ……ガチャ……。
音が近づく。甲冑の音が近づく。スレイプニルが近づいている。
子供は一人、のたうち回ってる峰寺と鉄製の扉、両方を見比べてから呻いた。
「殺しのバチが当たってるにしては、早過ぎじゃないのかな」
緑色の炎は、騒がしかった炎は、もはや止まっている。蟻が駆除されたのかどうかは、窓の外を見る余裕が無かった二人にはわからない。だがホール内の静けさは戦いの後の安堵を表すというよりは、何か終末の匂いを持ち込んだ不安を表している。
「う…が……ぐ…」
「…陰王さま、僕にはどうすれば良いのか……」
子供はうなだれる。足元には苦しむ峰寺。先ほどよりも苦しいのだろうか、もはや地面には汗で水たまりができている。
……ガチャ……ガチャ……ガチャ

鳴り響いていた甲冑の音が止まった。子供の心臓が、跳ねる。
どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう　どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう　どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう　どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう　どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう
どうしよう
彼の焦る気持ちなどお構い無しに、遠慮無しに、鋼鉄の扉は叩き壊された。
ぐわらがっしゃん、といった風なやかましい音を経てて、鋼鉄が、ホール内に破片となって弾け飛んだ。それに伴って、ホールに差し込まれる新たな月明かり。螺旋階段の天井からの月光、がホールに入り込んできたのだ。その月光を背に背負い込んだまま、槍を突き出したポーズで静止している一人の甲冑騎士。その左右に二人。
………峰寺さまは、何をお考えなのかあっ！………
叫声、というよりは怒声。それが子供の影を震わせ、縮みこませる。
子供は思う。
『何をお考えなのか、ということは、すでに峰寺さまが緑色の炎を使ったことはばれているということ？　なんでばれたのだ、いや、そんなことは今はどうでもいい、鋼鉄の扉をあんな壊し方をして入り込んでくる時点でもはや彼らはこっちに友好的じゃないのは明らか。ならばどうする。自分だけ逃げるというのは…それはダメダメ、ぜったいダメダメ。なんとか峰寺を助けた上でこの場を切り抜けることを考えなければ、って、そんな方法あるかっつったら、僕には影にとろけることしか力がない。腕力だってないし、機転が利く優秀な頭脳をしているわけでもない。それに比べると相手はホールに峰寺がいることもわかっているし、事態を突破できる優秀な頭脳の持ち主であるかのようにも思える。どうすんの？　鋼鉄の扉を槍で粉々に出来る力持ち相手に、どうしろっての？　死……』

湧き上がる負の未来。絶・望っ。わけのわからなくなった子供は、わけのわからないままに怒鳴り声には怒鳴り声だという結論を導いてみたということで、実際に叫んだ。
「峰寺さまは、ここにはいらっしゃいませんがっ！？」
ホールに空しく響いて消えてしまった。気まずい空気。しかし、返答がすぐに返って来る。
……ならば、そこに転がっているお方は、誰であるか答えよ！……
いやん、いやん、そんなこと聞いちゃマジでいやんそんなん聞かんといてっ。そういう感じで、パニックが増した子供はもはや言葉が口から出なくなった。一瞬、呼吸の仕方を忘れるほどの混乱。いやどうしようもない、と思っていた途端に、子供の脳内にイメージが湧き上がって来た。想像したイメージは自分の頭が槍で貫かれることへの恐怖のイメージだ。
額の部分に尖がったそれが空気を切り裂きながら突っ込んできて突き刺さるすると血が出て前からも後ろからも血が出て影に溶け込む前に死んでしまうやがて僕の亡骸は土葬も火葬もされないから虫とか動物とかに食いちぎられるいやあああああだあああああ？
それを想像した途端に、額のあたりが無性にヒリヒリ、熱を帯びてきた。「いやです、ぼく、いやです。うう」
地面に平伏して駄々をこねる。そしたら子供は、頭ん中がピクンと一度痙攣して、そしたら気分が変わった。
『やっぱ、影に逃げてしまおっ』
先ほどまでの決意は一体どこに行ってしまったというのだろうか。子供は一瞬でそう決意して影に溶け込もうとした、だが、声。
……何も答えないということは、やはり峰寺さまが炎を操っているということなのだな……
その声が子供の耳に届いた後に、子供の目に映る、輝き。尖ったものがキラリと光を反射させて突進してくる。ホールを突き抜け、向こう側からこちら側まで、突き抜けてくる一本の輝き。速い。
「ひっ」

子供は即座に影に溶け込んだ。トロンと溶け込む。
溶け込んだ彼は、影の中で一息をついた。だが少しの間の安心は、すぐに打ち砕かれることになる。
ぐさり。
生々しい音であった。影の暗闇の中で、その音を聞いた。すぐに、鼻に注がれてきた匂いがあった。そして影に溶け込んでいる子供の肩に、ひんやりとした液体が。匂いは血の匂い。肩にかかった液体は、透明がかった青。
「血が」
青の血。それは陰人の血。そして透明がかったそれは、峰寺独特の色彩。ハーフがゆえの血の色。透明。
子供は影からゆっくりと、頭を出して、目を出した。肩まで出ると、肩の青血が月明かりの中で光を発する。それも陰人の血の特徴だ。
子供は槍の突き刺さっているその顔を、仰ぎ見た。その部分から青の血がしたたり流れて、月夜の中で煌きながら零れている。
青の血が煌くせいで、槍を突き刺してしまった峰寺の顔がよく目に映える。顔の中で言う、口に突き刺さっているのだ。峰寺の口を貫いているのが槍。いつのまに峰寺が立ち上がっていたのか、子供にはわからない。わざわざ立ち上がって口を開け、槍を受け止めたとしか思えない。
……峰寺さまっ……
子供の背後で叫声が上がった。ガチャ、ガチャという甲冑の音がホールを巡り、三人の騎士が、自分で投げた槍で峰寺を貫いたにも関わらず心配気な叫び。子供の内側で怒りが沸騰して、振り向いて、
「くるなっ！」
と怒鳴り散らした。その子供の髪の毛に、青の液体が滴って濡れた。子供は「う、う、」と唱えて、悔しそうに涙を拭った。
だが甲冑の騎士三人は、一度は止まったが、しかしすぐに走るのを再開してくる。

「くるな、くるな、くるな……！」
彼は頭を振ることで三人の騎士を拒絶しようとするが、それで相手が止まるはずもない。ずんずんと、口に槍を突き刺した峰寺と子供の側に、三人は走って近づいている。
己は無力だ、という事実を打ち払うためであるかのような喚き散らしを行う子供。そんな子供の目の前に三人が到着しそうになったその時に、しかし天井に備え付けられている証明が光を灯した。今まで月光の暗がりであったホールに、光が溢れる。
その場にいる全員が目を伏せた。陰人である子供は「ううっ」と呻き、影を一瞬よろめかせたが、強い光のおかげでむしろ影は濃いものに変わる。
全員の時が止まった。走っていた三人も止まり、子供の喚きも止まった。峰寺の口からは青い血が流れたままではあったが。
そしてその静寂がいくらか続いた時に、ホール中をこだました。

ぶひー。

一度だけではなかった。赤ちゃんが泣きむしるかのような回数で、ぶひー、ぶひー、ぶひー、ぶひー。
眼鏡をつけた女性騎士が辺りを見回す。
「豚？」
そばかす顔の女性騎士が答える。
「豚だね」
豚であった。その声は明らかに。
場が混乱する。
しかし、子供はすぐさま振り向いた。峰寺の側に。
なぜならば、豚の声は峰寺の側から聞こえていたのであるから。

槍。突き刺さっている槍。その様子が、おかしくなる。峰寺の口に突き刺さっているその槍が、ゆっくりと彼女の口から、抜け始めたのである。ゾ、ゾ、ゾ、と生々しい音をたてながら、槍が、己の意思を持っているがごとく、峰寺の口から抜き出ようと蠢く。その度に、峰寺の口からは、青い血が垂れ、彼女のどこかから、苦しそうな呻きが洩れる。痛々しい。

ぶひー、という豚の声は、耳を凝らせば、その槍から発せられていることが理解できる。子供はゆっくりと影の手を伸ばし、峰寺の口に突き刺さっている槍を、影の手で握った。ぶひひー、と多少やかましくなった豚の声が、響く。子供は、一瞬迷う顔をしたが、しかし次の瞬間には決意を込めた瞳に変わる。

そして、槍を。口から、一気に、引き抜いた。

「ぶ、ぶひ」

豚の叫びの後に、ぷしゃあ、というさらに生々しい音が発され、血がホールを躍る。

青の血が舞い踊り、床にちらばる。その血は多量。

「……はあ、…うぐ」

子供は嗚咽したい気持ちを堪えながら、影の手で、口から抜き取った槍を、力強く握り締めた。槍は「ぶ、ぶひひひひぶ、ひひ」と悲しそうに鳴く。　そんな悲しさに応えることは無く、

「お前が、峰寺を苦しめたのか」

子供は血眼で槍を睨み付ける。槍は「ぶひひ、ひひぶひひ」としか鳴かないので、子供は、

「ふざけるな！」

怒鳴り散らして、柱に、槍を思い切り投げつけた。柱に突き立つ槍。「ぶ、ぶひい」と小さく鳴き、そのまま柱から零れ落ちた槍は、地面にカランカランという乾いた音をたてて転がった。子供は息を、はあ、と着く。その背後で三つの声が。

「峰寺さま！」「峰寺さま！」「峰寺さま！」

何時の間にか三人の騎士が、青い血まみれの峰寺の元に、駆け寄

っていた。倒れている彼女を三人は、労わるかのように抱きかかえる。血が流れる。
子供はその様を見ていると、この三人をどうにかしてやりたい、という思いを感じて、自然と爪を手に食い込ませたが、しかし峰寺の血まみれの姿を目に入れてしまうと、途端に、虚脱が彼の身に襲い掛かる。
子供は、槍を折ろうと思った。豚の喚き声を放つ槍のやかましさに、怒りばかりを感じていた。
そして振り返る。柱の方へ。槍が転がっている側へ。
だが。異変はすでに起きていた。
「…あ？」
子供は眉を潜める。
「ぶひ、ぶ、ぶひひ、ぶひ、ぶひひいい、ぶ、ぶひひ」
槍の豚。あるいは豚の槍。それが、やかましく喚きながら、姿形をぐにょぐにょとさせることで、おかしなことになっていた。
子供が槍を折るまでもない。何時の間にだろうか、勝手に宙に浮かび上がっていた豚の槍が、空中で身を分解させていた。先端から末端まで、槍は粉々に砕けて粉末ほどに細やかな存在に変わっている。それなのに豚の槍が「ぶひぶひ」と呻いているのが不思議だったが、さらに不思議なことになっていく。
粉末ほどに細やかになっていた豚の槍は、再び姿形をぐにゃぐにゃと変えて行き、何か、ピンク色の物体、に、身を変え始めたのだ。
「ぶひ、ぶひ」
子供は、まさか、と思った。だが、ピンク色の姿がはっきりするにつれて、子供の疑惑は確信に変わる。子供が瞬きを一度するたびに、そのピンク色の物体は、眼球を作り、鼻を作り、口を作り、胴体を作り、足を作り、そして最後に、尻尾を作った。そして「ブヒッ」とそれが得意気に鼻声を鳴らすと、最後に、全身に甲冑を纏った。子供を一番驚かせたのはその甲冑である。豚の大きさに合わせてある作りではあったが、紛れも無く、それはスレイプニルの甲冑

であった。
スレイプニルの甲冑を身に纏った、豚。
峰寺を突き刺した槍が、そのような姿に、転じた。
転じただけではない。
「…な、なんだ……」
子供はいつのまにか足を下げていた。その子供の慄く姿に気が付いた女性騎士、マドアが視界をそちらに向けると、彼女も異変に気が付いた。マドアは三回ほどヘアの肩を、素早く小刻みに叩いた。
「……へ、ヘア……」
峰寺の惨状に気が向かっていたヘアは「なんだよ！」と煩わしそうに手をどけたが、しかしマドアがちっとも肩を叩くのを止めない。肩を叩かれると甲冑がガチャガチャ鳴るから五月蝿い。ヘアはマドアの叩いてくる手を、弾いた。
「うるさいなあ」
眉間に皺を寄せながらマドアを睨み付ける。その時にヘアは初めて、マドアの瞳がまん丸に見開かれているのを知った。ヘアは、それがマドアがもっとも驚愕した時に作る表情だと知っていたから、ヘアもマドアの視線を追ってみようと思った。
そういった風に二人の女性騎士が峰寺に対する興味を失っていくことに、部隊長であるヒデューンが気が付いたその時には、すでにヘアの瞳も驚愕で見開いていた。只事ではない状態で何、只事でない様子で他の場所を見てんだ、もっと峰寺様の心配をしないか馬鹿部下ども、と怒鳴りつけたくなったヒデューンではあったが、しかしヘアが驚きの表情を作るのも珍しいってことで、視線をみんなと一緒の方角に向けようとした。
その瞬間に、光に包まれた。
光はホール中を包み込んでいく。照明などよりも遥かに眩いその光が、暖かく皆を抱擁していく。血を流す峰寺のことも、慄く子供のことも、二人の女性騎士のことも、部隊長ヒデューンのことも。
溢れる光。

ぶひー。

小さな豚の鼻声を残して、ホールは静寂に包まれた。
そこにあった人間と陰人。青い血だまり。
誰も彼もが消え去った後のホールには、槍にヒビを入れられた柱以外、痕跡は何も、残っていない。
月を残して、みんな消えた。

預言者の遺した預言

桃色の甲冑騎士が引き連れる
扉を超え　理を超え
世界は憂鬱に溢れ　むせかえる
知と奇の夢が重なり　力の祝福を受ければ
純たる青血が流れ下り落ち　時を越えるだろう

力の猛々しい暴君の斧が　世を貪り
世界は斧の柄として　役割を持たされ
塔の傍観者はこれを憂い　純たる青血に宝物を授けるだろう
世界はこれにて救われる

だが純たる青血の下りも時に　陰謀を身に宿す
力の猛々しい暴君の斧も持ち　知と奇の剣も振るう主君を
誰が人と認めよう
世界は闇に包まれ　別世界を希求する
桃色の甲冑騎士だけが　頼りだ

大木の名前

陽がオフィスに差し込まれている。いくつもの斜線となって入り込んでくる陽を、みんなは眩いなあって煩わしく感じながらも、文句一つ言わず時を過ごしていた。そのオフィスには何人かの人間がいるが、みんなあまり生気がない。この部署は基本的に地味だから、活力が沸かないのが通常なのだ。美人のミノさんが男性諸君にお茶を配る。彼女得意のスーパー笑顔を振りまきながら、自慢のお茶で皆に活気を分け与える。

だけどみんなは元気があまりない。今日も黙々、オフィスで地味に、仕事。

例に洩れず、パズィーはデスクに座って、書類を作成していた。ちゃちゃっとこなしてふぅと深呼吸。そんな風にして今日もやり繰りする。そうやってして毎日を消化していく。それが私の処世術。

そんな風に心でリズミカルに呟きながらパズィーは、美人のミノさんが運んでくれたお茶を啜った。こんっ、とデスクに湯呑みを置く。縞模様の湯呑みで啜るお茶は繊細な苦味を醸し出した後に大胆不敵にも大仰な旨みを溢れ出させて来るということで、美人のミノさんのお茶は評判だ。この部署はそれだけが価値ある、なんて話は他の部署ではよく話されていることだった。ていうか、それくらいしか話の種がないのがこの部署。それと、パズィーの座っているデスクの裏に彫られてる『オレ、アガク、オレ』という文字に関する失踪事件の噂。存在感はその二つの噂のおかげ。この部署は地味だから目立たない。

で、パズィーはそんな部署で今日も書類を作成する。ちゃちゃっとこなしてふぅと深呼吸。そんな風にして彼が今日も書類を作成しようと試みているところで、モウリがパズィーに横槍を突き出してきた。

「なあ、お前よく生きて帰って来たもんだな。俺は、てっきりお前が失踪するものだと思っていたから」
　モウリは不敵に微笑んでみせる。モウリはいつでも自信に満ちているフリをするのが趣味なのではないかとパズィーは疑っている。そんなパズィーはモウリが苦手だが、同僚なので愛想笑いを返すのだった。
「へへへふふ」
　モウリは一気に不機嫌そうな顔に変わって、仕事をしているフリをすることを始めたので、パズィーは書類の作成を再開した。
　それから何時間が経過したころだろうか。メニカワが飯を食べ終わった時のことだ。
　部長がパズィーを呼び出した。パズィーは曇るが愚図るわけにもいかない。気乗りしない表情を隠さず部長に近寄ると、
「屋上に、きてよ」
　真剣な顔つきで彼はパズィーに言い放つ。差し込まれている陽を背負い込んでいる部長からは、オーラが発されている。偉い人ぶったオーラ。
「わ、わかりました」
　パズィーは噛みながらも了解して、そして再び、部長と屋上へと向かうことになった。
　席に戻ったパズィーに、モウリが嫌らしい顔をしながら語りかける。
「四って数字は、縁起が悪いんだぜ」
　パズィーはもはやモウリを一瞥することもせず、部長と屋上へ行くまでの時間、ひたすらに書類を作成し続けた。
「殴りたい」
　という独り言を、モウリへの嫌がらせのつもりで何度も呟きながら。
　やがて部長に肩を叩かれる。
「じゃ、いこうか」

「はい（嫌だなあ）」
席を立つパズィー。部長の背に付いて、二度目の屋上に向かって歩を進める。ふと辺りを見回してみると、ミノさんは相変わらず欠伸をしていた。メニカワは相変わらず飯を食べている。モウリだって仕事をしているフリをしているだけだ。何だか、パズィーにはそれが物悲しい。
涼しい冷房のオフィスを抜けて、蒸し暑い空の彼方へ。

七三の髪型を櫛で整えながら部長は、「本を読むと気分が良くなるんだよね」と、いつものくだらない話を始めた。
そして、屋上に転がっている何冊もの本の内の一つを拾い上げ、蘇芳のハードカバーを指でさすりながら「これも面白い本だった」と感慨深げに述べるのだ。相変わらず部長は気味が悪い。ゆっくりコンクリの地面に本を置くと、続いて次の本を拾い上げる。それは瑠璃のハードカバーに身を包んでいる本である。部長は「これは私の性には合わなかった」と述べてから、その本を放り投げた。瑠璃の本がしわくちゃにされて地に墜落する。ドサリ、ともの悲しい音。パズィーは眉を潜めながら、「今日も良い天気ですね」と話をはぐらかした。だが、空は曇ってる。
「どこが良い天気だと言うんだね。こんな曇り空」
部長は冷たく言い放つ。その後に風が吹き、部長の七三が乱れた。
「ああっ」
部長は喚きながら櫛を取り出し、七三を再び整えたが、また風が吹いて乱れた。「ったく、乱れる」と言いながらまた整えようとするが、結局乱れてしまう七三。それをニ、三回繰り返した頃になると部長も怒る。
「パズィーくん！　君は嫌な奴だな！」
またこれか、とパズィーは嘆息したが、表情では眉を潜めるだけで止めておいた。そして静かに、

「申し訳ありません」
と述べて、上司にへこへこする部下の図を自ら演じてみせるのだった。そんなパズィーの頭を下げる姿に部長は機嫌を直した。
「そうかそうか、うんむ」
髪が乱れまくっているがもはや部長は気にしない。ずんずん屋上のコンクリを歩き、床に散らばっている本の一冊を取り上げた。その表紙は真っ白。題名などは書かれていないようにパズィーには見えた。
（どんな本なのだろう）
パズィーは少し興味が湧いた。見知らぬ世界を文字を通して経験させて欲しいという欲望が滾って、気が付いた時にはパズィーは声を張り上げていた。
「それは、何という題名の本なのですか？」
部長はその真っ白な本のページを開き、それをゆっくりと指で、なぞっている。
少し間を置いてから、部長は答えた。
「これはね、一匹の、かつては人間だった狼の話なんだ。ほら、童話にもあるでしょ。嘘ついて結局狼に食べられちゃった人間のお話。その狼もね、人間の頃は嘘つきな奴だった。だから、彼は狼になってからも嘘つきだったんだよ。だから普通は群れを成すのが狼の習性なのに、その狼は常に一匹だった。このお話はそんな嘘つき狼が心優しい正直な羊に出会って、心を改めていくお話さ。最後に、狼は人間に戻るんだ。で、そのあとのオチが笑える」
そこまで述べたくせに、部長はパズィーに背を向けた。そしてトントンと屋上の隅にまで行ってしまい、柵に寄りかかると、隣のビルの鉄骨鉄筋コンクリート構造を眺め始めていた。後姿は中年男性そのもの。その背中にパズィーは声を掛けた。
「オチ、ですか？」
気になった。心を改めたのだから幸せになって欲しいものだが、と感じていた。

部長はゆっくりとパズィーに向き直り、手に持っていた真っ白な本を宙に放り投げた。パサリ、と地べたに落ちて、本は汚れた。
「知りたい？」
「はい」
「それなら、読んでみればいいよ」
パズィーは哀れな姿でページを開いている、その真っ白な本に近づき、手に取った。そしてページをパラパラとめくった。

狼は光に包まれ、人間へと姿を戻した。
羊は涙を流しながら、
「よかったね、よかったね」
と微笑んだ。そして、」めぇ～、と勢をつけて鳴いた。その声が青空へと吸い込まれていく。
人間へと姿を戻した狼は、しばし目をぱちくりとさせていたが、しばらくすると手を握ったり開いたりすることを始めた。
そして人間は羊に尋ねるのだ。
「羊さん羊さん、君は僕のことを知っているのかい？」
羊は驚愕した。今まで散々二人でお話をしてきたというのに。彼は、記憶を失くしてしまったのだろうか。
「忘れてしまったのかい」
「何を忘れているんだい、僕は」
羊は茫然と、しばらく草原で立ち尽くした。狼だったころの彼はもう、いないのだろうか。
でも、と羊は頭を振った。人間に戻れたのは、彼が真っ当な正直な者へと変わったからだ。狼だったころの記憶など忘れてしまったほうが、良いのかもしれない。罪深い記憶は邪魔なだけではないか。
羊はぼーっとした風な人間に、何をして上げられるだろうかと考えた。

だが、何も思いつかない。
羊が苦悶していると、人間は急に何か思いついたような表情をした。羊は彼の記憶が元に戻ったのかと少し期待した。
「戻ったのかい？」
慌てて尋ねる。だが彼は羊を見つめるなり、
「何がだい？」
とすっとぼけたような顔をするのだった。羊はがっかりした。
しばらく草原で人間と羊は時を過ごした。雲が流れ、陽が落ち、月が昇る。満月。
人間は立ち上がった。
「僕は、いかなくちゃ」
突然で羊は驚いたが、わけを聞こうと思った。
「なんで、いかなくちゃいけないんだい。ここにいればいいじゃないか」
しかし彼は首を振った。
「いかなくちゃいけないんだ、ごめんね」
そうして人間は、羊のことを一度も振り返らず、満月の方へと走り去っていったのだった。
羊は涙を流した。悲しみが羊の胸を襲っていた。
それからどれくらいの時間が経過したころだろうか、羊はずーっと泣いていた。
だが、満月が沈み、陽が登ったころ、彼は帰って来た！
羊は歓喜して彼を迎え入れた。人間は片手を羊に見えないように隠しているように見えた。羊は何だろうと不思議に思ったが、それよか人間が帰って来てくれたことの方が嬉しかった。
「よかった、よかった」
羊は飛び跳ねる。人間は片手を隠したまま、
「ごめんね、ごめんね、ごめんね」
と何度も繰り返す。羊は笑った。
「いいんだよ、そんなに謝らなくても。それよか、何かして遊ぼう

か」
羊は嬉しかった。だが、人間の顔は曇っていた。
「どうしたの？」
羊は尋ねる。
すると、人間は曇った表情のまま、ゆっくりと片手を、隠していた片手を、羊に見せた。
そこには刃があった。斧だった。
驚いている表情をしている羊の目の前で、人間は申し訳無さそうな顔をした後に、述べる。
「ごめんね、羊さん。僕、お腹が空いているわけではないんだけど、だけど、記憶も戻っていないんだ。だから、記憶を戻すわけではないんだけど、君のことを殺すわけではないんだけど、だけど、だけど、ごめんね」
そう述べる人間の言葉を、羊は黙って聞いた後悶絶したが、しかし、その後には。
羊は微笑んでいた。
にっこりと。
「いいよ、人間さん。いや、狼さん」
こうして斧は振り上げられ、下ろされた。
ひどく恐ろしい光景が、草原に舞い散る。
人間は、羊の亡骸をしばらく見下ろしていた。やがて、大きな声で笑った。
「やってしまった、やってしまったよ、ははは。記憶なんて取り戻しているものか、羊さんを殺したりなんかするものか、僕が嘘つきなわけないじゃないか、あはは、あはは。……ありがとう、羊さん。ごめんなさい、羊さん。さようなら、羊さん」
こうして人間は斧を使って、自ら命を絶った。
血にまみれた人間は死の間際に狼へと姿を変えて、羊の隣へと身を寄せた。
二つの血が混ざり合って、やがて亡骸は草に覆われていく。

やがて、この悲しい狼と羊のお話は村人たちへと伝わり、二匹への供養の意味を込めて、木が植えられたのだと言う。
その木の名前は「　　」
これまでも、そしてこれからも。
狼と羊は、私達を見守ってくれるでしょう。
偉大なる大木として、私たちを包み込んでくれる、ことでしょう。
草原に紛れ。自然の安らぎとして。

陽の眩さが文字に染み込む。パズィーは空を見上げた。雲が失せ、太陽が空に。　パズィーはゆっくりと本を閉じた。そして真っ白なそれをコンクリの地面に置くと、ハァ、と小さなため息をついた。
「なんでこんな不幸なお話になってしまうんですかね。それに、木の名前は何故空白なのでしょう。ていうか、全然笑えませんよ。むしろ悲しいというか感動的というか。少なくとも笑ったりは出来ないです」
パズィーは怒りを感じていた。本を読んでいる途中から、心の中で膨れ上がって憤りが満ちたのだった。何に対して怒っているのかはパズィーにはあまり判然としなかったが、部長に対する怒りもそこには含まれているのは、それはわかった。この話は笑えるものではないのに、部長はオチが笑えると言った。そのことがパズィーには許せない。
部長を睨み付けようと思い、柵に寄りかかっている彼に視線を向けた。彼は柵に寄りかかったまま、今度は真っ黒な表紙の本を手に取っていた。
「この話もオチが笑える」
そんなことを言う部長にイライラしながらも、パズィーは、
「それはどんなお話なんですかね」などと尋ねているのだった。
部長は苦笑してから、真っ黒な本を宙に放り投げ、地面にパサリ

と落とした。
「もう面倒だから、オチまで含めて簡単に教えてあげるよ。これは、ある一人の、勇者のお話だ」
「勇者ですか」
「そう。聞きたい？」
「聞きたいです」パズィーは即決。部長はにやにやしながら、勇者のお話をする。

その世界には魔王はいません。ですが、勇者はいました。なぜなら、もしもの時に備えているからです。
魔王が現われた時に勇者を育成するのでは、勇者が成長する前に世界は滅んでしまいますから、予め平和な時から、勇者は常々育成されているのです。ですから勇者一家というものも存在しています。代々の勇者家系で、みんな勇敢に教育された猛者どもです。魔王は何時になっても現われないので、実践経験があるものは一人もいないのが傷ですが。
さて、ある勇者は退屈でした。毎日毎日訓練ばかりで嫌気が刺していた彼は、魔王を作り出してしまえば退屈をしのげるじゃないかと気が付きました。ですから、彼は友人のなかで最も優秀な者の家を訪ねて、魔王を作ってもらうように頼み込みました。その友人は頭は良いのですが要領が悪いのでお金がありません。ですから友人は勇者に、「金くれ。そうすりゃ魔王作ってやるよ、丁度良い感じのさ」と述べるのでした。勇者はその日からアルバイトして金を稼ぎ始めましたが、屈辱の日々でした。勇者たる者がアルバイトをするということは、誰が見ても滑稽だったので、村人たちは「ついに勇者一家もここまで落ちぶれたか」と笑うのです。勇者は歯を食いしばって金を貯めました。そしてついに、友人が頷くほどの大金を貯め込んだのでした。友人は「勇者、お前サイコー。だから、オレもお前にサイコーの魔王をプレゼントしてやるぜ」と述べ、それか

ら一年間、友人は地下室にこもりました。勇者も来る日に備えて毎日毎日トレーニングです。

ある日、夜中に。地響きが、村に鳴り響きました。そして、友人の家が大爆発を起こしたのです。

ドッカーン！

あまりの衝撃で村人たち全員が目を覚ましました。そして慌てて外に出れば、そこには……

「勇者さまはいないかぁ！　勇者さまを呼ぶんだぁ！」

村人の誰かが叫びました。村人たちは逃げ惑いますが、すぐに食べられてしまいます。

魔王は、人間を食べるのです。

「うららがぐふぁらっががががらおきらえふぁそれがすくみすずがみえれただえるおおいいいうううううあががえみがなりでるが」

魔王は言語を話すような、頭の良い魔物ではありませんでした。炎を身に纏った巨人。それが、友人の作った魔王の姿です。魔王は右手に巨大な棍棒を持っていて、その棍棒は生きているのでしょうか、目と口がくっ付いています。棍棒が人間に振り下ろされれば、人間は棍棒に『くっつけられて』しまいます。そしてくっつけられた村人は棍棒に食べられます。棍棒は人間を食べれば食べるほど力強く変わりました。大きくなるのです。

「うららがぐふぁらっががががらおきらえふぁそれがすくみすずがみえれただえるおおいいいうううううあががえみがなりでるが」

魔王は口走りながら、その巨大に変わった棍棒を、自ら食しました。そして棍棒を全部平らげてしまうと、腹の辺りから新たな棍棒を産み落とすのでした。はじめは糸ほどに小さな棍棒なのですが、むくむく大きくなって、すぐに魔王にふさわしい大きさの棍棒に変わるのです。

人間たちはその異様な光景を目の当たりにして、逃げる気も失せ

てしまいました。
「この世の終わりだ」
誰もがそう思いました。その時に、勇者が、ついに現われたのです。
勇者は剣も盾も持っていません。最近の勇者は、拳で闘うのです。彼は気合を入れると、全身を光で包み込みました。
「友人の仇は、俺が取ってやる！　みんな、俺の勇姿を目に焼き付けろぉっ！」
ドンッ！　凄まじい地を蹴る音と共に、宙に浮かび上がる勇者。魔王の遥か頭上にまで飛び上がり、拳を構えながら急降下。魔王の顔面めがけて、一撃を振り下ろします。
ガッ！
しかし、魔王もさすが魔王だけあって、棍棒を盾にすることで、その一撃に耐えてみせました。棍棒はボロボロに砕けてしまいましたが、しかしすぐにお腹から新しい棍棒が産み落とされます。対して勇者はなんということでしょう、先ほどの一撃で、自らの拳を痛めつけてしまいました。
「ぐ、ううう」
勇者は地面でのた打ち回ってしまいます。村人たちが全員で勇者に声援を送りますが、勇者はのた打ち回るばかりです。そんなことをやっている内に、魔王の新たな棍棒は村人たちを吸い尽くし、どんどん巨大になっていきます。
勇者は小さく呻きました。
「友人の奴、いくらプレゼントと言ったって、これはやりすぎだ。まるで勝てる気がしない。なんで勝てないんだ。俺はレベル９９くらいはあるが、あいつはさらにその先を行っているのだろうか。……魔王めぇ！」
勇者は始めて他者を憎みました。これまで勇者が己が最強過ぎるがために他者を憎む必要がありませんでした。憎まなくても余裕だったからです。ですが、勇者は自らより強い魔王の圧倒的存在感を

前にして、相手を憎むほかありませんでした。
その時に、勇者から憎しみのオーラが滾ります。勇者の身体全体を纏う、負のオーラ。勇者はこのとき悟りました。
「俺は、俺の限界を今この瞬間超えたらしい」
レベルは多分５００くらいはありました。急激な成長でさすがの魔王も威圧されます。
「うららがぐふぁらっがががががらおきらえふぁそれがすくみすずがみえれただえるおおいいいいいいいいいいいいいいいあががえみがなりでるが」
「黙れっ！」
勇者の声で空気が痺れます。魔王は尻餅をついてしまい、棍棒を手から離してしまいました。降参の意図です。
ですが、勇者はさすがに情け容赦ありません。憎しみのオーラはまだ燃え滾っております。
高く高く飛び上がりました。そして、空で一旦止まり、力を全力で搾り出します。そのエネルギーを全て拳に集めてから、勇者は急降下。魔王に向かって、拳を振り下ろしました。
ガッ！
しかし、またもや拳は遮られてしまいました。何かが、勇者の拳を受け止めたのです。戸惑っている勇者の瞳に、一人の人間が映りました。
黒のローブを身に纏ったその男は、翡翠の両眼をしていました。その黒いローブの男は片手で勇者の拳を受け止めています。ということは、もう片方の手は空いています。彼はその手で、呆気なく、魔王を殺しました。手の平から変な衝撃波を打ち出して、魔王を一瞬にして消滅させたのです。
「き、貴様は、誰だ」
勇者のジェラシーがまたも爆発しました。憎しみでレベルが１００００は超えているでしょうか。しかし、拳はうんともすんとも動いてくれません。黒のローブの男に、拳を握りこまれている為です。

黒のローブの男は、冷静な口調で、勇者に述べます。
「お前は雑魚だ。なぜなら、俺が真の魔王だからだ」
勇者は混乱しました。
（本物の魔王が、現われたというのか？）
魔王は勇者を嘲笑います。嘲笑ったのち真剣な顔つきに変わり、こう述べてきます。
「俺は貴様などデコピンで殺せる。だが、貴様にチャンスを与えよう。修行の期間を与えてやるよ、勇者。俺は貴様が俺の相手として足りえる存在に変わるまで、暇つぶしをしている。だからまあ、勇者。貴様は、もっと拳を鍛えるが良い。それが俺に対抗できる、唯一の力となるのだから……」
勇者は蹴り飛ばされました。遥か遥か、どこまでも遠くに、勇者は吹き飛びます。
こうして勇者がいなくなった村は、黒いローブの魔王が支配することとなり、陰に包まれたのでした。
勇者は、吹き飛ばされたその地で、修行に励みました。しかし、何時になっても自らが成長できる気配がありません。イライラした勇者は、禁忌の方法に手をつけました。野獣と自らを混ぜ込んだのです。勇者の姿は醜くなりました。醜い鱗だらけの人ならざる者です。しかし、力は手に入れました。こうして力をつけた勇者は、魔王と再び合間見えることになったのです。
決戦。遥かなる草むらでの決戦。何百年も彼らは、大いなる存在の慰めがある時まで、戦いを止めませんでした。
大いなる存在は滅びかけた世界を哀れに思い、勇者と魔王を、いくつもの細かい存在へと切り分けました。細かく切り刻むことで、力を分散させたのです。
こうして、新たな世界は始まりました。
彼らの世界は、これからどのように変わっていくのでしょうか。それは空にも海にもわからないことでしょう。
大いなる存在が、見守っています。

なかなか長いお話だったので、お昼を過ぎてしまった。蒸し暑い中、どっかでセミが鳴き始めた。
まだセミっているんだ、なんて、パズィーは不思議な気持ちになった。
説明を終えた部長は恍惚としている。物語を説明することが心地よかったのだろうか。
「ま、これで終わりではないらしいんだけどね。続編があるんだよ」
部長はパズィーに得意気に述べた。
「なんだか神話みたいな決着の仕方でしたね。大いなる存在とか、突然出て来たし」
パズシーが感想を述べると、部長は、
「まあ、続編が出ればそこら辺の詳しいことも明らかになるんじゃないかな。ていうか、続編はここに置いてある」
と言うのでパズィーは驚いた。部長はパズィーの足元を指差している。足元に目を向ければ、そこには紫のハードカバーが為された一冊が陽の明かりを反射させていた。きらめいている。
「これが…」
パズィーは腰を屈めて、そこに書かれている題名を読み取ろうとした。だが、見たことの無い言語なのであろうか、一文字も読めやしない。中身を開いても同様で、ページをいくらパラパラめくっても一文字も読めない。何だよ、ふざけんなよ、と悪態をつきたくなったパズィーだが、ふと気が付いて黒のハードカバーの、勇者の本を手に取った。そしてパラパラやってみる。すると、そこに書かれていた文字を一文字も読むことが出来なかった。勇者の本も、見たことの無い文字で構成されていたのだ。
「部長は、これを読めたんですか？」
「うん、読めたね」
「何文字っていうんすか、これ。初めて見ましたよこの文字」

「この文字は君には読めないよ。ていうか読まれてしまっては困るんだ。君がこれを読めてしまっては、僕の存在は必要なくなるしね。つまりさパズィー君。なぜ読まれたら困るかって言えばさ、君がこの物語に関与しているからなんだよ」
「…関与？」
「そうだよパズィー君。君はこれからオフィスを旅立ち、人々への希望として物語に入り込まなくてはならない。そのためには僕はヒントを与える役割があるのだが、ヒントしか与えてはならないことになっている。だから、君は今から僕が言う言葉を、忘れてはならない。いいか、耳を澄ませ……」
「ちょ、ちょ、ちょっと待ってくださいよ部長」
あまりの急展開に目を丸くするパズィー。だが部長は言葉をやめない。
「僕にだって全てがわかっているわけではないんだよ、パズィーくん。だが、やるだけのことはやらなきゃいけないだろう。私は君をこの世界に呼び出して、君に伝えなきゃいけない言葉を伝える。そうすることで君はあちらの世界に戻り、君の役割を果たすことが出来る。ハーフの彼女と共に、きっと物語を完結させることが、君なら出来るはずさ」
「何を言ってるんですか。何を……」
部長が光り出した。ハゲ気味の七三ヘアーが恐ろしいほどに乱れ狂ったが、しかしそんな乱れ狂いを気にさせない程の眩い輝きは、屋上全体を包み込もうとしていた。パズィーは勿論、部長に包み込まれる感じがして不快だったが、しかしパズィーは身体が宙に浮かんだので、逃れることも出来ない。
パズィーはそこで思い出した。そうだ、ここは峰寺さまの内側ではなかったか、と。そして同時に思い出した。そうだ、俺はパズィーじゃないか。この世界で生きるパズィーではない。スレイプニルの甲冑騎士パズィーではないか、と。
「ふおおおおおおおおおおおお」

部長の光エネルギーが、部長の凄まじい雄たけびが、パズィーを包み込む。それにつれて、パズィーの全身は姿形を変えて行き、さらに甲冑も身に纏った。その甲冑の重々しさ、重厚感に懐かしい感覚を覚えながら、パズィーは自分の為さなければならないことを思い出した。

（俺は峰寺さまを守らなくてはならない）

使命感に燃えたパズィーは一声吠えた。ぶひー、と。

宙に浮かび上がったままパズィーは既に米粒ほどの小ささの、かつていたオフィスを見下ろした。部長のハゲ頭が太陽を反射していて眩しい。パズォーはオフィスに居た仲間達のことを思った。モウリ、メニカワ、ミノ、オカザキ。みんな、良い仲間だった。あまり思い出がたくさんあるわけではないけれど、まあ、それなりに楽しかった。お茶が上手かった。『オレ、アガク、オレ』がなんだかミステリーだった。良いオフィスだった。

パズィーは決意する。元の世界に戻っても、彼らのことは忘れまい、と。

そうして彼は旅立った。虚空を旅し、極彩色を渡り歩き、元の世界へと。

部長に教えてもらった言葉を、頭で反復した。

大木の名前。狼と羊の大木の名前。

繰り返し繰り返し思い浮かべながら、パズィーは「ぶひっ」と、気合を入れた。

ロボットと怠惰な男（前書き）

少し話がそれます。

ロボットと怠惰な男

水車がカラコロと音を経てて回っている。牛が呑気な風に鳴いている。犬が忙しなく丘を走り回っている。花が風に吹かれながらも、懸命に茎を折らない。川ではトゲトゲした尾びれをくっ付けた魚が飛び跳ねる。

閑静な村だ。そこは。

平和な村である。だが、そこは世界の中でも、一風変わった特徴を持っていたりもする。

そういう村の中の、木造建築の一軒。

そこに一人の男が住んでいる。この男のことを一言で説明するならば。

男は『怠惰』だ。

陰人と爬竜人と人間。その三つ巴の世界で生きるには懸命さがあまりに足りないほどに、男は怠惰だった。

もちろん、男がそのような性格に至るのには経緯がある。だが経緯はどんな人間にもあり得ることだから、その男の経緯が世間で重要視されることはまず無い。人が注目するのは男の現在の怠惰である。姿勢である。その男の事情など誰が知るだろうか。知りたくもない。だが、男とて自らの事情を他人に理解してもらおうなどとは到底思っていない。というのも、男には他人と関わる必要が無いので、他人にどう思われようが問題が皆無なのであった。では何故男には人と関わる必要がないのか。答えは簡単で、男が人と関わらなくても、男は生きていく手段を、他、から与えられるのである。

その、他、とは、先祖の遺産。

彼のご先祖様は機械職人。ロボットを作っていた。

代々のご先祖様たちが、世代を超えて作り続けてきたロボット。それが先祖の遺産であり、男にとっての生きる手段、他、なのであ

る。
　ロボットたちの数は一つや二つなどではなく、その集団だけで一つの村を構成していると言っても良いほどに、彼らは多数だ。人間と同じように、ロボットは営む。
　少し離れたところに住んでいる人間たちからは、このロボット集団の営みは異様で、というのもまるで自分たち人間の合わせ鏡であるかのように、ロボットたちは毎日仕事や趣味に没頭しているからである。生活しているのである、ロボットたちは。まるで『私達は人間と何ら変わりありません』と主張している様子でもあるので、人によってはロボットたちに反感を覚えることもある。それ程に彼らは精密で、高性能だった。
　そしてそのロボットたちは、一人の人間の為だけに、毎日稼動しているのである。元々が人間の為に動くように設計されたロボットたちだから、もちろん、その行為を違和感に感じることも無い。ロボットたちは一人の人間をまるで『王』であるかのように取り扱い、故に彼がロボットにどんなひどい仕打ちをしたとしても、ロボットたちは潔くそれを受け入れるのだった。
　怠惰な男は、昔はとってもスマートだった。どのくらいスマートだったかと言えばモデル級だったのだが、一台のディスプレイで娯楽を楽しむあまり、今では脂肪が彼の全身を覆い纏い、どこもかしこも脂肪の塊と化した。マシュマロと言っては易い、団子と言っても易い、何と言えば良いのだろうか、表現が見当たらない程に彼は塊だ。体重は二百キログラムを軽く超えている。怠惰だからこうなったのだろうか、それとも体質の問題だったのか。それはわからないが、問題は多々あり、例えば、男は自らの座っている快適なリクライニングチェアーから一歩たりとも身動きすることが出来ない。尻が重りとなり、彼は直立二足歩行を行うことを困難にしてしまったのだ。なんと難儀なことか。
　そんな難儀を助けるのが彼の身辺世話役のロボット『稼動一号改』さんである。メイドの格好で彼の生活を助ける彼女は、目に光が灯

っていないことを除けば人間と何ら変わり無い。もっとも精密に作られたロボットである。というのはやはり、先祖代々の製作者の気合の入れ方が、彼女に関しては他のロボットよりもだいぶ違う。多分、他のロボットよりも何倍以上かは手間がかかっていると思われる。

そんな風に手間をかけられて作られた彼女は毎日、毎日、他のロボットたちと連携して『王』に喜んでもらうために様々な行為を行う。魚を釣っては焼き、野菜を育てては収穫し、食材を調理しては豪勢な食卓を作り出す。掃除も容易くこなし、男の汚した衣服も次の日にはおろし立てみたいにふわっふわ。男が娯楽に飽きたときには、王の部屋の窓から見える景色に、花火を打ち上げる。色も様々、形も様々の、なかなか素晴らしい花火を打ち上げて、男を楽しませる。『王』は当然のように行われるそれらの奉仕に、当然のあまりに、感謝の気持ちを感じることさえも忘れていたものだが、しかし、ロボットたちは毎日毎日、男の『怠惰』を受け入れるのだった。いや、受け入れるなどの感情の流れは無い。なにせ、彼らはロボットなのだから。自我などは、持ち合わせないように作られているのだ。

しかしある日。山に獣を狩りに出掛けたロボット二体が、破損して帰って来た。見るも無残な姿に、他のロボットたちは彼らに駆け寄り、「ハヤク修理シナクチャ駄目ダヨ」と心配した。だが二体はガクガクと震えるばかりで、何も喋らない。頭も半分くらいは欠けてしまっているし、身体だってそこら中から黒い煙を吐き出している。はやく横になって新たな部品を取り付けるなどしなければ稼動停止してしまうのは、時間の問題だった。

だが二体は、仲間のロボットたちの手を跳ね除ける。

「何ダドウシタ。何故修理ヲ受ケヨウトシナインダ」

仲間たちが焦って問いますが、しかし二体とも仲間たちから後退りしては距離を置こうとする。

「寄ルンジャナイ。近寄ルンジャナイ」と仲間達を避けているのだった。

「何ガ嫌ナノカ教エテクレ」
誰かが問うと、二体の片割れが黒煙を吐き出しながら喋る。
「ドウヤラ、私タチニ奇妙ナモノガ入リコンダ。皆、逃ゲテクレ。ドウニカナッテシマイソウダ。皆、遠クニ逃ゲルンダ。主人ヲ連レテ、逃ゲ……」
ミシ、という不吉な音がロボット二体から鳴り響く。そして、片方のロボットの足が小さな爆発。小さい爆発といえども完全に足としての機能を奪われてしまった足。彼は「グァア」という小さな呻きを発しながら、ガチャリと地に倒れる。
…ノ、ノ、ノノノタウチマワッテ、ノタウチマワッテ…
妙な片言を残しながら、彼は数秒後には、目の部分の黄色ランプの明かりを無くし、そのまま身動きをしなくなってしまったのだった。そしてもう片方のロボットも続く。
「…ウ、ア、ア、」
と呻き始めると、携えていた狩猟に使う巨大な鉈を、手落としてしまった。重厚感のある音をたてながら鉈が横たわる。
「イ、一体、何ガドウシタッテ言ウンダ」「誰カ救護係ヲ呼ンデ…」「駄目ダ、モウ手遅レダヨ…」「ソンナコト言ウナ。マダ希望ハアルダロウ…」「奇妙ナモノッテ何ダ」「山ニ何カガ現レタンジャナイノカ」「ソンナコトヨリ速クコイツを救ワナクテハ」「駄目ダ、コッチハ完全ニ機能停止シテル…モウ手遅レダ」「ナンテコトダ」「速ク救護係ヲ」「モウ駄目ダヨ手遅レダ」「…ウウ…」
皆が騒いでいる間に、二体目も呆気なく地に倒れ、そして目の黄色ランプの輝きを失ってしまった。彼も、
…ノ、ノタウチ、ノタウチマワッテ、ノタウチマワッテノタウチ……
という奇妙な言葉を残して動かなくなったので、ロボットたちの間でざわめきは広まるばかりだった。全員がその言葉の意味を探るが、しかし答えを出せる者は一体もいなかった。
そしてその日から、ロボットたちに感情が生じた。恐怖という感

情が彼らを支配し始めたのである。それが彼らの自我の萌芽であった。恐怖が。

「…あのさぁ一号。何体かを調査に行かせればそれで済むんだって。調査型っていう秀でた奴だっているんだから、そいつらに山を調べさせればさ…見つかるよ原因が。それで恐怖も取り除かれるから、万事解決ってね」

もごもご言わせながら、名前は『六』という男は、体重二百キログラムの肉体をリクライニングチェアーの上でたゆたゆさせた。たゆたゆさせる以外動作が出来なさそうなくらい、六の身体は脂肪に覆われている。ろくでもない体だ。

村はかつてない程の問題に覆われ始めていた。一週間の間に、恐怖は増長するばかりだった。そのせいで生じたのはロボットたちのサボタージュ。彼らは仕事をさぼるようになった。

「イ、イヤダ」

と言いながら働くのを止め、ガクガクと痙攣するばかりになってしまうというロボットが、一体二体所では無かった。村はそれぞれが役割を淀みなく行うことで成り立っていただけに、それは痛手だった。村の機能は停止し、主人である六は生活を満喫することが出来なくなった。もちろん食料の貯蔵などはあるのだからある程度の生活は行えるのだが、しかし六は生活の水準を落とすことを余儀なくされた。それが彼には不満だったので、さっさと問題を解決したかったのだが、問題を解決することがなかなか出来なかった。ロボットたちが何かに脅えているということは一号を通じて六も理解することが出来たが、しかし自らは脂肪のせいで問題を何一つ解決できない。こういう時のために調査型というロボットも存在するものだから、六は調査型に山への調査をさせるよう、一号に訴えている

のだった。しかし一号は、紅茶をデスクに置きながら、首を横に振る。
「駄目なんですよ六様。調査型も恐怖にすっかりやられてしまってて、ちっともやる気出さないんですから。私も頼んでみたんですけど、駄目ですね。ぜんぜん。言うこと聞いてくれません」
その答えを聞いた六は一気に不満気になった。脂肪をピクピクさせた。
「おっかしいなぁ。調査型はこういう時のために作られたってのに、なんだってんだ。…まったく、僕にこの難儀な脂肪さえ纏わりついていなきゃあ。……一号、なんで脂肪を吸引するマシーンってのを、僕の先祖は考えなかったのかね。やっぱ先祖代々スマートだったものだから、そんなマシーンを作ろうなんて思いもしなかったってわけかな」
そこまで一息に言うと、彼は呼吸をみだらに行い、腹の脂肪をぎゅっとつまんだ。お餅のように伸びる脂肪は凄まじい。彼はそれを憎々しげに見つめたのち、はあ、と大きなため息をついた。
そして紅茶を飲んだ。ズ、ズ、と音をたてた後、プハーと勢いよくマナーを気にしない。
「味がちょっと違うね」
「いつもよりは出来が悪いかもしれませんね」
「うーむ。……まったく、使えないロボットたちだな……」
癇癪気味に言い放った後に、脂肪のプルプルを激しくさせる六。そして彼は背後に立っている一号を、身体を必死によじらせながら、手招きして呼び寄せた。
「…」
一号は無言でその手招きに応える。彼女は素早く、六の手元にまで近く。
そしてはたかれる。ニ、三回。往復ビンタ。
六は脂肪に覆われているわりには、手首の切り返しは速い。そのビンタによって怯んだ一号に隙を与える間も無く、六は彼女の銀髪

を掴んで引っ張り上げてみせる。六はそれまでの間、不気味にニヤつくばかりで何も喋らないが、だが一号の反応を楽しんでいるのだろう、彼女の様子をジッと観察している。一号はだが、感情がそもそも備わっていないせいだろうか、その六の行為に対して、なんらの怒りも侮蔑ももちろん喜びも、感じていないような素振りではあった。

六と一号は、そのまま数秒、不思議な沈黙のまま互いに見合うが、やがて六は銀髪を手放す。

脂肪をプルプルさせた後、髪の毛を引っ張り上げたことに対する反省も見せないまま、彼はディスプレイへと顔を向けた。銀髪を手放された六も、何事も無かったかのように、手招きされるまで立っていた場所に、身を戻すのだった。

しばらく時間が経った後。一号が六に述べる。

「六様。私が調査に向かいます。幸い、私は高性能に作られているせいか恐怖は感じていない様子です。あなたの為に仕事をこなすことは可能なようです」

狭い部屋に響く彼女の声は、無感情ながらもはっきりとしていて力強い響きだ。六はディスプレイからは目を離すことは無いまま、しばらくは何の反応もしなかった。

「六様…」

彼女が伺い立てるような口調で言うが、それでも六はディスプレイと向き合うばかりだった。そのまま時間が過ぎる。だが、やがて彼は何かを思いついたようにして、顔の向きは変えないが、しかし一号に許可を出す。

「調査型は恐怖に脅えていようがなんだろうが、出番の時にしっかりと活躍してもらわなければ困るからな。一号、本来はお前が山に向かうべきではないんだ。だから無理矢理でも調査型は連れて行け。あいつら軽いから、君が腰にでも携えて行けば、逃げ出すことだって出来ないだろう。とにかく、君一人でいっちゃあ駄目だよ」

彼はそこまで一気に述べると、なぜだろうか、何度も首を縦に頷

かせる。そんな彼の元に何時の間にか一号は再び近づいていて、先ほど自らがはたかれるのに使われた片手を、白い指で握り取った。一号はニコリと笑い、
「心配してくださってありがとうございます六様。気をつけて、行って参ります」
と述べるのだった。そんなことを言われた六は、表情を変えたりはしなかった。それは、表情を変えないように必死に抑えているが故の、無表情のようでもあった。対して一号は、作られた完璧な微笑みを崩さない。握り取っている脂肪だらけの手の平に彼女は軽くキスをすると、
「では、なるべく早く帰りますので」
真剣味を帯びている整った表情に変わり、握っていた手を離す。そして颯爽とした足取りで部屋を、出て行った。
静かになった部屋で主人の六は、一号が出て行った後の部屋でしばし嬉しそうに表情を崩していた。抑えようとして抑え切れていないようなその崩し方は気持ちが悪い。
「ああはやく、帰ってきてくれないかなぁ」
夕日で朱に染まり始めた部屋の中で、プルプルと震えながら、「んんん」と呻き、やがて永遠の眠りと見せかけて普通に眠った。

ロボット村の変化

一号は調査型を携えることも無く山へと向かおうとしていた。山は村を見下ろすかのように、もしくは、包み込むかのような、巨大さ。緑の山はでかい。

彼女はそれをしばし見上げ、この村の位置から山の異変を見つけ出すことは出来ないかと調べていたが、目を凝らしても何もわからなかった。山は薄霧に包まれているだけで、特に普段と何ら変わりない。

彼女は木造建築から足を踏み出し、山へと続く道のりをとぼとぼと歩いた。

途中、何体もの『恐怖』に取り憑かれたロボットに遭遇する。みんな一様に頭を両手で抱え込んでいる。一号は村に流れる川近くでうずくまっている、その中の一体、洗濯専用ロボットに、何が怖いのか尋ねようと近づいた。そのロボットはいつも忙しなく川で、みんなが使う衣服を洗っていたというのに、恐怖に取り憑かれてからというもの、川岸で頭を抱え込んだまま、「ウウ、ウウ」と呻くばかりの不良ロボットに変わってしまった。

「何がそんなに怖いの？」

彼女は優しく尋ねる。だが洗濯専用ロボットは、

「話シカケナイデ！」

とヒステリー気味に、彼女を追い払おうというのか、手で虫を払う仕草をした。

「嫌ナノヨ、モウ何モカモ怖イ！　洗濯ナンテシタクナイ！」

頭をブンブンと左右に振る洗濯専用ロボット。一号は何か助けになる言葉を述べてあげるべきなのだろうかとも感じたがロボットにそれを言っても慰めになるのか疑問だとは感じた。というか一号からすれば、恐怖という感情をロボットが抱くということが心底不思議であった。

…恐怖とはなんなのだろう…
そのように考えながら、一号は川を離れ、橋を渡って山へと再び足を速めた。
彼女が立ち去った後に、洗濯専用ロボットは、川へと機体を投げた。身投げ。
そんなことを一号は気が付かぬまま、薄霧に包まれている村をとぼとぼと歩く。
「何かが変わり始めているのかもしれない」
一号は歩きながら、そんなことを呟いた。そして何かが揺らぐのにも気が付いた。彼女は立ち止まり、今何が揺らめいたのだろう?、と考えたが、しかし目の前の景色が揺らめいたのか自分の何かが揺らめいたのか、まったくわからない。だけれども彼女は確かに揺らぎを感じたのだ。わずかではあったが。
彼女は立ち止まったまま、緑の山を再び見上げた。
「何かが変わり始めているのかもしれない」
もう一度その言葉を呟いてみた。しかし今度は何も揺らがない。
…なんだろう。何かが変だった。なんだろう…
こんなことは初めてだった。作られてこの方十数年稼動し続けてきた稼動一号改は、この時ほど変な気持ちになることは今まで一度も無かった。そもそも、変、というものが何なのか、正確には何なのか、まるで掴めない。
…私は、何かが変わるのだろうか…しかし、変わるとは…?
一号はぎゅっと目をつぶってから、大きく開いた。
それから、自らの使命を思い出した。主人の六のことを思い出した。
…そうだ、私には主のために役割を果たすという義務がある。そのために稼動しているのだった…
自らの役割を思い起こすと、やるべきことがはっきりと浮かび上がってくるのがわかった。彼女はキッと山を一瞥した後、視界を前方へと変える。そしてそれからは歩を一度も止めることなく、薄霧

に包まれる山へと身を投じていくのだった。
山が彼女を吸い込んでいく。

濃霧

遠くから響いて来るのは虫の音。或いは動物の鳴く声。
一号は耳を澄まして山道を歩く。何か奇怪な音があれば、それは絶対に見逃してなるものか、という思いが彼女にはある。慎重に、足元を見たり木々の間の陰りを見たり。
薄霧で視界が狭い中を、彼女は懸命に歩む。歩みを進めれば進める程、自分が何のために山に立ち入ったのかを忘れそうになる。
主人のためだ、と彼女は言い聞かせながらも、どこかが変だ、という感覚からは逃れられないし、そのせいだろうか彼女は、彼女自身は気が付いていなかったがイラついていた。だが一号はひたすら
…変、変、変……
と心で呟き続ける。そうして彼女は主人のためという理由を、何時しか頭の中から完璧に忘れ去って、山の薄霧に潜んでいるのかもしれない何かを探すことだけに全てを傾けていた。ロボットに『ノタウチマワッテ』と言わせたその原因、或いは村の秩序を恐怖で乱した原因、それを薄霧の中から探り当てることを、一号はひたすらに求める。目をそこら中に動かして、耳を傾けて、鼻をひくつかせて。
木と木が所狭しと寄り添い合うことで影が濃くなり、暗闇がそこら中で生まれているから、慎重に瞳を動かさなければ、そこに潜んでいるかもしれない恐怖を見逃してしまうかもしれない。そもそも、恐怖が生物なのか物体なのか、それともどちらでもないのか。そんなことさえもわからないのだ。
考える一号は、そんなに簡単に山道を進んでは駄目だろうか、もっと様々なものを調べながら進んだ方が良いのだろうかとも考える。だが、思案したところで事態が良い方向に進むわけでもない。薄霧だった霧が濃霧へと変わりつつあったことは、むしろ事態が不吉な

方向に進んでいることを一号に教えているようでもあった。

一号は脳内でスイッチを切り替えた。それによって霧が塞いだ視界を、良好なものにする。

一号は濃霧を難なく突き進んでいく。暗闇を探りながら。恐怖を求めながら。

どこまで彼女は歩いたのだろうか。霧の中に佇んでいたせいで陽は遮られている。時間の感覚はあやふやになりやすい。彼女は脳内時計を見ることで時間を探った。そして、かれこれ三時間以上は山を探索していたことに気が付いた。

思わず、歩を止めてしまう。

……気が付かなかった……

感覚的には一時間が経過したくらいだと認識していただけに、その三倍の時間が過ぎていたことは想像していなかった。一号は主人のことを思い出した。そろそろ帰らなければ、彼女はお腹を空かしてしまっているかもしれない。だから、戻らなくては。

一号はきびすを返した。だが。

変変

「ううっ」

洪水のように頭に流れ込んできた、文字の羅列。彼女は眩暈を感じながらうずくまる。

「い、いやだ」

『変』の連鎖から逃れたい、あるいは拒絶したい。しかし『変』は収まることをせず自重せず、彼女の脳内を埋め尽くす。変、変、変。文字が視界にまで入り込んでくる。一号の視界までをも脅かす。彼女が何度目を瞬かせても、『変』という一文字が、存在してくる。そこに在る。

一号は襲い掛かる眩暈を振りほどく努力を行いながら、よたよたと立ち上がり、『変』をジッと眺めた。すると、『変』は彼女の視界で分裂した。あるいは、増殖した。もしくは…

一号は伸びゆく『変』を眺めながら、これはどこまで続いているのだろうと思考した。だが、『変』はどんどん増えて行き、鎖のように、そう、『変』という一文字の鎖が、山中で伸びていく。

彼女の視界の中で、山の濃霧の光景の中で、まるで彼女をどこかに導こうとしているがごとく、どこまでも伸びていく『変』の鎖。文字が実体化して景色に混じり込んでいる。そもそもそんなことは彼女が生きてきた現実の中で一度も無かったが、今目の前で鎖は何処かへと伸び上がっている。

一号は再び主人のことを忘れた。三時間の経過のことも忘れた。彼女は目の前の鎖に心奪われた。いや、彼女は機械だから心はないのかもしれないが、しかし確かに彼女は鎖に心奪われている。

「……」

静かに、一号は鎖を辿っていく。濃霧の中でも『変』という文字は少しも見え辛くはならない。ハッキリと景色の中で『変』として浮かび上がり、その存在を余すところ無く強調している。文字が景色の中でもっとも浮きん出ている。そんな光景を初めて垣間見た一号からすれば、この状況こそが変であることには違いなかったが、彼女は鎖を辿っているのだから、受け入れているのだ。状況を。

歩くに連れ霧はさらに濃さを増していく。一号がロボットで無ければ歩くこともままならない程の濃霧が、三百六十度彼女を取り囲んでいる。先程まで一号の耳に届いていた虫の音も動物の鳴き声も、全てが静まり返っている。そして『変』は姿形を変えた。

『恐』の文字に転じたのだった。今度は『恐』の鎖が一号を導く。

恐、恐、恐、……

次は『怖』になるのだろうか、と一号は想像しながら濃霧を進む。視界の悪い山中で、ハッキリと浮かび上がる『恐』の鎖は、まだまだ果ての無いように続いている。

一号はこの文字に触れても大丈夫なのだろうか、と思考した。目の前の文字は物質なのかそれとも違う何かしらなのか、触ればわかるかもしれないと思いつく。

匂いはあるのだろうか、とも思い鼻を近づけてみる。始めは無臭だと思った。だが顔をしっかり近づけて鼻をひくつかせれば、確かに匂いは、あった。甘いような酸っぱいような。

柑橘系の匂いだと一号は気が付く。

…文字に匂いがある…

一つの『恐』だけではなく連なっている他の『恐』にも鼻を近づけたが、全て甘いような酸っぱいような柑橘系の香りをふりまいている。

一号は不思議に感じるが、しかし文字が鎖となって景色に溶け込んでいる時点で、文字から柑橘系の匂いが漂ってきても、それはおかしくないか、有り得ることかもしれない、とも思考する。

柑橘系の匂いのおかげで警戒が薄れる。彼女の脳味噌に柑橘系は喜ばしい匂いとしてインプットされている。彼女は白い手をゆっくりと伸ばした。文字に向けて。

『恐』に。

触れるために。歩きながら文字に手を近づける。白くて細い指の先端で、ゆっくりと。そして、触れる。その瞬間に、声。

ノタウチマワッテアナタハドウスル？

背後からだった。一号は慌てて声へと振り向く。濃霧に埋もれず、そこに人。

そこには髪の毛が茫々の子供が一人、佇んでいた。いや、正確には子供なのかどうかも、一号にはわからなかった。その小さな人間らしき存在は長すぎる髪の毛のせいで、顔も身体も全てをベールに

包み込んでいる。それは、髪の毛が突っ立っていると言ってもいい様相だった。
「…あなたは？」
一号は尋ねる。だがその子供らしき髪の毛は、
アナタハノタウチマワリタイ？
と意味深な風に問いてくる。一号はどう返せば良いだろうかと思案するが答えは見つからない。
戸惑っている彼女に子供を放り投げる。
ノタウチマワッテクルシミナガラシヌノト、ノタウチマワラズニクルシミヲアジアワズにシヌノトドチラガイイノカナ。アナタハニンゲンジャナイカラ、チョウドイインダ、コレカラサキニ。アナタハウンメイテキナスゴイソンザイダカラ、アナタハコレカラモジヲタドッテタドリツク。ドコニダロウ、ドコニダトオモウアナタハ。コレカラアナタヲツレテイッテアゲテモモチロンカマワナイ。ダケドエラバセテアゲル。ノタウチマワッテシヌ？ソレトモ、ノタウチマワラナイデシニタイ？
言葉は、一号の頭の中に直接入り込む無理矢理なもの。一号はうずくまって、言葉を拒絶しようと思う。だけどそれでも、言葉は一号に無理矢理捻じ込まれる。
…ノタウチマワッテ…
彼女はハッと気が付く。その時には既に、彼女の全身に『恐怖』は巣食って一号の体を宿木にしている。『ああ、手遅れだ』と彼女は理解して、じゃあこのまま私はどうなってしまうんだろうって考えて答えはすぐに出た。いなくなるのだと思った。
子供がズ、ズ、という奇妙な音をたてながら一号に近づき、前髪にあたるベールを中央からグパァと開いた。機械である一号でさえ分かるほどに可愛い顔がそこに現れる。子供は女の子。その女の子は目は笑っていないが微笑んでいる。真っ黒なドレスを着ていて、星のような煌きが模様として散りばめられている。
女の子は髪の毛を伸ばし、一号を包み込む。黒の髪の毛は一号の

全身を覆い隠すと、雑巾を絞るかのようにギュッと中にいる一号ごと髪の毛を絞り上げる。しばらく髪の毛は絞り上げられ、しかしやがてそれも緩められると、髪の毛は縮んで、女の子の全貌を覆い尽くす役目に戻る。

女の子の目の前から、一号は消えていた。手品なのか何なのかはわからない。髪の毛に絞り上げられた彼女はその場から姿を消している。

イカナクテハ。

女の子の小さな呟きが山に響く。そして一号と同じように、彼女も髪の毛に絞り上げられ、その場からいなくなる。ギュッと絞られ緩められる頃には跡形も無くなる。

それに付き添うように山の霧も薄れ、浮かび上がっていた文字の鎖も失せた景色は、自然としての平和を取り戻す。静まり返っていた虫や動物たちの鳴き声も響き始め、濃霧のことや文字、山を歩いていたロボットのことも全て忘却されたかのようになった景色は、穏やかな時間を映す。

イカナクテハは、二度三度残響していた。

目覚め

光を感じて目覚める。

一号は背中にざわざわとした感覚が集まっているのを知って、手の平でそのざわざわした感覚を探る。枯葉だ、と彼女は思いながら目を開けた。初めは薄目…光が差し込まれる…濃霧が消えているのだと知る。天の光が、木々の隙間を縫って彼女や枯葉を温めている。

一号は薄目をもうちょっと開く。彼女は何時の間にか、自分でも気が付かぬ内に仰向けで倒れている。ざわざわとする枯葉の集まりから身を起こし、彼女は辺りを見回した。やはり濃霧は消え去っている。さっきの子供らしき者もいない。

一号を驚かせるのは、枯葉の量だ。どれだけの年月をかければこれ程積もるのだろうと思わせる程、枯葉が地面一帯に積もっている。よくよく景色を見渡せば、木々の幹の中程まで枯葉は積もっているのだった。一号は恐ろしい積み重なりの上で眠っていたのだ。先程まで濃霧の中だったのに。

目の前に大木が聳え立っている。天を突くほどに巨大な大木。それが、彼女の目の前で堂々と立っている。一号はしばらくそれを眺めた。

彼女の知らない大木だった。山のことは知り尽くしているつもりだったのに、その大木の情報を一号は持ち合わせていなかった。

そのうちに大木は太い幹から、一本の枝をミョミョと伸ばし始めた。弱々しく空気に抵抗しながら長く伸びて行く。それが枯葉の上に立ち尽くす一号へ近こうと懸命にもがいている。そしてやがて、戸惑っている彼女の元に、枝は伸び切って彼女の額に先端でくっ付く。ミョ、と音を鳴らしながら。

彼女がどうしたものかと思いつく暇も与えない。一号の頭にミョミョミョというやかましい音が鳴り響きはじめた。頭の中でミョミョミョなどという聞き慣れない音が響くことは、一瞬で彼女を打ち

のめす。彼女はよたよたしながら枯葉に平伏した。枯葉の乾燥に体を擦れさせる。

ミョミョミョという音に加えて違うものも送られる。枝は彼女に、額を通して、送り込んでくる。それは誰かの視界だった。そして聴覚でもあったし、嗅覚でもあった。

やがて一号は枝から送り込まれるそれの正体を情報で知る。ああ、これは記憶じゃないだろうか、と気が付いた。

記憶が彼女に辿らせている。過去。さらに過去。もっと過去。過去が昇り上がって何処までも何処までも過去へと記憶は連なっている。記憶が途切れた時、その人がどういう人間だったのか全て理解することが出来る。記憶が彼女に辿らせるのは一人の記憶。その記憶が彼女に語るのは怒り

。記憶を辿れば辿るほど記憶は怒りを語る。出来事から出来事へと記憶が切り替われば切り替わるほど、記憶は怒りを物語り、一号に伝える。何を伝えたいというのだろうと一号は探っていたが、怒り以外は何も伝わらなかった。記憶は怒りで構成されているのだと彼女はやがて気が付く。感情の『恐怖』を覚えたばかりの一号は記憶から『怒り』を教わっている。だがその体積は『恐怖』のそれとは比べ物にならない。怒りは凄まじい。一号の脳味噌にこびりつくほどに怒りは津波のように襲い掛かって、定着していく。彼女が怒りに変わっていく。怒りが彼女に敷き詰められるるる一号は記憶の洪水から、この記憶が一人の人間であったことをハッキリと思い知らされる。それはつまり、彼女は人間というものを初めて知ったということである。人間に近い存在だった彼女が人間へとより近づく。ほとんどそれを人間と言って良いほどに。一人の人間の記憶を初めから最後まで受け取るということは、その人間に成ったのに近い行為だった。それ程に記憶は彼女を圧迫する。脳味噌を占領していく。怒り、怒り、怒り。

それじゃ駄目ですよ、と一号は小さく呻いた。一度目の呻きは小さかった。ミョミョミョという音のせいで頭痛が激しいから、声が

上手く出せない。だけど彼女はもう一度呻く。それじゃ駄目じゃないですか、と。一度目より二度目は大きくなるように。二度目より三度目は大きくなるように。彼女は何回も繰り返して、怒り怒りを頭から振り払うように、彼女はひたすらに「違います間違ってます」と呻いた。

だけど何時か一号は力尽きて地に伏せる。枯葉の乾燥が彼女を迎え入れて沈める。その沈んだ体を枝は持ち上げた。額にくっ付いているだけなのに、軽々と一号の体を持ち上げてみせる。宙に浮いた彼女は別の伸びてきた枝に殴られた。一度だけではなく何度も。普段主人がするように。

ミョミョミョという音は静まらないから頭痛がする。それだけでもしんどいのに顔面を殴られる。しかも額から宙に引っ張り上げられてるから気分が悪い。

大木は彼女に優しくしない。

一号は涙が浮かび上がるのに気付いた。だが一号は「間違ってます」とそれでも言う。それでも大木は彼女の頬を殴る。

そんな大木の幹に、文字が浮かび上がった。三つの文字が『変』や『恐』と同じように、ハッキリと。今回は大木の幹に。今度の浮かび上がった文字は『理不尽』だった。

ああ、嫌だな、と一号は思う。当たり前のことだったが一号は初めて、そのことに気が付く。

殴られるのは嫌である。騒音を耳元で鳴らされるのは嫌である。枝で宙に浮かばされるのは嫌である。枯葉の乾燥したのは嫌である。嫌だ。嫌いだ。止めて欲しい。

太い幹から口が出てきて、それが白い歯を見せてケタケタと笑い始める。一号はそれに対しても嫌だなと思う。ケタケタと憎たらしい。小馬鹿にしてる。調子乗ってる。ムカつく。殺したい。ミョミョミョとまた鳴ってそうやって思うことさえも邪魔してくる。

彼女は叫びたい衝動に駆られる。しかし喉は上手く声を出してくれない。それに戸惑っている間に、彼女はまた数発殴られる。

内側から湧き出るような沸騰するものが彼女を纏った。それはいわゆる怒りだった。一号はこのとき初めて奥底からの怒りを感じた。何故だか知らないが自分を蔑ろにする相手に対する怒り。それに抵抗することさえ出来ず、喉奥を絞り上げて叫ぶことさえもままならない自分の情けなさに対する怒り。彼女は気が付く。これが怒りなんだ、ということに気が付く。記憶で辿らされた怒りの正体を彼女は実感した。彼女はさっきまでの「間違っている」と言っていた自分を嘆き、恥じる。怒りは当然の気持ちだ、何も知らずに間違っているなんて言うことは間違っていた。

一号は完全に人間に変わりつつあった。一人の人間の記憶を詰め込まれ、理不尽から怒りを思い知らされることで、彼女はその記憶の人間そのものへと変わろうとしていた。というよりは変わらされていると言うべきか。その証拠に大木は、表情が変わった一号に反応するかのように、殴るのを止め、また、幹に浮かび上がっていた口や『理不尽』という文字も消え去り、額にくっ付いてた枝は彼女の体を枯葉にまで降ろしてみせた。ミョミョミョというやかましい音も消える。

枯葉に降ろされた彼女は、ふぅ、と小さな息をついてから目を閉じる。

メザメタキブンハドウ？

子供の声が山のどこかから響く。彼女は目を閉じたまま「いい調子だよ」と答える。

それから少し間を置いて、

ジャア、アナタハダレデスカ。

という声も響いた。彼女はその声に応じて、目を開く。そして、枯葉の乾燥からゆっくりと身を上げ、立ち上がった。そして嬉しそうに満面の微笑みを浮かべながら、答えを述べるのだ。
「…峰寺。私は峰寺だ」

それからしばらく彼女は枯葉の上で立ち尽くしていた。
その間に陽が沈み、夜の帳が山を覆い尽くす。どこかで梟が鳴き、三日月が大木の上を翔ける。
彼女は少し泣いているようでもあった。月光に反射して目が多少光っている。
彼女は枯葉を歩き、ざく、ざく、という小気味良い音をたてながら大木に近づき、幹に触れようと手を伸ばした。白くて細い指の先端で、ゆっくりと。その瞬間に、声。
「お帰り、峰寺。待っていたよ」
背後からだった。峰寺はゆっくりと振り返る。そこには髪の毛で覆われた見知った存在。
「少年になったんだ」と峰寺が言うと、髪の毛からヌッと腕が飛び出て、その腕が天を指した。峰寺は子供の指し示す天を見上げる。そこには月がある。
「夜になったから」
子供は述べてから笑った。そして天に向けていた腕を峰寺へと差し出す。
「さあ。全員ぶっ殺すんだろ？」
子供はそうやって言った。彼女はその手を取って、頷く。
「全員、抹殺だよ」
二つの影は、夜に溶けて消えた。

目覚め（後書き）

これでいいのかわからない。

沈

一号は温もりのある水の中で呼吸している。彼女の鼻や口から零れる泡がどこかへと昇っていく。

深い水の中。海のように。でも海のように青くは無い。むしろ暗い。黒い。息を吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸って。そのたびに体がぐにゃぐにゃになっていくのが彼女には心地よかった。

まずは足からだった。足の指が失われる感覚、自分の体から欠如してしまったとでも言うような錯覚。それが湧き出た。足の爪先だけではなくて、ずんずんと競り上がって、何時の間にか彼女の下半身は全て失われる。体が半分虚無になった。

彼女はまだ上半身が残っている、と思ったが、お腹のヘソ辺りからも、上半身は失われ始めた。虫に喰われるように、穴ぼこになって彼女の体はとめどなく欠けていく。

何時しか彼女に残されたのは、遂に首だけとなった。彼女は海のような黒ずみの世界で、首。首だけで漂っている。ただひたすらに目の前に暗闇だけが続いている大海。彼女は呼吸だけ繰り返す。吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸って、吐いて。泡がどこかへと昇っていく。それもいつかは失われていく。

一号は首だけで何時までも漂い続け、最後に真っ赤な魚に出会う。牙が何本も生えていて、血走っている眼。一号にはその魚が怒りを湛えていることが、手に取るようにわかった。真っ赤な魚は、大きく口を開く。

「私は、救われないのですか」

彼女はゆっくりと呟いた。目を閉じる。

ワルイネ。

彼女は、魚がそう語りかけてきたような気がした。

最期だというのに、一号は思わず笑ってしまう。

「悪いねじゃ、ありませんよ」

首を、魚が飲み込む。

陰人　街

髪の毛に包まれている、人間なのかどうかも危うい影たちが、街中そこらで徘徊しているが、別にそれは異常な現象ではなく、陰人という人種は髪の毛で全身を包むことがむしろ常識である。

「レケ」

その内の一人が女性の声で、隣の陰人に話しかける。隣の陰人は子供。

「なに？」レケと呼ばれた子供は小さい声を出す。

「変なところ、ある？」

レケは首を横に振った。そして「髪の毛がサラサラ過ぎるところが不自然かもしれないけど、バレはしないでしょ」と述べる。隣の女性…というか、峰寺は、それで安心のため息をつく。

「カツラって、嫌だなあ」峰寺は愚痴る。

「仕方ない仕方ない」レケは苦笑する。

実際、レケとしては彼女の歩き方のぎこちなさがバレる要因として有り得るかな、とも思ったのだが。髪の毛に包まれた状態で歩くというのは陰人にしか上手に出来ない手法だ。陰人は生まれた時から髪の毛に包まれているわけだから。

レケは少年。だから今は夜。街は様々なライトが入り乱れ、ギラギラと眩い。この街は陰人の領域の中では賑やかだ。陰人自体が陰気な印象を持っているから、彼らが作る街は逆に賑やかになることが多い。街の賑やかさ。それに対比するかのような陰人の薄暗い見た目。その奇妙さ。

真っ黒な塊ばかりが通り過ぎる夜の街。二人はそんな街の通路をてくてく歩く。通り過ぎる人は全員髪の毛のせいで顔が見えない。

峰寺は慣れない光景に気味の悪さを感じている。通り過ぎる相手が自分にどういう表情を向けているのかさえもわからないというのは、不気味としか言えない。

だが同時に、峰寺としてはこの街はやけに心の落ち着く面もあった。誰もが髪の毛に包まれているおかげで、同じ存在に見える。同じ存在が一つの街で共存しているという状況は、（もちろん同じなのは表面だけではあろうが）ハーフという理由で何か他の人物たちと一致することが難しかった彼女からすれば、穏やかだった。

誰もが髪の毛のおかげで同じになれる。それはハリボテと言ってもいいくらい虚な同一かもしれないが、しかし峰寺の心はそのハリボテの同一のおかげで、多少落ち着いているのだ。

まあ、髪の毛が邪魔でイライラするけれども。

「そこで休憩していこう」

口を開いたレケが指を示す先にあったのは、コーヒーカップの描かれた看板。多少錆びているらしく、看板は風に揺れてギィコギィコと奇妙な音を鳴らしている。良い目で見れば、隠れた名店といった雰囲気のカフェ。多少年季の入ってる感じが、そうみせる。

「うん」

歩くのが気だるかった峰寺はすぐに同意する。ドアを押すとチリンと鐘が鳴って二人を迎え入れる。

二人が入り込んだその先には、薄暗いが洒落た雰囲気もあるカフェ。こげ茶の丸テーブルに木彫りの椅子。カウンターには丸椅子。人の入りは良いようで、幾つかの髪の毛が二人に反応を示しているようでもあった。髪の毛だからよくわからない。

ランプがそこかしこに置かれていて、それがこのカフェの雰囲気を独特なお洒落に包んでいるのかもしれない。丸テーブル一つの中心に、それぞれランプが一つ。面白いのはランプの灯りがそれぞれ色が違うこと。赤、黄、燈、翡翠、瑠璃、紫。峰寺にとって一番独特かつ奇妙だったのは、それに薄らぼんやりと照らされるいくつもの髪の毛たちの不気味さではあったが、しかし彼女自身だって髪の毛で包まれているのだ。

カウンター側にいる店のマスターらしき髪の毛が、内側から腕をニョッと出し、『どうぞ』と言った様相で一つのテーブルへと手を

出している。峰寺はそのテーブルに目をみやる。ランプは藍色だ。
テーブルに座って向かい合う二人。峰寺はふぅと一息をつく。間髪を入れず飲み物が運ばれてくるので驚いたが、驚いた表情も髪の毛のおかげで伝わらない。向こうがどういう顔をしながら飲み物を運んでいるのかもわからない。峰寺は改めてゾッとする不気味さを感じながら、ストローを使って飲み物を飲もうと試みる。藍色のランプのおかげで飲み物も藍色。
「悪くないね」
などと言いながらチューチュー飲み物を啜っているレケを眺めながら、峰寺も味を吟味する。
まあまあな味かな、というのが感想だった。藍色に見えるけど苺に近い味だ、ということにも気が付く。「どう？」レケが聞いてくる。「うん、それなり」と適当なことを答える。
峰寺は一旦飲み物から口を離すと、目の前のランプに見入った。藍色が妙に幻想的というかなんというか、って感じでいいなあ、って峰寺は少し心地良く感じる。それに対してレケは藍色に対してやけに気に食わない思いを感じている。むしゃくしゃさせられるような気分だった。
そんな風に間逆の気持ちになりながらも、二人はしばし藍色のランプに見入る。そのまましばらく、カフェの喧騒の中で身を包んだ。そして二人は次第に周囲へと耳を澄ますようになる。
耳を澄ませば聞こえてくる噂。それらはどれも同じ事件についての噂。
ひそ、ひそ、ひそ。ではなく、がや、がや、がや。
噂がカフェの中で喧騒になっている。二人はその喧騒の中心で、藍色の苺味をストローで啜る。啜り続けながら、耳を澄ます。
――一夜でだっていう話だぜ。――一人残らず？――詳しいことはまだ判明してないらしいが――ここがあそこからだと一番近いんでしょ？――でもここには兵もいる――そこにもロボットがいたっ

て言うじゃない――人間が作ったろくでもない趣味だよ――警戒は強まってるんだろ？現に――いやそんなに変わらないようでも――それよか酒。どうでも…――酒――兵の数増えてるよ明らかに――適当なことといってんじゃねえよ――ほんとだって――あー――酒が、――一夜か――爬竜人だろ――でも陰王が出向いたんだからなぁ――爬竜人に――そうだよ遠征――戦争してんの？――知らなかったの？――酒――あー――テレビとかでもやってる――話がそれてるよ――そうそう、隣近所の村の話――とにかく誰かがやっちまったってことだろ――怖い――怖い――あー――酒が…――怖――ねー戦争って――テレビみりゃわかるよ――うー――あー――酒――怖――

レケが宙に文字を描く。内輪にだけしか見えない緑に輝く文字。

『広まるのはやいね』

峰寺はチューチューするのを止め、頷く。彼女も文字を書く。緑に輝いて見えやすい。だけど内輪にだけしか見えない。

『怯えてるね』

峰寺は楽しい。自分たちの行った行為が別の街に伝播して噂に変わっている。しかもみんな怯えている、怖がってる。ロボットの村を軽く一捻りしただけなのに。峰寺は嬉しい。再びチューチューするのを始めた。嬉しさのあまり。レケもそれに続いてチューチューし始める。二人で喜ぶ。内輪の文字をたくさん書いて喜びを分かち合ったりもしながら。

峰寺は手の平を何度か開いたり閉じたりした。ぐーを作ってぱーを作って。そうすると体の感覚がもう完全に自分の物になったことがわかる。前にいた機械の存在は自分から既に、完全に消し去られている。自分は峰寺。そしてこの体は峰寺のもの。『六』という男を破裂させた時点で、この体は完全に自分のものに変わったのだ。元の持ち主の遺恨となりうる存在を完全に滅したから、彼女はもう

きっと無くなった。完全に、たいらげた。だから、手の平をぐー、ぱー、しても違和感は何一つ感じない。この体が自分のものになった証だ。

『やっぱり村を壊して正解だった』

彼女は書く。レケは頷く。

『そりゃよかった』

二人ともそれなりに満足して、苺味を啜る。噂のざわめきの渦中で啜り続ける。

しばらく落ち着いていると、チリンと鐘が鳴る。そして外からカフェの中に髪の毛が入ってきた。一人。そいつは体が他より二回りくらいはでかかったから、みんな注目する。かなり太ってるのに全身やはり髪の毛で覆われている。真っ黒な、ドラゴンの卵みたいな風貌だ、と峰寺は思う。いや、ドラゴンの卵なんて見たことないけれども、とも思う。

ズドンズドン、どこに座るんだろ、ってみんな髪の毛越しでも分かるほどに注目してる。その証拠に噂による喧騒が縮こまってる。妙な静寂がカフェに漂うようになる。グラスの音とか、聞こえるようになってる。

さすがに近くに座られるのはみんな遠慮したい感じだった。あんなでかいのに近くで飲まれたらおちおち話に集中できないのだろう。体積が半端ないのが怖くて。

カウンター側のマスターなんかも唖然としている。しかし手を差し出すのは忘れてない。マスターが指し示している方角はちょうど店の端っこのテーブル。陰人たちは安心した風ではあった。端っこなら威圧感も減る。

しかし、でっかい髪の毛は誘導に従わない。どういう魂胆だというのだろうか、ズドンズドンと（実際にはそんな足音はしていなかったが、雰囲気なそんな感じ）彼はあらぬ方向へと突き進む。何処へ向かっているのかとカフェ中の視線が彼の行く先に集まる。

その行く先にあったのは、藍色のランプ。藍色のランプには二人。

つまり、ドスンドスン髪の毛は、峰寺とレケを目指していたのである。二人の体は仰け反っている。逃げ場はないけど。
カフェ中が密かに注目する。髪の毛はこういう時に便利だ、って全員が思っているに違いない。
ズドンズドンが停止する。峰寺とレケの目の前で停止。でっかい髪の毛が藍色に照らされる。
「あなたたちね」
喋りかける。でっかい髪の毛は女口調だった。男、女、？　二人は疑問に思って、髪の毛の内側で峰寺は眉を潜めて、レケは口を引きつらせている。こういう時に髪の毛って便利、とか峰寺はふと思った。
「あなたたちよね？」
二人が反応しないせいだろうか、憤りが混じっている。レケが気が付き、慌てて反応する。
こんな目立つのが使者か、とレケは苦笑したくなるがそれどころではないから合言葉。
「オムレツ、楽しみにしてたんですっ！」
でっかい髪の毛は大きな笑い声をたてて、前髪をグパーと開いた。目がでかくて鼻がでかくて口もでかい。全部でかい顔がそこに現れる。そしてやはり女声で、こう述べるのだった。
「とってもすごいの、食べさせてあげるわよ」

『戦う人間には見えないよね』レケが歩きながら文字を書く。
『人は見かけによらない？』峰寺が答える。
『まあ肉弾戦の強さは伊達じゃなさそうだけど』
『プレスされたら一撃だねきっと（笑）』
『（笑）』
二人が内輪だけに見える文字でぐにゃぐにゃやっていると、気配

を感じたのだろうか、巨大な髪の毛が二人に振り向く気配を見せた。髪の毛をよじっている。
歩みを止め、静かに呟いてくる。
「あんたら、笑った？」
彼、いや、彼女？　は、顔が見えないにも関わらず威圧が半端な代物ではなかった。二人は思わず息を呑み、本当にプレスされたら絶対に圧迫死してしまうということで、内輪で文字を書くことさえも控えることになった。
『なんか恐ろしい』
『威圧が』
それだけ言って、二人は使者である巨大な髪の毛について従って街を歩く。静かにてくてくと。
もうカフェからは金も払って抜け出ている。街には相変わらず髪の毛ばかり。
区別の手法は髪の毛の色の違いか、もしくは横幅。みんな陰人。黙々と街を闊歩している。
陰人以外から見れば常軌を逸しているこの街を、三人は歩く。人気の少ないほうへとどんどん。歩けば歩くほど、人通りの少ないところへ導かれていく。レケは、目の前の巨体に多少不安を覚えてくる。
慎重に内輪で文字を書く。
『敵だとしたら倒せる？　峰寺』
『うーん』
峰寺はあまり悩まない。
『殺せる』逞しく答える。それを聞いて、レケは髪の毛の内側で安心する。
それからしばらく地面を踏みしめ続け、二人とも多少の疲れを感じてくる頃。もはや人通りはかなり少ない。というか三人以外には誰もいない状態にまで陥った。
だが、目の前の巨体が二人の目前で立ち止まり振り返り、髪の毛

をぶちっと勢いよく抜き取り地面にパラパラと降らせた時。地面に何か靴の形をした模様が浮かび上がったので、二人はなんで人通りが居ないところまで歩いたのか理解した。
靴の模様が浮かび上がり、実体に転じる。三人の前に靴。三人分。ちゃんと小、中、大、とサイズが違う。
巨体は無言のまま、大、のサイズを履く。
彼の全身が途端に光り輝き、浮かび上がる。二人が瞬きをする間もない。巨体は光り輝いたまま凝縮されて塵のごとく縮こまり空間から消えた。
峰寺とレケは髪の毛を見合わせ、お互い同時に頷く。
まずはレケが小のサイズを履く。やはり光に包まれ、凝縮されて塵となって消える。
次に峰寺が履いて、中の靴から彼女まで一斉に輝き、三つ目の塵が、圧縮されてどこかへと飛ばされた。
三人はワープしたというわけだ。

陰人　街（後書き）

更新。

石床

圧縮された塵が膨張するにつれて、黒々とした色であることがわかる。さらに膨張されれば、その黒が髪の毛であることがわかる。さらに膨張されれば、髪の毛の大きさが小、中、大のサイズに分けれるくらい大きさが違うことがはっきりしてくる。その三つのサイズが、地に着地する。

地、というか石？石床。そこは屋内である。全体が石で作られている、妙に圧迫感のある屋内。

石自体が光っている。それが照明となっている。床も壁も天井もその光る石なのだから、その屋内は全体的に見て明るい。そんな屋内。一方通行。通路。狭い。だから圧迫感がある。

「ここをちょいと歩く必要があるわ」

大がそう語る。中と小がその後ろについて歩く。通路を、音を鳴らしながら。

石の通路に歩行から生まれる定期的なリズムが響いてどこかへと流れていく。かつかつというリズムが足の繰り返し進む動作によって生み出されていて、通路の奥側へと。奥は光に溢れている。なにかがあるせいで光っているのか、それとも単に石の輝きが密だからなのか、それはわからない。通路はなかなかに長く、大と中と小はそれなりに長い時間、歩いてリズムを奏でた。奥の光へと突き進む三つの黒は、巣を突き進む蟻のようでもあり。

やがて蟻たちは行き止まりへとたどり着く。結局石の輝きが密になっていただけで、奥の光なんてものは幻で、行き止まりがあるだけだった。通路が途絶えているだけだった。目の前には壁。

『やっぱり罠？』レケが書く。

『この狭い通路でダイナミックボディには勝てないかもね』峰寺が書く。
『そんなー』レケが書く。
「あんたたち、またなんかやってるわね」大が振り向く。前髪をグパーと開いて顔を見せ付けてくるので、威圧感が半端ない。長々通路を歩いてそんな威圧感を見せ付けられるなんて二人はとても気の毒だった。
「ここにね、窪みがあるの」
言いながら、大が狭い通路の中で無理をして端によると、でっかい大のせいで見えなかった行き止まりの壁が二人の視界からでもよく見えるようになる。二人が大の指し示す方向へと目を向ける。そこは壁のすぐ下の石床。たしかに、そこにはベコッと結構へこんでいる窪みがあった。
「見てなさい」
大がグパーと開いている顔面でドヤ顔をした。そして、次の瞬間である。彼は窪みへと溜めを作り。
跳躍。跳んだ。
「あ」
「あ」
呆けたような二人の声の後。
石の通路全てが振動するような激しい衝撃。揺れ。
なんと、大が窪みに向けてボディプレスのような行為をぶちかましたのである。
もちろん窪みは損壊し穴ぼこへと変化した。ボディプレスによって。大はもう姿が見えなくなっている。ボディプレスの格好のまま穴を急転直下していったので消えうせたのだ。
髪の毛の内側で、二人は茫然と、さすがに口を開けっ放しになった。あんぐり。
その時、峰寺の口にカツラの髪の毛が入ってきたのがうざったらしくて、『あ、もう脱いで平気かこれ』と峰寺は気が付いたのでカ

ツラは取った。フワリと、元は一号のものであったくせが少しある銀髪が、石の光を反射させて通路できらめく。ちょうど肩にあたる程度の長さの髪型になった。

峰寺がスッキリ、といった様子で息を付くのを眺めた後、レケは穴へと指をさした。

どうすんの、これ、といったジェスチャーをするレケ。あえて口には出さない。

「もちろん」

レケを見やった峰寺は嬉しそうに微笑んでみせる。

「てや」蒲色のポンチョをはためかしながら、彼女は跳んだ。レケの髪の毛をつかみながら。

「ちょ、」反抗する間も無い。レケはその長い髪の毛を引っ張られたまま、引きずり込まれるように穴へと頭から吸い込まれる。

……ははははははははは……

峰寺の喜びの声か、あるいはレケの悲鳴か。やがてその声もその石の通路からはなくなり、恐ろしい長さのカツラだけがそこに残され。

それから二人はしばらくの間落下を楽しみ、そしてやがて到着する。ふわふわのマットの上に、二人は尻からフワっと着地したのである。ボワっと羽毛らしき繊維が舞う。

「……」

「……」

「……」

「……」

「きたわね」

針でちくりと刺されるような沈黙がその部屋には溢れている。

人数はそれなり。全員やつれている。年を取っている者が多く、いやむしろ白髪交じりばかり。大の彼がもしかすると一番若いかもしれない、というくらいの高年齢の割合。それが全員やつれた様子で、それぞれの位置でくつろいでいるのだった。彼らは髪の毛に包

まれてはいないから、陰人では無い。
老人たちは何も喋りかけてはこない。無言のままに二人を見ている。
峰寺は大の彼に顔を向けて尋ねる。
「…生きてる？」
彼女は老人たちに指をさす。大は髪の毛をグパーと開いた後、なにゆえか満面の笑みを作ったまま、
「カス残りよ」
と答える。それを聞いた峰寺は「やっぱりそうか」とうなだれた。うなだれながらふわふわのマットから何度も足を取られつつも降り、一番近くにいた老人へと拳を放ったのだが、しかし峰寺の鋭い拳はすり抜けるのだった。そうなることは予測済みだった峰寺は、しかし眉を潜めた。
峰寺は、本当に時が過ぎてしまったんだなと思う。その後に、そりゃそうか、とも思う。峰寺は拳をさげると空いている椅子へと腰を下ろして、全身の力を抜くかのようにうなだれる姿勢になってプランプランするのを始めた。
その姿勢のまま、峰寺はしばらく動かない。老人たちは無言のまま峰寺を見つめ、大の彼とレケも彼女を無言で見つめていた。大は座れる椅子がないのか、床に腰を下ろす。腐ったような朽ちだらけの床。レケは椅子に座って無言の老人に挟まれる格好になる。
天井は蜘蛛の巣だらけで、ランプも微かな明かり。
壁には落書き。

『いろんな落書き』

だがその落書きたちの色彩も薄れているものばかり。書かれてから幾ばくもの時を流れてきたことは一目瞭然だった。その落書きたちは時の経過を現実的に峰寺に伝える。
峰寺は自分が随分と長いこと眠っていたことを、落書きの色あせ

から実感させられる。

石床（後書き）

後々また何文字か追加するとは思います。でもとりあえずここまであげます。

追加。

石床　2

「残っているのは思念だけ、か」
峰寺が何か悔やんだような言い方をしながら、落ち込んでいる姿勢になる。老人に挟まれているレケは、そんな風にうなだれている彼女を見ながら、あまりいい思を感じはしなかったが、しかし何も言わず黙っていた。
「楽しかった時代はいつかは終わるんだ。霧散して無くなっちゃう。それが世界なんだ」
峰寺はぶつぶつと、そんなことばかり言っている。周りにわざと聞かせるようなボリュームで繰り返し述べるその言葉は、峰寺が二人に同意を求めているようでもあった。
「皆はさ、私のことを恨んでたりしなかったかな。嫌ってたり、しなかったかな。やっぱり私は本当の気持ちでさ、相手に接してこなかったんじゃないかって、今にして思うんだ。申し訳なかったって…」
大の彼は床であぐらを掻き、ぼりぼりと脛をかいたりしている。レケは椅子に座ったまま、
「まあ、そうでもなかったんじゃない」
適当な相づちを打ってから、しかしそれだけ言って他には何も言わない。
峰寺は続ける。
「そうでもあったって思い始めた時に目の前のことに集中できなくなって全員抹殺してやろうと思ってたのに、みんなが戦ってるってのにどこか輝いてて、それを見てたら馬鹿馬鹿しくなってきちゃってどうしようもなくなったから失敗したんだ。私は、だから樹になんかなっちゃって、こんな風になっちゃって、みんなもういなくなっちゃって……」
取りとめの無い言葉の羅列。峰寺が俯いたまま繰り返す言葉は全

て上滑りをしているかのような、駄々漏れの息吹だった。つまり、駄々漏れる悲観。聞く者の神経でさえも悲観させるような。
「やっぱりどこかから間違えてたのかな、無理していたのかなそれとも余裕をかましてたのかな、それさえもわからなくなってきてるような……みんなを巻き込んだだけだった…？　上っ面だけの抹殺宣言だった……だから、樹になっただけで、まだ世界は何も変わってない…みんなが死んで……」
「カス残りはたしかにここにあるわ」
大の彼が口を挟んだ。彼は重たい体の割には素早く立ち上がり、老人たちへと指を示す。
「彼らには心残りがあった。だからこうして思念体となってあなたを待っていた。そしてあなたへと伝えたいことを伝えるために虚ろな姿でここに居座っていた。彼らはたしかにもう死んでいる。だけど、あなたは見れるでしょう？　思念体となった老人たちのことを」
大の彼はそのまま老人たちへと近づき、手の平をスカスカと思念体に通過させる。
「触れることが出来ないのは、悲しいけれどね」
そう述べながら、彼は落書きの書かれている壁へと歩を進め、指で文字を書いた。
『我、亡くなった者たちの意志を継ぎ、敵を滅す』
そこまで書くと、そして彼は落書きの壁の前で、どすんと尻を床に置くとそのまま無言で何も語らなくなった。峰寺とレケも何か語るわけでもなく、突然書かれた新たな落書きをただ見つめるばかりとなった。
先ほどまで峰寺を見ていた老人たちの思念体は、俯いて床を眺めるように変わっている。とにかく彼らは無表情で、何かを訴えたいだとかそういった様子ではない。峰寺やレケには、思念体が何を考えているのかはわからなかった。だから、ひたすら過去の落書きと今さっき書かれた落書きを交互に見ていた。峰寺は何か答えを探していて、レケはそんな峰寺を心配してもいる。

それからしばらく三人は思念体と共に、この地下室で時を過ごすこととなった。その地下室は元々広い建造物であるから三人が生活するのに問題はまるでなかった。食べ物に困れば陰人の街におもむき好き勝手買いたいものを気が向いた時は買い、また時々には盗んだりもした。

ハッキリ言って全員抹殺とのたまわった人物の行動とは思われないくらいの、適当な毎日だった。だが悪意のある行動をまったく行わなかったわけではなく、時折峰寺は元々持っている力で陰人を殺したりするのだった。ほとんど発作的、通り魔的と言っていい行為であるからして、何の脈絡も無い殺意をぶつけているわけである。大の彼も、レケも、口には出さなかったが失望をする思いがあった。だが、レケが昼に女に変わった時には、その女のレケはその殺意を喜んでいた。昼のレケは基本的に一言も喋らず何を考えているのかわからない存在だが、彼女はいつも峰寺の特にネガティブな面を見ることに喜びを感じていた。そういう性格の悪いところを持っているのが昼のレケだった。その割に無口で意見を出すことが少ないのだからまったくもって気味が悪いのだが、峰寺自身はレケとの付き合いが長いので、昼は彼女と会話をすることは元々諦めている。だから基本的に峰寺とレケが会話をするのは日が落ちた時のみ。例外は何かを殺した時。

「殺したね」昼のレケ。

「うん」峰寺。

二人の交流はこの時に限定されているのだった。

峰寺にとっては昼のレケも夜のレケも必要な存在ではあった。彼女の心を落ち着かせてくれるという意味では。夜のレケは前向きな陰人だが、その前向きさは時折峰寺にとっては負担である部分もたしかにあった。その負担を軽くする役割を昼のレケが担っているところがあり、昼のレケの薄気味悪さというか後ろ向きな雰囲気は、峰寺がネガティブに浸ることを容易にしてくれる。だから、峰寺が

殺人をした時には昼のレケが側にいてくれると、殺意を同意してくれる雰囲気のおかげで、峰寺は心を落ち着かせることができたのである。

だから峰寺がこの通り魔的殺意を振りまく時には、大概昼にそれは行われる。

夜の、少年のレケは、『殺意』に対して否定的であるから、峰寺は夜には通り魔的殺意を振りまくことをしない。少年のレケはそういった八つ当たり的な行為に嫌悪感を持っているのだった。

つまり少年のレケは良心的な人物ではあった。少女のレケとは逆の性質である。

では、何故そのような人物が全員抹殺などという峰寺の活動に常々協力しているのかと言えば、まずそれは峰寺の手助けをすることがレケは使命だと思っているからである。自らは側近という役割だから、峰寺の協力をすることは、つまり彼にとっては仕事であった。全員抹殺などという行動が多少自らの性質に反する行為だとしても、側近という役割を自らが担っている以上それに協力しないなどということは、彼の良心的な性質上それは不可能なのであった。

さらに、良心的な性格のレケであるが故に、全員抹殺という行為を真っ向から反対する気にはなれなかった。むしろ時折、峰寺の『全員抹殺』を正しいのではないかと思うこともあった。

というのは、レケは陰人や爬竜人や人間の全ては、痛い目を一度見た方が良いのではないかと感じているからである。

戦争に次ぐ戦争。見た目は子供であるがレケという存在は今まで随分と長いこと生き続けてきた。それが故に彼は爬竜人や陰人や人間の勝手な部分というか、暴力的であったりとにかく争いを止めないことであったり、互いが互いを理解し合おうとないことであったり、ということに対して呆れている感情を持っているのだった。

つまりレケは世界に対してムカついていたのである。だがムカついているだけで彼自身は殺意などは抱いておらず、むしろ不良に対して良い方向に進んでもらいたいと願う先生であるがごとく『痛い

目を見て成長して欲しい』と言った実に良心的性質な考え方が大元なのである。だから峰寺のむちゃくちゃな殺意に対して少年レケは否定的ではある。

だが峰寺は大元では結局、「全員死ね。ていうか殺す」と思っている人物だから少年レケの良心的な考え方などは、うっとおしいことが大概であった。そのうっとうしさと一日中対峙していたら二人はどこかで仲違いをしていたかもしれなかったが、その間柄の煩わしさを吸い取ってくれる役割を果たしているのが、昼の、少女レケの役割と言っていいだろう。少女レケはどちらかと言えば峰寺寄りの考え方で「全員死ね」に共感してくれているわけだから。

そういう風に共感をしてもらえる昼があるからこそ、夜の少年レケの『良心』を受け入れる余裕が峰寺にも生まれることが多々あった。

その良心を受け入れると何が起こるかと言えば、峰寺はそれによって気持ちが『ブレる』ことがよくあった。全員抹殺という意志が揺らぎ、もっと緩やかでも良いのだろうかと感じてしまう時があったのである。そのブレをおさめようとして発作的に殺人などを行ってしまうのだった。殺された側からすれば迷惑なんてものではなく、冗談ごとではない。だが峰寺はその殺人によって自らのブレをおさめようとするのは、止めず、彼女は亡骸を見て卑屈に笑う。

鉄パイプで脳天

陰人の街の活気は日に日に薄れていた。相次ぐ通り魔殺人と戦争の噂で暗くなり、街を離れていく陰人たちが多くなっているせいである。通り魔殺人はもちろん峰寺が行っているものであり、戦争は爬竜人と陰人の争い。陰人の一般人たちは戦争に巻き込まれないようにと、逃げ出すものが多く見られるようになった。

電灯ばかりが派手な街並だけが後に残り、人の通りばかりが減っていく。

昼に、峰寺はレケと共に、血走った眼を絶やさず、ゆらゆらとカツラを揺らしながら、一人で歩いている陰人を探していた。街にまだ残っている陰人の多くは通り魔に殺されることを警戒してそのほとんどが単独行動を控えているので、彼女は都合の良い標的を見つけ出すことはまるで出来なかったが、しかし血走った眼を押さえ込むためには彼女は歩くのをやめるわけにもいかなかった。

曇り空が、街並を灰色に変えていて鬱蒼。陰人たちの影は幽玄な雰囲気を醸し出している。

峰寺とレケは街を放浪する。会話を交わすこともなく、ただひたすらゆらゆらと、鬱蒼としている街を歩く。

鉄パイプが落ちていた。周辺を見回すと、一つや二つではなくたくさん落っこちていることがわかった。周辺には背の高いビルディング。そこの通りに転がる数多くの鉄パイプ。なぜこんなところに鉄パイプが転がっているのか峰寺にはわからなかったが、レケにもわからなかった。

峰寺は特に長い鉄パイプを片手で持ち上げて、それを持ったままビルディングを見上げた。灰色の天気に、灰色のビルの窓。窓の暗がりに、影が一瞬見えた。

「誰かいるんだ」

峰寺は呟き、髪の毛の中で微笑む。レケを一瞥してから、彼女は

鉄パイプを持ったまま、ビルの扉を押して、中に踏み入った。
「大丈夫だよね」
独り言のようにぶつぶつ言いながら建物に入り込む峰寺。ビルの内部は暗く、蛍光灯などの割れた破片が地面に、無数、散らばっている。鉄パイプもいくつか転がっていた。
それらを跨ぎながら、内部の奥の方で静まっている階段の方へと向かう。階段の一段一段に、数字が、あった。書かれていた。
「血だ」
赤黒くなっているから随分と以前に書かれた血痕であることはすぐに理解できた。峰寺とレケは顔だけ見合わせて、しかし階段を一段一段昇る。５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４、１、５、６、４。
「１５６４」
峰寺は呟いた後に苦笑した。なんて安直な組み合わせだ、と思いながら自分が影に導かれているような感覚あるいは錯覚を生じさせた。階段を登れば登るほど、文字は大きくなっていて、血の色は真新しく変わっているような気持ちがする。
「うーん」
階段を登りきると広い空間に出た。広いだけで、鉄パイプも転がっていなければ、蛍光灯が砕け散ったものだって無い。ただ広い、だけど何も無い。そういう広い所に出た。建物を支えているのであろう柱は何本か、等間隔に、天井と床を繋ぐ役割を果たしている。
「人はいるでしょうか」
峰寺が声を上げるが、空間は静まり返っていて、先程窓を通りすがった影も見当たらない。…いや、しかし暗がりの中で目を凝らせば、峰寺は目撃することが出来た。
「……」
峰寺は屋内を数歩、目撃したものの方角に向けて。一歩一歩を慎

重に鳴らし…。
「あなたを殺そうと思います」
一人の、体育座りをしてうずくまっている、それは幼い陰人だった。身長などは座っているから正確にはわからないが、レケと同じくらいの身長という目星をつけることは可能だった。
峰寺は鉄パイプを振り上げて、振り下ろせば、体育座りの陰人、その脳天を貫く気配。
体育座りの陰人は動揺する様子も見せず、自らの黒のベールを震わせることもしない。
「震えることもしなければ逃げ出すこともせず沈黙を堅く守ってるなんて、格好いいよ」
白い歯を見せながら、峰寺は躊躇なく鉄パイプを脳天めがけて、振り下ろした。
一撃でそれは貫かれる。
その未成熟の陰人が頭からつま先まで突き抜けた鉄パイプを、峰寺は釣竿を担ぐかのように持ち上げ、そして屋内の中央にまで持ち運んでから、床に墓標のように刺し込んだ。
峰寺は、白々しく両手をあわせて墓標を拝むような仕草をして、用が済んだということなのだろうか、きびすを返しその場から立ち去ろうとした。
しかし峰寺の髪の毛を、ただ沈黙していただけのレケが、珍しく、意志を表すかのようにして掴んだ。峰寺はそのことに驚きながら、しかし髪の毛を掴まれたままでは歩くことは出来ないので、レケに振り返る。すると、彼女が墓標に向かって指を突き出していることがわかる。
何かをしきりに促すように、空いている指でクイクイと、墓標の方を示しているのだった。
「あんまり見たくないんだけどな。グロいから」
自らの手で墓標を作り出したとは思えない口ぶりの峰寺。しかしそう言いながらも彼女はレケの示す墓標へと、目を向ける。

陰人の串刺し。まさしくそう形容できるその墓標からは、作られたばかりの新鮮であるが故に血液が淀みなく溢れ出ていて、脳天から股間の辺りにまで一本の鉄パイプが突き抜けている様は人が人に行う行為だとは到底思えない代物だと、それを作った峰寺自身がひどく納得できた。

「どうしてこんなことを」

罪を犯した人を哀れむような、そんな憐憫を表現する彼女は、自らが罪人だという認識を明らかに欠けさせている。そんな彼女は、レケが指をさしている部分を覗こうと、死んでいる陰人の髪の毛に、手を掛けた。だらんと垂れ下がっている前髪を、左右に開く。死体の顔を、初めて確認したのだ。少し、心臓の鼓動をはやめながら。だけど峰寺は顔を、躊躇することは無く開いた。

その瞬間に景色が変わる。

「……」

墓標から、数歩、後ずさりをする。しかし離れているはずなのに、墓標が迫ってきているのだろうか、目の前の景色は、峰寺の視界をみるみる覆い尽くしていく。

顔には、赤で、血のような赤で、１５６４と幾つも刻まれていた。彫られたような１５６４という文字が、その顔のそこら中に刺青のように掘り込まれている。

舌も、ベロンと口から飛び出ていて、その舌にも１５６４という文字は刻まれていた。ダラダラと舌からも血が流れていて、その中でも刻まれた文字は浮かび上がるように目立っている。

峰寺は脅えから後ずさりをする内に、背後の壁にぶつかって、それ以上は逃げることが出来なくなる。後ずさりが出来なくなった彼女は、その代わりということか、顔を左右に振り回すようなことをする。振るたびに彼女は思い出していた。顔が、そこにあった顔が、彼女の記憶を呼び起こしていた。刻み込まれていたが年月と共に奥に埋め込んでいた思い出を、彼女は墓標によって引っ張りだされていた。

明らかになった顔は、男の顔だった。その顔は、懐かしい野蛮なひげ面、ヴァルヴァルッサのものだった。１５６４という彫りこみを顔中に為されているせいで尋常ならざる様相だが、しかし、間違いなくそれは峰寺の憎む者の顔だった。

峰寺は予想しない事態のせいだろう、壁にもたれかかったまま、ずるずると崩れ落ち、うずくまって、果てまで衰弱した人のように頭を抱え込んでしまった。

彼女はしばらく沈黙していたが、やがてえづくようになり、一度確認した野蛮な顔を、墓標から浮かび上がったその顔を、もう一度眺め見ようとはしなかった。ひたすらに、えづくようになった。

レケは幽霊に脅える子供のような彼女を髪の毛の内側で観察している。レケはそのネガティブな峰寺のうずくまっている姿を見ることを楽しんでいた。可哀想などという健常な感情をわきあがらせるようなことは決して無く、昼のレケはこの場自体の瞬間瞬間を楽しんでいた。

１５６４の血文字が屋内全体の、天井、柱、床、至る所に浮かび上がる。景色は灰色から転じて、見渡す限り１、５、６、４の血の刺青に塗れるという有様に変わる。レケはそれさえも楽しく観覧する心持ということなのか、動揺の素振りはまるで作らず、平然とその場で立っている。

それに対するかのように動揺を極めているのが峰寺で、全身を逆毛立てた猫のように彼女は震え上がっていた。彼女はえづくのみならず、頭を抱え込んだまま小刻みに痙攣していて、それは彼女自身ではコントロールの出来ない震えらしかった。

「…錯覚だ…錯覚…」

頭に響かせるように自分に言い聞かせて、彼女は幻想を目の前から失せさせてしまいたいと願い、幻想と理解しながらも墓標にヴァルヴァルッサの顔を見てしまうことを、呪いたくなる。だけど彼女はダメだった。顔を前へと傾けるには確信が足らず、停滞していなければ、今すぐにでも憎しみを暴発させてしまうことをわかってい

た。
彼女はまた己がブレているのだと気がつく。
「男…あいつ…女…あ、…どうすれば…」
彼女は泣いてしまった。感情の昂ぶりを抑えきれずに、うずくまらせて真っ暗な視界の中で、彼女は前を見ることは出来ずに、床に涙をこぼしている。
近くにレケがいることがわかる。助けを差し伸べてはくれない、昼のレケが、近くにいることが空気越しに伝わってくる。峰寺は、昼のレケが今のみじめな自分を見てどういう気持ちでいるのか想像してみた。
すると、声が聞こえた。
「おもしろい」
幻聴のような気がした。だけど本当の声のような気もした。峰寺は自分の耳が正確に音を聞き取れているのか自信を持てなかった。それがさらに彼女をイライラさせた。このとき、峰寺は自分の感情が片一方に傾き始めたことを知り、同時に、その方向がとても心地良い方向だということも知らされた。
真っ黒な視界に血流が過ぎり始めた。彼女はこのまま真っ赤になれば前を見れることも知っていたから、そのまま血流に視界を塗りこんでしまいたいと願って、心地良い血流に身を任せようと思った。レケがこちらを嘲笑っていると、彼女は想像した。みんなが嘲笑っていると彼女は想像した。思念体になったかつて一緒に居た人々たちが、自分を嫌っていたと想像した。かつて炎で燃やした人間や陰人や爬竜人が殺された恨みをこちらにこびり付かせていると想像した。人はみんな一人だと想像した。身体を乗っ取られたロボットが呪っていると想像した。パズィーのことを想像した。これからのことを想像した。時が過ぎたことを想像した。夜のレケや大の彼が呆れていることを想像した。世界が自分を必要としていないと想像した。全てが自分に対して怒っていると想像した。全部が全部こちらを殺したがっていると想像した。

彼女は想像した。想像を繰り返して心地良い方向に行ってしまいたいと願った。
心地良い方向にたしかに向かっていることを、彼女自身が一番良くわかっていた。自分のことだから彼女はよく理解できている。
「おもしろい」
レケの声が聞こえた。峰寺は、
「おもしろくない」
と答えた。そしてうずくまったまま、しかし顔を前へ向けた。
「錯覚じゃない」
と彼女は言って、墓標へと足を進めて髪の毛をもう一度左右に開いた。
現れた顔を、彼女は拳で殴りつけた。
「錯覚じゃない」
ドガっ
「錯覚じゃない」
ドガっ
「錯覚じゃない」
ドガっ
「錯覚じゃない」
こうして彼女は、１５６４と彫刻されている顔を現実に受け入れて、拳で殴りつけた。
レケは背後からそれを見ていた。
数発殴ってから、彼女はビルを後にした。

鉄パイプで脳天（後書き）

更新終わり

灰燼に帰す

陰人が二人。それは腰の折れている老人らしき陰人と、その孫らしき幼い陰人だった。

その老人と孫の歩いている方向から、二人の陰人が向かってきていた。

老人は挨拶をしようと思った。孫は挨拶した。

「こんにちはぁ」

か細いけど可愛げのある声だった。だけれど、老人と孫は次の瞬間には灰に変わってしまった。緑に燃えて。

「錯覚じゃない」

峰寺は灰を一瞥してから、そこに老人と孫がいたことなど知らなかったように、通り過ぎる。

「錯覚じゃない」

彼女には声が聞こえていた。呪っていた。

燃やせば呪いの声は消えた。だから彼女は通り過ぎる人を燃やした。

「錯覚じゃない」

何の抵抗をする間もなく灰に変わる陰人を、可哀想だと彼女は思った。だから彼女は燃やす。呪いの言葉は邪魔だとも思うから。

彼女は思う。人が人を呪うのはその人が憎いから。憎しみを心で燃やしているから人は人を呪う。皆を呪っている私は人を灰におとす。

灰は考えることが出来ないから私に呪いをかけることは出来ない。私は繰り返し呪いを彼らにかける。灰に彼らをおとす。すると彼らは灰になってしまうから呪いをかける前に思考が出来なくなってしまう。だから私は彼らを灰にする。灰にすれば思考は出来なくなる。

彼女はそう思いながら同じ言葉を呟く。

「錯覚じゃない」

「錯覚じゃない」

「錯覚じゃない」
うわ言を繰り返しながら人を灰にする。そんな彼女の近くで、レケは、ぶつぶつと呟かれる言葉の一字一句を聞き逃さぬよう、峰寺の脇から離れぬように歩く。もはや夕焼けに街は染められている。陽が落ちれば、レケは品行の良い少年に転じてしまうから、その前に峰寺の破滅的な様相を少しでも楽しみたいと考えていた。
――アタマガ、ワルインダヨ。
夕焼けが沈むときにレケは彼女を心内で馬鹿にした。髪の毛の内側で決して峰寺が気がつくことは無い侮蔑を浮かべてから、少女レケは、少年レケにバトンを渡した。その時は丁度、また別の陰人が緑に燃えて灰におちていたところだった。眩暈を起こしながら意識を切り替えて貰ったばかりの少年レケは、ぶらつく視界で、その灰をみた。
「…ひどいなあ…」
「錯覚じゃない」
「…峰寺」
「錯覚じゃない」
「ねえねえ」
「錯覚じゃない」
「灰燼に帰すだね、みんな」
「錯覚じゃない」
「せめて焚き火の役割とか果たしてみたいだろうに」
「錯覚じゃない」
「とりあえず地下室に帰ろうか。もう陽が暮れたんだよ？」
「錯覚じゃない」
「ああっ」
蛍のように、暗闇の中で光が走る。また陰人が燃えてしまったのだ。
「……」
良心的レケはこりゃやばいと思った。なんか知らんが完全にキレ

てしまってるじゃないか、と。
「錯覚じゃない」
向こう側からまた一人来てしまった。髪の毛のベールに身をくるんでいる陰人の足元の黒髪から、音も無しに突然の出火。蛍火は一瞬にしてその人の足元から頂点まで駆け登り、悲鳴が起きる間もなく髪の毛は灰へと変わる。ベールの内側にある肉体ごと、ぱらぱらと地面に散る。
「…や、やめろって。…こういうの！」
意を決してレケは、峰寺のカツラを思い切り掴んだ。迂闊なのは承知の上であり、下手をすればレケ自身が燃えカスになってしまう可能性ももちろんあったが他に方法が彼には思いつかなかった。レケの幼い手に引っ張られたカツラがずるりと落ちて、峰寺の銀髪が顕になる。そして光を吸い込みすぎず弾きすぎることのない瞳も。
怒りもしくは憎悪。充満した感情が溢れ出ている瞳が、レケへと向けられる。
その恐ろしさにレケは、一瞬息を止めてしまったが、ムッとした顔をすることで恐ろしさに耐える。ただ結局、それは耐えるというよりは耐えようとしたという程度で終ってしまったのは、あまりに峰寺が鬼気迫る様相を呈していたからで、その鬼気にやられた少年は身体ごとのけぞり、そして奪い取ったカツラも地面にぼとりと落としてしまうのだった。
その茫然自失を、鬼気迫っている峰寺は見逃さず、のけぞった少年の頭部はむんずと鷲掴みにされた。持ち上げられて、彼女の目の前まで。峰寺の、元々はロボットのものだった端整な顔立ちと、その顔の中にある峰寺らしい瞳。普段よりはるかに鋭い眼つき。
「レケは、どっち？」
半笑いで言葉を放つ。意味もわからず、レケは答えることが出来ない。
戸惑ったまま、峰寺に鷲掴みの宙ぶらりん状態で、顔の中は汗だくだった。普段からともに行動しているレケでもこの時の峰寺はあ

まりにも人らしく見えなくて嫌だった。恐ろしくて、髪の毛のベールなしではとても直視できない顔だと思えた。
レケは何も答えることができない。
灰色の街で、
陰人たちは燃やされ灰におちるその中で、
少年と銀髪の女は、しばらくの時間見つめ合っていた。
傍らは脅え、傍らは鋭く。
彼女はもう一度尋ねた。
「あなたはどっち」
少年は一言も答えない。ただ小刻みに震えているようではあった。

夜に音は鳴らず、沈黙がただ走っているそこで、何時までも二人は見つめあうようでもあった。きっかけが無ければこのまま一生、そのままで動かなかったかもしれない。
だが再び陽が登って少年が少女に変わったその時に、峰寺はその顔に浮かぶ侮蔑を見た。
灰、灰、灰
頭脳を握り締めておとす。
粉々に崩れ落ちた。
峰寺はレケを灰に変えてしまったのである。
彼女が少し我に帰った時、既にレケは宙に散っていた。

灰

崩れ落ちる灰。朝日が昇りあがる灰色の街で、灰は灰色を宙で撒き散らしながら地におちていく。その瞬間、ただの灰になったそれが、おちておちておちておちて、

「ああ、ああああ、ああああ」

彼女は先程まで頭脳を握り締めていたその片手で、おちてしまっているそれを掴もうとするような、そんな空しい仕草を繰り返していた。何も事実は戻ってきてくれないで、灰がただただ地面に朽ち果てていき風に吹かれる。

彼女は喚いた。「いや、いやだ、いやだ」と叫んでさえもいたし、「どうして」という言葉でさえ。叫ぶだけのことを繰り返す。彼女は灰を手に掬い取ろうと、湖から水を掬い取るように、手のひらをすぼめてひたすらに灰を、掻き集めようともする。

だけど、ぱらぱらぱらぱらと、灰はただひたすらに灰でしかなく、その事実を確認すれば、さらに取り返しのつかない事態を犯したことに気がつく。彼女は、その犯した行為の、その重たすぎる重みに、今その瞬間心の奥底から表面まで全て、捕らえられようとしていた。彼女は朝日が昇りあがる中、へたりと、美しい銀髪をゆらしながら、放心して膝から落ち、ただただ今まで時を共にしてきたその側近の、そう、レケ、レケを、自分の手で灰におとしてしまったという事実を、目で、黒目で、今その瞬間止まることのない落涙が始まった黒目で。

見る以外にはできなくなった。かつてレケだったそれが今は灰だということを、ただただ見るしかなくなった。

掬い取っても風に吹かれて消えてしまうその、それを、その灰を、どうしようもない後悔の気持ちと一緒に見るしかなかった。見るほかにすることはなかった。

それ以外にどうやって今の事実を、確認することが出来るかと言え

ば、どうしようもない話で、灰に変わってしまったということで、ただそれだけのことで、目の前で灰が風に吹かれて消えていく。
さっきまで彼女をなだめようと必死になっていた少年の姿は、もう彼女の目前にはいなかった。彼女を嘲笑った少女の姿も、今は、彼女が自らの手で燃やして消し炭に変えたからこそ、いない。彼女が葬ったのだ、自分自身の。その、手で。彼女は、レケを殺した。数々の陰人を殺したのと同じように彼女は、長らく続いてきた関係の全てを断ち切るように、共に生きてきたことを無かったことにするかのように、彼女はレケを灰に落とした。
その、事実を。彼女は灰を、ひたすらに、涙を流してへたりこんで、事実を、転がってしまっているその事実を、取り返しのつかない行為をしたその形跡を、ただただ、ただただひたすらに、見ることしかできなくなった。
朝日に照らされながら、彼女はまるでおかしな死刑囚だ。
自ら今先程犯した、その罪状を、自ら確認していた。
「…あ…ああ…？」
わずかに残っている、まだ風に吹かれていない灰を、彼女は涙を拭って濡れた指で、拾い上げようとするけれども、湿っている手で触れては灰は掴めるわけもなく、灰は湿ることによってべちゃべちゃになって灰ですらなくなった。彼女は灰を舐めてみるべきかとも思ったが、もうどうすれば良いのかわからなかったので、その答えを出す前に彼女はもう灰を舐めてしまった。灰の苦味らしきが口全体に広がり、彼女はそして余計に涙を溢れさせてしまって、結局、自分の行ったことを彼女はさらに確認することになり…。
彼女は取り返しの付かないことをした。
彼女は取り返しの付かないことをした。
彼女は取り返しの付かないことをした。
レケだった灰は、風に吹かれて、街の空へと吸い込まれて。
灰色の一部となってレケでも何でもない灰色となって空気へと混じる。

世界を覆っている空気たちは峰寺を嘲笑いながら彼女の鼻から吸い込まれ、口から吐き出されることによって、彼女を内側から嘲笑っている。空気たちは邪悪だ。

ビルディングは無機質の圧迫さで彼女に逃げ場が無いことを暗に伝えることで、彼女を世の隅に追い込んで墜落させてしまおうと企んでいる。ビルディングは邪悪だ。

時折通過する陰人は、白痴のように地面でしどろもどろになっている彼女を一瞥して、すぐに目を別のところに離して避けることで、彼女がこれから一人だと、孤独だと、伝えるようで恐ろしい。陰人は邪悪だ。

彼女を取り巻く世界は邪悪で構成されており、呪いとして駆け巡り峰寺が一人だと教えている。彼女は憎悪だらけの世界でレケを失った。彼女は呪いだらけの世界で頼りを失った。彼女は孤独だらけの世界で仲間を失った。彼女は憎悪だらけの世界で憎悪に取り囲まれた。

頭を両手で抱え込みガタガタと彼女は震える。ロボットから奪い取ったその端整な姿で、彼女はがたがたがたがた壊れてしまったように震える。そして、それ程に自分が震えていると気がついた時に。

もう手遅れなのだと、悟った。

故障しているのだと。

彼女はぎこちない動作ながら、膝を直立させ、二つの足で立ち上がった。

灰色の街を見渡した。その後に、向こう側から歩いてくる陰人を、無言のまま灰に落とした。

彼女はため息を付いた後に。よたよた、ふらつきながらも、再び歩き出す。

「錯覚、じゃ、ない」

言葉も片言のようになった彼女は、はたから見れば、人間になることを諦めて壊れてしまった機械のようでもあった。それが街を徘徊して、出食わした相手を灰におとす。しっかりと歩いている人々

は燃やされ灰になる。故障した者に滅ぼされて、すぐに終る。
その日、街の外を出歩いた陰人は、帰宅することなく全員が行方不明となった。そのことから灰色の街の通路を出歩く陰人は一人もいなくなり、常に静寂が漂う人っ子一人見当たらないゴーストタウンのような有様となった。みんな脅えて外出することは出来ない。
なぜならば、故障した快楽殺人者は出くわした相手を灰におとす。
故障した快楽殺人者は街を徘徊しながら思う。
邪悪な陰人は燃やせば灰になるから良いし、建造物だって燃やせば崩れ落ちるのだから問題無い。問題は空気だ。空気は身体に入り込んできて循環するものだから滅ぼそうと思っても生きるのに必要だから滅ぼせない。邪悪な全部を燃やさなくては世界は邪悪なままだと思うけれど、空気は私が生きていくにも必要だから燃やすことは出来ない。それは、困ったことだ。
峰寺はそんな可笑しなことを考えながら、まずは小さな邪悪からということで、通り過ぎる陰人を燃やすことはしっかりと欠かさなかった。
ふと、人を燃やしながら建物を燃やした方が効率的に全部燃やせるかもな、とも彼女は考える。人を燃やしてから建物を燃やすのでは、効率が悪いような気分がして、今からでも通り過ぎた建物全部燃やそうかな、とも考えた。そんなことを考えているうちに彼女は街の出口まで歩ききってしまったので、折り返してまた街を歩き始めた。
彼女はどこまでも何時までも、街を徘徊していた。

屋上　植木鉢

「うまくはいかないものだねえ」
四方を囲まれているその屋上で、虚偽から湧き出てきては着地する植木鉢が、一つや二つどころではなく際限無しに引っ切り無しに。
『目』と『口』たちは、むにゃむにゃと眠そうにしながら何も言わず、屋上でぼんやりと存在している。
「ええ」
屋上はビルディング。四方を囲まれているその屋上で、柵に寄りかかっている男が二人。二人とも黒いスーツに身を包んでいて、片方は中年男性で、片方はごっつい身体の青年だった。
何冊も転がっている本たちは古びていて、黄ばんでいる。ぱらぱらとページが風に吹かれてめくれている。蘇芳色、瑠璃色、白色、黒色、様々なハードカバーの本たちは、読んでくれる人がいないから、屋上で眠りこけている。
「預言書は案外あてになるものだ」
空は青々と隅々まで広がっていて、雲は綿のようにちぎれ細かいものばかりが多数、ぷかぷかと呑気に漂う。ゆっくりと流れる、ビルディングの屋上の時間。中年男性の吸っているタバコの煙が、風に流れて帯状になっている。
「ですね」
ごっつい身体の青年は、柵から少し身を乗り出し、ビルディングの下方に広がる、灰色に暗い通路を歩く一人の女性を、潤んだ瞳で見つめた。青年は、右手をその女性に向けて伸ばす。
「恋しいかな、哀れで」
中年男性の言葉を聞いた青年は、小さく頷いてから、その伸ばしていた右手を引っ込めた。
「それでいい」
彼はタバコを下方の通路向けて、落とす。タバコはしかし、途中

で何か空間のネジれに巻き込まれたかのように、消えてなくなってしまった。通路にタバコは落ちない。
「…見えるのに何も出来ないなんておかしいじゃないですか」
タバコが消えるのを見送ってから、青年は目を細めた。そして悔しそうに拳を握ると、柵に、弱弱しくそれを叩きつける。どん、どん、とやりきれなさをぶつける彼は、涙を潤ませたまま、何度も何度も弱弱しく拳を振り上げ、下ろす。それを繰り返す。
「あの人は、優しい人だったんだ！　あんな風になっていい人ではなかったんだ！　峰寺様は、あんな風には、なるべきじゃなかったんだ」
ドカンと最後に力強く拳を叩きつけてみせた。鉄製の柵は、あまりの力で谷のようにへこんだ。
その様を横目で確認していた中年男性は、
「あの人が優しい人には見えないけどね」
と少し皮肉めいた口調で言った。彼の皮肉を受けた青年は、鋭い眼光を相手に向けてからもう一度拳を柵に振り下ろす。谷が二つになった。
「優しい人に見えなければ優しくないんですか！　あんたに何がわかる！」
息を切らしながら激しく怒号。中年男性はあまりの勢いに、ちょっとひいた。
「…落ち着け、落ち着くんだ、パズィーくん」
「落ち着けるわけないでしょう、部長」
パズィーと部長はしばらくにらみ合う。そのまま幾ばくかの時間が流れる。
だが、背後からの声が二人の沈黙をやぶる。
「ぷぎゃあ」
赤ん坊のお腹を思い切りつついたら溢れ出る呻きのような、可愛らしいといえば可愛らしいその呻きは屋上にとどろいて空に吸い込まれていった。部長とパズィーはその声の発信源をみやる。パズィ

ーは小さくため息をつく。
「…また、殺してしまったのか」
植木鉢。植木鉢がまた一つ、『目』と『口』がくっ付いているのが屋上のコンクリで横たわった。可愛らしい声を出したのはその植木鉢に他ならない。虚偽から湧き出るように、空間を切り裂いて宙から突然、それは現れる。峰寺が人を殺すたびにその虚偽は誕生していた。
「演じていていた肉体から剥がれ魂は植木鉢に納められる。次元の違う世界がこの屋上で交錯して混ざり合い、化学反応を起こすかもしれない。虚偽ばかりが積み重なることで本物が出現する可能性だって皆無ではないのならば」
部長は歌うように言葉を並べながら植木鉢へ、ゆったりと近づき両手で持ち上げた。
パズィーは柵に寄りかかったまま、力無い瞳でその様を見てる。
部長は歌うように言葉を並べる。
「虚偽か真実かなどの論議よりも娯楽を求めて踊り続けよう。だが論議でさえも娯楽になりえるというならば、私たちの魂さえも娯楽の一部だと傍観者は伝えているのだろうか。虚偽ばかりが積み重なったこの屋上で交錯して混ざり合い、新たな魂が新たに旅立ちを行うために私部長が君を導いてあげよう。変態じゃない！」
部長の歌うような言葉に合わせて、両手で持ち上げられて天に捧げられているような様になっている植木鉢から、タオの陰陽のように二色に分かれている球体が、朧さを漂わせながらにじみ出てきた。赤と青の二色。濃色ではなく薄い色をしたその球体は、ふわふわと植木鉢から旅立ち、やがて地面のコンクリに着地して、そして、一鳴きする。
「ぷぎゃあ」
可愛らしい声を放つそれは本物の赤ん坊のようでもあった。
部長は植木鉢を置くと、赤青二色のその儚げな球体を、何をするでもなく見つめた。パズィーも柵に寄りかかっていた気だるそうな

身体を持ち上げ、だらだらしながら部長の元へと近寄った。コンクリに散らばっている様々な本を踏まないように気をつけながら。
部長とパズィーはしばらくそれを見つめることで、屋上での時を過ごした。
雲がそんな二人を見下ろしている。雲はちぎれていたり、動物の形をしていたり、城塞のように勇ましかったり、魅力ある姿で常々に見下ろしているけれど、何時だって二人のところに降り下ってくることはなく、一日ただただ彼らを見下ろしては、嘲笑うように空を翔けてどこかに消えていく。左から右へ。右から左へ。次の朝に、また現れては消える。屋上にいる二人とはまるで無関係であるように、そ知らぬふりをして悠々と。
「ぷぎゃあ」
魂のように儚い球体は、もう一度鳴いた。可愛らしい声で鳴くそれに、二人は癒されている。
「この魂は、一体どのような存在だったのでしょうか」
パズィーが静かに言葉をつむぐ。
部長が静かに答える。
「赤青の二色ということには、何かしらの意味があるのだろうね」
「そうなんでしょうか」
「きっとね」
二人は平坦な感情で言葉を掛け合う。
雲が流れていく。言葉が流れていく。
「ぷぎゃあ」
魂は、再び鳴いていた。命の躍動のようであった。

漂流

彼女の乱れが無かった銀の髪は、長い徘徊のうちに痛み、ぼろぼろになり、パーマがかかったかのように右へ左へ跳ね回っていて、それが彼女の胸の辺りにまで伸びきっている。蒲色のポンチョには汚れが染み付き、二度と剥ぎ落ちないほどに染みこんでいる汚れのようであった。だが顔だけはロボットの端整さを失っておらず、瞳の光も、吸い込みすぎず弾きすぎず、彼女らしい瞳の輝きはそのままに、歩き続けている。

彼女はもう街にはいない。灰色の街をふと抜け出た彼女は、草原や山や丘や動物たちがはこびる人の居ない世界を、ほとんど舗装されていない道を、時折ふらつきながらも歩き続けていた。

誰が作ったのかわからない向日葵畑で、向日葵が立派に茎を伸ばしていた。でも、誰が作ったのかは、周辺に家も人もいないからわからない。彼女は一日、その向日葵畑を、体育座りをして見つめていた。人は現れずただただ一人、彼女は向日葵畑を一日中眺め、そして何時か、その場を後にした。

雨が降っている日。彼女は天然のシャワーにはしゃぐことも無く、また避けることもなく、雨の粒たちをその身で受け続けた。ニヤついているその微笑みを絶やさぬまま、何時までも雨を受け続け、やがて木造の、古びた、一間しかないような空き家に入り込んで、その時になってようやく雨を避けた。

そこには畳が四畳。壁や天井には人の顔。

人の顔。人の顔、一つだけではなく、壁と天井に詰まっていた。

彼女は何もいわず、目を見開くこともせず、畳に腰を下ろして、雨で冷えた身体でガタガタと震えた。はじめは小さい震えでも、時間が経てば経つほど、地震の揺れがどんどん激しくなるのと同じように、彼女の震えは激しくなっていた。顔も蒼白になってしまっている。

だけど、壁や天井にある人の顔たちよりは、生気はあって、壁や天井の人々はうっすらとした微笑を浮かべながら、血の気が無い。血が全て失われてしまっているのだと想像をつけることが出来るような、そんな表情を全員が同じようにしている。その中で彼女は、生気が少しだけ。

「こいつらが向日葵畑にいればいい」

とだけ呟いて、後は口を閉じた。

ガタガタガタガタと震えていた。外からの雨の絶えない音。地にぶつかって弾けている水の音。断続的に彼女の耳に鳴り続け、止むことは無く、彼女の耳へと雨の音が連なる。歯がガチガチと震えの音も鳴らしながら、雨の音。四畳の、くたびれている空き家で、窓が一つだけしかない古ぼけたそこで、彼女は雨が落ち着くまで、ガタガタガタガタと震えていた。

ロボットの身体のおかげか、一夜過ぎれば、彼女の震えは止まっていて、生気も多少取り戻していた。雨が止んだ曇りのにごっている空へ、彼女はゆっくりと歩み出る。また、彼女の歩行は始まった。

次に巨大な門にたどり着いた。ただただ巨大な門で、金色に光っていて派手だった。人がたくさん集まっていて。彼女はそれを全部燃やしたいと思ったが、しかし彼女が一人で燃やすにはあまりにもそこにいる人数は圧巻だった。お祭りが始まる前夜であるかのように、彼らはお互いに心の昂ぶりを確認し合って共感している様子に見えた。彼女はそれに対して苛立ちを感じながらも、その金色巨大門が何の為にあるのかは知ってみたかった。そんなことを思いながら呆然とその場で立ち尽くしていると、一人の男が彼女に話しかけた。

その男の身体はごっつく、力強さに溢れていて、昔彼女が知っていた人物に似ていた。豚になれる人の姿と酷似しているな、と考えて、だけどそのことについて考えると暗くなってしまうから、彼女はそれについて考えることをやめて、男の話に耳を傾けた。

「先日、ようやく完成したんです。あなたはそんなにみずぼらしい

格好をしておりますが、食べ物や服を恵む余裕が私たちにはありますから、そこのテントに寄ってはどうですか？　いろいろと手助けできることと思いますし、今、この金色門に集まっている人間たちは皆、この建造物の完成に感極まっておりますから、気前の良い者ばかりです。きっと、疲れ果てた様子のあなたに幸せをわけてくれることと思いますよ。金色門は、人の幸せを願う人々が集まって作られたオブジェですから」

「そうなのですか」

彼女はそこまで聞いて、男から背を向け、すたすたと立ち去った。男は、「あっ」と呼び止めようとしたが、彼女はどんどん遠くへ行ってしまった。彼女は、金色門のざわめきから、すぐに遠のいた。

男も無理に引きとめようとは思わなかった。しばらくは彼女の後ろ姿を見つめていたが、やがて彼も金色門を共に完成させた仲間たちと、歓声の宴に酔いしれる方向へと転じた。男は、彼女のことを頭から忘れた。

「人の幸せは金の色」

男には聞こえない独り言を呻いた彼女も、しかし金色門のことをすぐに忘れて、再び、歩いた。道を、歩き続けた。やつれながらも、何日も取り替えていない服を泥や水溜りで汚れさせながらも、歩いていた。

今なら絶対世界を滅ぼすことが出来るのに、と脂肪の粘ついた余分な存在が頭に幾つも引っ付いているような気分がして不快に思いながら、しかし滅ぼせると、彼女は思う。

預言者の遺した預言に従うように、彼女は一度世界を滅ぼすことを怠り、それによって大木になりパズィーも仲間たちも見捨てて時を越えた。彼女はかつて選択をした。大木になるときに世界は彼女の二者択一によって滅びるか続くかの選択を迫られた。だけど世界は続いて、彼女は大木になったまま時を越えて、だから桃色甲冑騎士は預言書の通りに世界の頼りになることはなかったし、爬竜人と陰人の争いも続いているままで、世界が続く選択を選んだ彼女も憎

しみを携えたままだった。結局。結局。結局。結局。結局。結局。

「全員抹殺だよ」

彼女は大木から人間に戻ったときに呟いたその言葉を、頭でもう一度繰り返してみて自嘲した。『なにをいってるんだ』と思う。結局、ふらついたままに、全てをはっきりさせないままにぐらぐらして、だめになっていくばかりじゃないか、だめじゃないか、どうしようもないじゃないかと思う。

頭がおかしいと思う。歩きながら思う。結局頭がおかしかったんだと思う。何も感じず何もかも忘れてぼんやりと生きていればそれでよかったんじゃないかと思う。全員抹殺なんてカッコつけてただけだと思う。意味わかんないと思う。なんでそういう決意をしていたのだと思う。馬鹿みたいだと思う。全部消えてしまえばいいと思う。全て無かったことにしてしまえばいいと思う。全部死んでしまえばもう考えなくて済むと思う。夢でした、となってしまえばいいと思う。現実ってなんですか、という頭がおかしな狂人になってしまえば良いと思う。臆病者になってしまえばよかったと思う。まわりの人間たちに脅える小物になっていればと思う。びくびくしてるうちに死んでしまえばよかったと思う。もっと楽しいことだけ考えてれば良かったと思う。毎日毎日ぐーたらしてればよかったと思う。何もせずにぼんやりしたまま何もしなければ良かったと思う。みんな死んでしまえばいいと思う。あ、向日葵畑にいこうかな。

彼女は方向を転換して、歩いてきた道を再び足でなぞった。金色門のざわめきを通り過ぎ、古びていた四畳の空き家も通り過ぎ、再び人も何も辺りには無い、向日葵畑へと到着した。

曇り空の中で、彼女は向日葵畑を見渡せる丘で、体育座り。何日か前にそうしたように、柔らかな風に浸りながら、向日葵の黄色を目に焼き付ける。曇り空の中でも萎れないその向日葵のおかげで、一時的な安らぎに浸りながら、彼女は体育座りをしたままそこにいた。

やがて立ち上がった彼女は、丘を下り、向日葵畑に初めて足を踏

み入れた。
背の高い向日葵たちは逞しく咲き誇っている。その茎の一番細いところに彼女は目がいった。細いそこには産毛が何本も生えていて、細いその部分を心持ち包み込んでいるように見えた。産毛をしばらく見てから、彼女は笑った。大きな声で笑った。どこまでもとどろくような大きな声で、笑った。産毛からは目を離さないままに、笑った。そして、そこに火をつけた。ジュッ、と茎と産毛は灰におちて、それに伴って向日葵は崩れて横たわった。
彼女は火をつけて回った。緑の炎で茎を灰にして、向日葵を崩れさせることに興を置いていた。
全てを横たわせた頃、息を切らしながら彼女は天を仰いだ。曇り空で灰色の鬱蒼としたやるせない天空を眺めた。
すると、天を何かが漂流していた。見たことの無い、雲でもない太陽でも鳥でもない、おたまじゃくしのような精子のような魂のようなそれが、空中で何本もへにょへにょと尾らしき余韻を残しながら、空を漂流していたのであった。灰色の濁っている空に対して純白なそれは光り輝いているようにも見えるが、見ようによっては別に白いだけのようでもあった。
彼女はそのわけのわからないものの正体を暴こうと思い、それが流れてくる方向へと足を進めようと思った。根源地を探したいと感じた。ゆったりとした足取りだったが、そういうわけで、止まらないままに道を行く。
雨に降られたり、落雷が生じたりする中。
金色門に辿り着いた時に、彼女は立ち止まった。
そして目を見開いて、事実が残酷なほどに主張していることを訝しく思う。
事実が主張していたのは人の死で、亡骸の惨たらしい出血が静まり返っている金色門に静寂と残酷さを伝える。
人々の歓喜は邪悪に奪われるのだ、と彼女は呟きながら、目の前にあった女性の亡骸を跨いだ。腹からさばかれていた。

男性もさばかれていた。胸からさばかれていた。金色門に集まっていた幸福を願う者たちは呆気なく、くたばっていて、彼女には地獄を伝えている。生きているものが死に幸福の願いを伝えたいと願う人々が彼女に不幸を教えていた。残酷さを。

血の湖を渡り歩きながら、彼女は金色門が漂流していたものの出所だと知った。

おたまじゃくしのような精子のような魂のような、純白の、尾のついたひょろひょろとした球体のそれが、儚げに金色門から溢れ出て、濁り空へと飛び立っていた。

「どういうことなんだろう」

人の作った建造物から溢れ出る、未知な、しかし儚くて弱々しいそれを見送る。

彼女は門に近づき、その金色門をくぐった。くぐれば何かがわかると思ったからだ。

くぐった先は、崖になっていた。そして、その崖の下では、争いが起きているのだとわかった。

爬竜人と陰人だった。右側は爬竜人の緑の鱗が密集して、緑のヘドロの海のよう。左側は陰人の黒髪が密集していて、墨の海のよう。それがぶつかり合っている、向こう側。

彼女は崖からそれを見下ろしながら、金色門を作った人々は彼らに殺されたのだろうかと想像し、きっとそうなのだろうな、と確信に近いものを感じた。

結局、何もしないまま、彼女は崖から退いた。

金色門と血の湖。それを跨いで、彼女は飛び立っていく、儚い純白へと目を向けた。

それを追いかけた。歩いて、今度はその空を漂流する純白の方角へ、歩いた。

それは天を漂流する。彼女は地を漂流する。

金色門と血の湖。そして向こう側の戦争の情景。

その場所が、彼女とそれらの、出発地点だった。

漂流、漂流。
どこまでも漂流。

朝日

曇り空は終らず、風も少しあって、草木が葉を揺らしている。山に囲まれている広い草原を抜けて、彼女は海を見た。波打つ海岸に砂浜。陸は途切れていてそこからは水の世界。空を飛んでいる尾を引く白い物体は海など関係なく進んでいくが、彼女は砂浜で足を止め、ただ波打つ広大な海原を見やる。呆然と立ち尽くし、空を見上げれば、彼女のことを置いて、どこかへと純白のままに飛んでいく白いそれら。

「あぁぁぁぁぁぁ…」

砂浜で、彼女は腰を下ろした。海の中を突き進んでいこうとは思わなかった。

藍色の海は薄暗い。波だけがザー、ザー、と騒がしい。小さな蟹が何匹も群れを成して彼女の前を横切る。蟹歩きで、彼女の方を見つめたまま、蟹は横切る。

その蟹が歩いていった方角に、一台の自動車が置かれていた。自動車と言っても動く気配のない、錆だらけの茶色い塊といった雰囲気の、鉄塊だ。

「……！」

彼女は目を丸くして、下ろしていた腰を、ゆっくりと持ち上げた。立ち上がり、その蟹の集団が向かっている鉄塊の方角へと歩んだ。そこにいる『屍』が何者なのかと思いながら。

それは、鉄塊のフロント部分に胡坐を？いて座っていて、なぜか、信号機を担いでいた。なぜ信号機なのかはもちろんわからないが、その信号機もただの鉄の錆びた棒だと言えた。触ればじょりじょりした不愉快な感覚が襲い掛かってくるような、そんな古びた信号機。その『屍』はそれを担いでいた。

人間だったのだと、わかる。その『屍』は白髪が茫々で、ぼろ布を身に纏っていて、骨だけだった。

蟹の集団たちは、器用にも足元から骨を登って、頭蓋骨辺りを宿にしているようだった。彼女が、
『屍』の頭蓋骨にコツンとデコピンをすると、眼球の無い瞳の奥で、蟹の影がわしゃわしゃと動くのだった。錆びた自動車。信号機を担いだまま、そこに座る骨の屍。そこを宿にしている器用な蟹。
合わせ鏡があれば、そこに屍となっている存在は今の自分とそっくりなのではないだろうか、と彼女は感じる。そう感じると何故だかはわからないが彼女は自嘲の微笑みを浮かべたくなり、そして浮かべた。すぐに、笑い声が漏れて、砂浜で一人、彼女は海原へと響く大きな笑い声を上げた。
笑い終えた彼女は、もう一度頭蓋骨にデコピンをして、中にいる蟹たちを困らせた。
「何がどうなってこうなったんだろうね、あなたたちは」
彼女は不思議に思った。死んでしまっている物が三つもあって、それを宿にしている生き物の集団が一つある。それはどういう巡り会いで出会い、今砂浜で沈黙しているのだろうか、それを知りたいと彼女は思った。
しかし、彼女はもう一度天を見上げた。そこでは金色門から旅立った、尾を流すそれらが、漂流を続けている。しばらく見上げて、全てのそれらが通り過ぎるまで見た。彼女は、彼女のことをそれらが置いてけぼりにしていくのを、自ら見送った。
やがて夜になった。
蟹たちは発光するらしく、屍の頭蓋骨は、瑠璃色に輝いている。信号機も錆びているのに、三色のライトを点滅させていた。車もテールランプだけ、点滅している。錆びていても何故動いているのか、それは彼女にはわからなかった。屍を華やかにするために輝いてるのかもしれない、とも思ったが、一つの人間の屍のために物や生き物が光ることをするなんて、そんなことあるわけないなと思った。あってはならないとも。
やがて朝日が昇った。真っ赤に、水面を割って、太陽が力強く。

信号機や車、蟹たちはそれに合わせて沈黙した。輝くのを止めた。
蟹たちは頭蓋骨から器用に降り下り、砂浜を散歩し始めた。
彼女はそれを体育座りのままに、見送る。その様を、とりあえず、見送る。
自分もここで屍になれば、夜に輝かせて貰えるのだろうか、と考える。自動車や信号機や蟹たちが、夜に輝かせてくれるのだろうか、と思う。
そして、願ってもないことを考えるもんじゃない、と頭を振った。
彼女は立ち上がる。
太陽の誕生は鮮血のよう。活き活きと、今日を力強く生きる。
それを見ながら、彼女は額に、指を置いた。
人指し指を額にくっつけて、そして目を瞑った。
目を瞑っていても朝日のまぶしさが目に入り込んでいた。耳には絶え間なく波のザー、ザーという音が断続する。
彼女はニヤっと微笑み。
「終った」
灰へとおちて、砂浜に骨も残さず、粉塵として風に舞った。
峰寺の命は、こうして、無に還った。

屋上で。
魂たちが集まっていた。
その中に、新たな魂がまた植木鉢となって転がった。
そこから浮き出てきた魂が、キョロキョロと脅えた眼で、周囲を窺った。
たくさんの魂が、いた。
「お話でも、しましょうか」
彼が魂に話しかけた。話しかけられた魂は、気まずそうに屋上の隅へと逃げた。
その魂を男は抱き上げた。

「いまはいろいろなことをわすれて」

魂は泣いた。泣いて、叫んだ。
男に、魂は抱きしめられた。ぎゅっと、何時までも、抱きしめられ

ていた。

ただ、それは彼女の魂の見た、幻にすぎない。
人をないがしろにし燃やし尽くした彼女が本当に救われるはずはない。
だから彼女は己で作る幻の中で、幸せに浸るしかない。幸福に浸るしかない。
それは現実じゃない。幻だ。
彼女の魂を抱きしめているのは幻だ。本物のぬくもりに抱きしめてもらう権利など彼女にはない。
だから徹底的な自己本位とは、エゴとは、現実と幻覚を全て己の望むがままに捕らえてごっちゃにし、理想的な視界を作り出しその中で浸ることなのではないだろうか。
彼女の魂は、エゴイストの魂だ。
だから一人ぼっちのまま、幻覚の中で一人遊びを、続けるのかもしれない。
これまで。そして、これからも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1589m/

峰寺

2010年10月8日13時44分発行